e-FICTIONS

SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

ダンガンロンパ十神（中）
希望ヶ峰学園vs.絶望ハイスクール

佐藤友哉
Illustration／高河ゆん

星海社

CONTENTS

いけない。そこを開けては。塚の通い路の、扉をこじるのはおよし。……よせ。よさないか。姉の馬鹿。

（折口信夫／死者の書）

本テキストを書くにあたり、次の筆記システムを使用した。

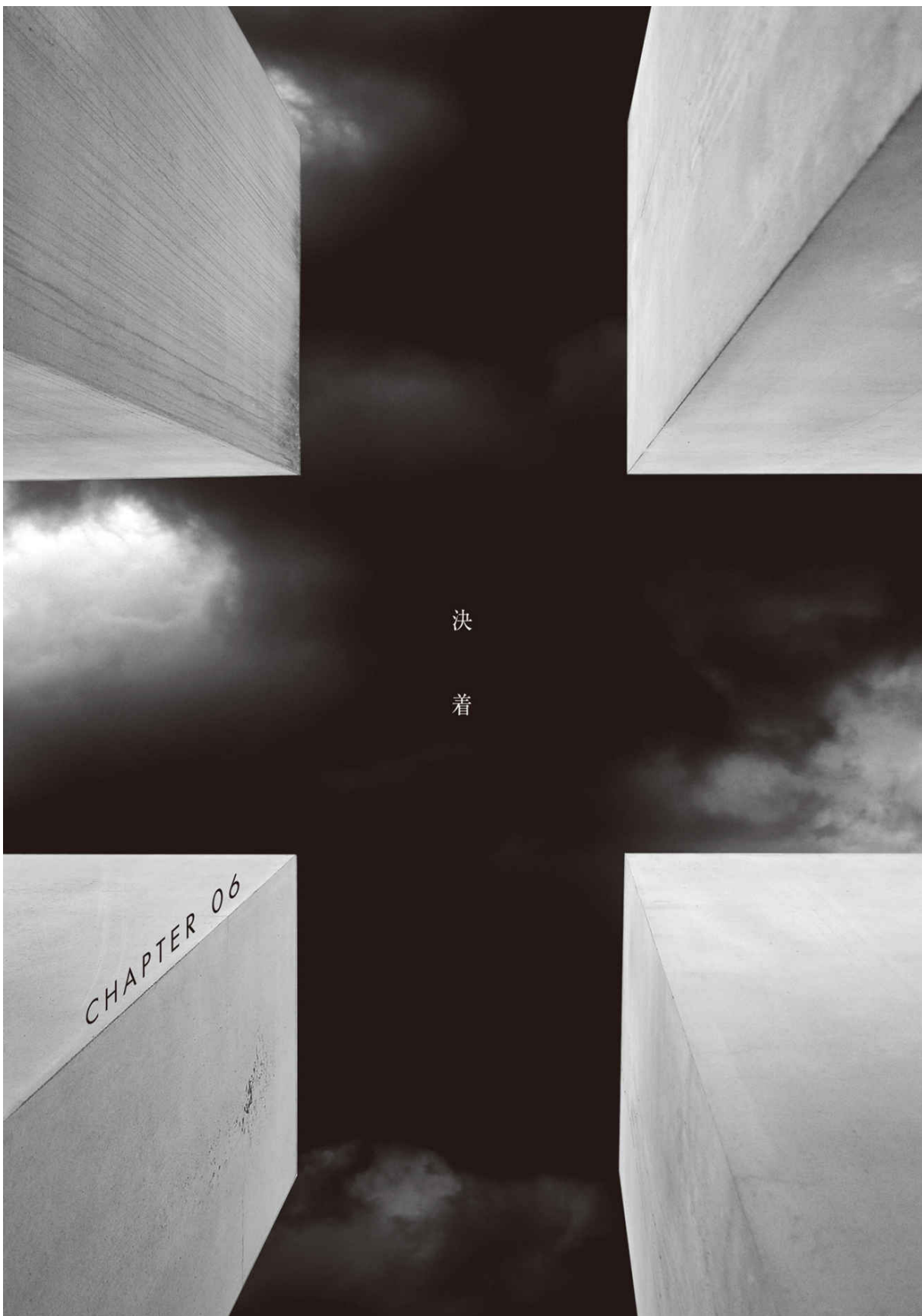
k2k-system ver2.3

贋作（がんさく）。模作（もさく）。偽作（ぎさく）。二次創作の二次創作がはびこる世界で、よく耐えていると思う。システムの頑丈さと愚直（ぐちょく）さには舌を巻くしかない。

そんなわけなので、僕の仕事といえば、ちょっとした添削くらいだ。身のほどはわきまえている。今回も元気にやってみよう。

はじまり（オリジン）の魂に幸あれ。

あるとすればの話だが。

決着
CHAPTER 06

1

お話は簡単です。ひとりの青年が世界征服をしようと■ました。青年はなみはずれた冒険■かさねたすえに、自分のほしいも■■手に入れ、無事■帰■■とができま■た。めでたし■■■し。
問題は、そこに至るまでの■■です。

2

「絶望ハイスクールへようこそ。あなたのニセモノ……『絶望高校級の詐欺師』さんのいる最上階へ行くには、各階で待ち受ける生徒を撃破しなければなりません。ですがあなたは、ここでゲームオーバーとなる運命。『絶望高校級の王女』こと、ソニア・ネヴァーマインド

が、華麗に撃滅してさしあげましょう。召しませ、ファントムアロー！」

と叫んだソニア王女が倒れています。

左右田（そうだ）さんも、鏡佐奈（かがみさな）、鏡那緒美（かがみなおみ）とそれぞれ名乗った少女たちも、夜の校舎に散らばり、目覚める気配はありません。

3

ゲームは開始し、五分とたたないうちに終わりました。

白夜（びゃくや）様の完勝で。

4

「さっさと起きろ」
白夜様はソニア王女を、靴の先で小突きます。
「な、なにゆえ、これほどの力を……」
開かれた瞳には、混乱の色が浮かんでいました。
「俺は十神白夜だ。身代金目的の誘拐。テロリストの標的。国家間の外交カード……。つねに危機と隣り合わせの人生だ。我が身を守る準備はできている。お前たちなど相手になるものか」
　絶望ハイスクール攻めなど、準備運動にもならないというわけです。
「さてと」

白夜様はごく当然の権利を行使するように、ソニア王女の頭を踏みつけました。
ノヴォセリック王国の王女というプライドを刺激されたのか、ソニア王女は眉を震わせて、「ガッデム」とつぶやきました。
「馬鹿王女、ニセモノの居場所を教えろ。このまま顔面を踏み抜いてもいいんだぞ。腐った床のように」
「ですから最上階です」
「この俺に、最上階にあるすべてのドアを開けさせるつもりか」
「十神さんは不安なのですね。『青インク』さんが、お姉さんが、今ごろ詐欺師さんと乳くり合っているかもしれないと不安なのですね」
挑発に乗るつもりのない白夜様は、タキシードのポケットから、小さなビニール袋を取り出します。そこには白い粉が入っていました。
「自白剤だ。死という副作用があるらしいが、ためしてみるか？　希

望ヶ峰学園を裏切り、『世界の敵』となったお前が死んだところで、泣いてくれるやつはいないだろうがな」
「『世界の敵』は、あなたではありませんか」ソニア王女が言葉を返します。「わたくしが絶望ハイスクールとして暗躍していることは、だれも知りません。いっぽう十神さんは、『世界征服宣言』をしたことになっているのですから、どちらが『世界の敵』でしょう」
「勝てば官軍」
「……はい？」
「たしかに俺は今、お前たちのがんばりによって、『世界の敵』となっている。よもやこのプラハで、フス戦争をやるハメになるとは思わなかった。ヤン・ジシュカが存命中に、教皇領とローマ帝国を滅ぼしていれば、プロテスタントの存在意義は、今とは違ったものになっ

ていただろう」
「まさかするおつもりですか……世界征服を」
「そうだ。十神白夜が世界を征服すると云っているんだ。『超高校級の御曹司』が世界を統治すると云っているんだ。俺はこのゲームに乗る」

▼世界征服をする
世界征服をしない

世界を我がものにすると決めた白夜様は、絶望ハイスクールをさっそく壊滅寸前に追いこみました。この調子なら、あと百ページもしないうちに、目的を達成してしまうでしょう。

白夜様の伝記……『白夜行』には、勝利の記述しか存在しなくなるでしょう。
今まで同様に。
依然変わりなく。

白夜様は神様です。

「馬鹿王女、お前は世界より自分の心配をしたほうがいいと思うが」
白夜様はビニール袋の封を切りました。
ソニア王女は暴れますが、頭をがっしり踏まれているため、串を打たれたウナギのようにむだな抵抗に終わり、「……胸ポケットをおしらべください」と観念します。

取り出されたのは、希望ヶ峰学園のそれを模した『暮らしの絶望学園手帳』なるもので、校内の見取り図が記載されていました。
「十神さん、お望みは果たしました。わたくしを解放していただき……」
「口を開けろ」
「はい？」
「召し上がれ（ドブロウフチュ）」
ぽかんと開かれた口に、自白剤がそそがれました。
白夜様が足をはなすと、ソニア王女は咽喉（のど）の奥まで指を入れて、ごぼごぼと嘔吐（おうと）しました。白夜様はその様子を見届けることなく階段を上がります。
廊下には、ソニア王女が吐き散らすエレガントなサウンドだけが響いていました。

いていました

5

光が差しこみ、そこが校長室であることをようやく理解します。

チェコの校長室も日本のそれと同じなのか、デザインをまるごと替えてしまったのか、ドラマや映画でよく見るアイテム……校旗。標語。ソファ。トロフィーなど……が配置されています。

気になる点を一つ挙げるとすれば、歴代の校長先生の肖像写真がすべて、白と黒のクマになっていることでしょう。

「破廉恥（はれんち）な格好をしているじゃないか」

今までディスプレイ越しに観ていた白夜様が、目の前に。

私は拘束されていました。手も脚もソファごと縛（しば）られて、まともに

私は拘束されていました。手も脚も[illegible]縛られて[illegible]
動かせるのは首くらい。あられもない姿というやつです。
「白夜様、もうしわけありません」私はできるだけ股（また）を閉じました。
「見なかったことにしていただけないでしょうか」
「じつに絶望的だ」
「ですから見なかったことに……」

「イチャつくなよ、本物サン」

校長室の隅に、大きな幕がかかっていました。
そこには希望ヶ峰学園の校章によく似たマークが縫いつけられていまして、あれが絶望ハイスクールの校章なのでしょう。
白夜様の声は、そんな幕の奥から響きました。

ニセモノとわかっているはずなのに、あまりにも再現性が高く、不安になります。
「なんだその物体は」白夜様は幕をにらみつけました。「俺に剝ぎ取ってほしいのか」
「愛する姉との再会はすんだようだな。貴様好みに縛りつけておいたが、そそるか？　自分の姉を、『青インク』を、十神忍を、どうされるとたまらないんだ？」
「愚民に朗報を聞かせてやる。お前がぶち立てた世界征服を、俺が実現してやろう」
「おや意外なことを。本物サンまで、なぜ世界をほしがる」
「ウンザリなんだよ」
「ほう」

「絶望ハイスクールも、祁答院財閥も、初瀬川研究所も、そして希望ヶ峰学園も、欲しているのは世界だ。どいつもこいつも好き勝手を抜かしているが、世界のてっぺんに立ちたいだけ。世界をコントロールしたいだけ」

「斬新な意見だな。国連も、赤十字も、ハワード・ヒューズ医学研究所も、歳末たすけあい運動も、すべて世界征服したがっていると？」

「そうだ。恒久平和を目指そうが、人類滅亡を求めようが、自分の理想を世界に押しつける欲求不満的な行為に変わりはないからな。そんなものはウンザリだ」

　崇高な意志や理念があっても、世界を一色に染め上げたいという欲望は、イコール世界征服。

みんな世界征服したがっている。
「だからこそ、十神白夜が世界征服してやろうというのだ。世界が俺色に染まれば、これ以上の幸福はないからな」
パチパチパチパチパチ。
評価するような軽蔑(けいべつ)するような拍手が、幕の向こうから響(ひび)きます。
「危険思想だよそれは」やがてニセモノが云いました。「絶望的なまでに独裁者の考え方だ。貴様のようなやつは、今ここで死んだほうが、それこそ世界にとって幸福だ」
「俺は死なん」
「ヤン・ジシュカの話をしていたな」
「それがどうした—

「チェコの英雄。史上はじめて機甲部隊を作った男。生涯負けなしの軍事的天才」
「蘊蓄（うんちく）はよそでやれ」
「ジシュカがなぜカトリックとの戦いに身を投じたのかを知っているか？」
「自分の妹を司祭に犯されたからだろ」
「本物サンは上品だなあ。強姦と云えよ。そうだ強姦だ。たったそれだけの理由で、個人的な引鉄（トリガー）で、陳腐（ちんぷ）な弾丸（ダンガン）で、宗教戦争が幕を開けたわけだ。さて本物サン、このエピソードからみちびかれる結論は？」
「…………」
「めずらしいな。沈黙かい。ならば俺が答えてやろう。『身内を汚さ

れると、みんなすぐキレる』」
　盛大な吐き気がこみ上げてきました。
　胃の中にあるものを吐き尽くしたい。
「本物サンは世界征服だと騒（さわ）いでいるが、自分の所有物にツバをつけられてキレているだけ」ニセモノは言葉をつづけます。「まあ、十神白夜の欲求不満は、今にはじまったことではないがな。いつだってうまくいかなくて、いつだってキレていた。『超高校級の御曹司』といえば聞こえはいいが、その中身は世界を呪うフラストレーションのかたまり。さしずめ『超高校級の怨憎師（おんぞうし）』と云ったところだ」
「フン。気はすんだか？」白夜様に乱れた様子はありません。「いいことを教えてやる。どれだけ否定を重ねたところで、俺の絶対性が破壊されることはない。俺は俺の正当性を、無敵性を信じる。そう……」

う……」

「十神の名にかけて」

校長室に沈黙が流れました。
それはニセモノが仕切り直すための時間でした。
「さすがだよ本物サン。涼しい顔で、自分だけは無関係という顔で、今もそうやって、他人を征服しようとするんだな。やはり貴様は……あのとき死ぬべきだったのだ」
幕の奥で、粘っこい怒りの熱が高まるのを感じます。積もりに積もって地層と化した不満の渦が、とうとう限界をむかえて発熱したかのように。
間違いない。

間違いない

ニセモノは、私たちの過去を知っている。

あの島のできごとを。

あの城のできごとを。

どうして？

隠蔽（いんぺい）工作は完璧なはずです。『十神一族最大最悪の事件』の存在を知る者は、関係者以外にいません。関係者？

私の中で、ある人物の存在が浮かび上がります。

でも、そんなはずないのに。

ごってもう……。

怒りの熱が、幕の隙間（すきま）から流れ出るのがわかりました。ニセモノは今や、白夜様への怨（うら）みを隠しません。校長室の温度が〇・四度上昇したことをボルヘスが感知します。

ボルヘス。

えぐり取られた私の右目。

そういえば右目は、どこにいってしまったのでしょう。

私の苦しみにも、ニセモノの怒りにも毛ほどの関心を寄せない白夜様は、ゆっくりと幕に手をのばしました。

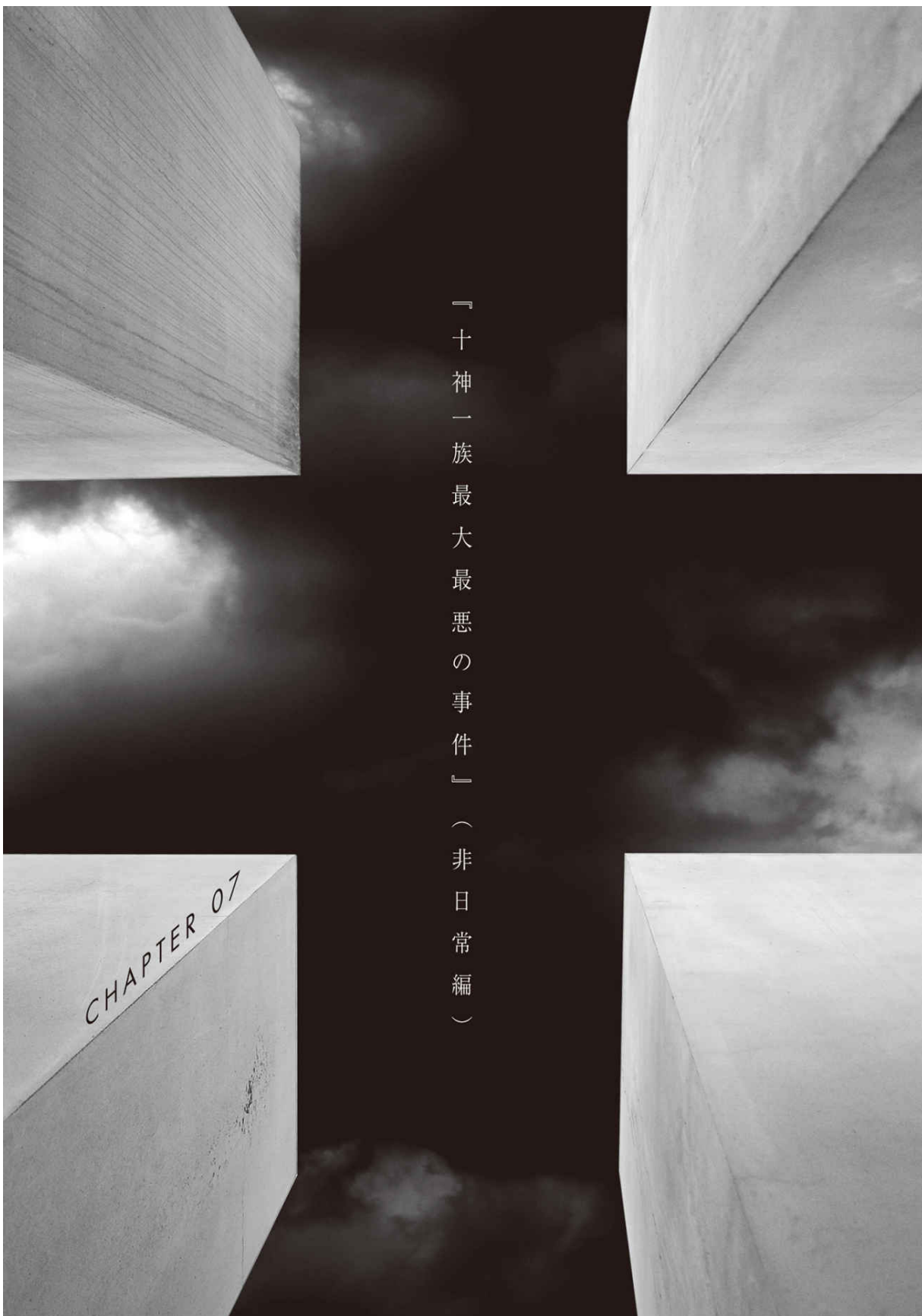
「さあニセモノよ、その姿を俺に見せるがいい」

幕が剝ぎ取られます。

そして現れたのは。

あれ？

あっれえええええええええええええええええええええええええええええええええええ————————!?

『十神一族最大最悪の事件』（非日常編）
CHAPTER 07

プロローグ

殺されたのは朝顔(あさがお)さんだった。
こんなぼくにもほほえんでくれた朝顔さん。その笑顔を見ることは永遠にできない。

首から上が見つからないのだ。

部屋に取り残された胴体は、首をうしなって呆然(ぼうぜん)としているように、窓の下で沈黙していた。死体のまわりにも、ベッドの下にも、クローゼットの中にも首はなかった。犯人は朝顔さんを殺害して首を持ち出し、部屋に鍵をかけて密室にしたのだ。どうして。どうやって。

ヘニーワースさんの話によれば、マスターキーは執事である自分が管理していて、凶器になり得る刃物は防犯センサーが作動している厨房（ちゅうぼう）にしか置いていないとのこと。

しかも密室は二重だった。

殺害現場となった雄介（ゆうすけ）さんの部屋の前にはフリースペースがあって、そこでは一郎（いちろう）さんと四郎（しろう）君が夜中までチェスをやっていた。朝顔さんが雄介さんの部屋に入ったのが、昨日の午後九時ごろ。死体が発見されたのが今日の午前十時ごろで、一郎さんの検死では、死亡推定時刻は昨日の午後十時から十一時のあいだだった。なのにチェスに興（きょう）じていた二人は、部屋にはだれも近づかなかったというのだ。物音も聞こえなかったとのことだけど、全室の防音は完璧なので、そこは当てにならない。もちろん外部からの侵入も不可能。窓には鍵がか

かっていたし、雄介さんの部屋は城の最上階に位置している。
なのに朝顔さんは殺された。
自殺ではないか。という意見もあった。しかし自殺だとしても、生首が見つからないという謎（なぞ）や、どうして自分の兄の部屋で自殺したのかという疑問は残った。ぼくたちは何も解決できず、何も納得できないまま、その日の昼をむかえようとしていた。
なんにしても、朝顔さんが殺されたということだけはたしかだった。

1

ぼくはだれよりも十神でなければならなかった。

まだ十三歳で、序列も最下位の青銅だけど、それでもやらなければならなかった。『次期当主決定戦』に勝たねばならなかった。
一等賞になる必要があるから。
一番星になる必要があるから。
金メダルを獲らねばならない。
世界の王にならねばならない。
そのために今……ここにいる。

2

岡山県瀬戸内市牛窓町。
うしまど。というあまり聞き慣れない地名は、神功皇后の説話に由来している。

来している

仲哀帝のお后さんだった神功皇后は、遠征の帰りに、巨大な牛の化ケ物に襲われた。戦いのすえ、牛が投げ飛ばされて転んだことから、一帯を牛転と呼ぶようになり、それが訛って牛窓となった。投げられた牛はバラバラになり、牛窓湾に浮かぶ島々になったと云われている。その島の一つを十神財閥が買い取り、地図から抹消した。

地図から消えた島には、たった一個の目的のために、城が建てられていた。

名を十鴉城という。

ぼくたちは十神財閥から突然の召集をかけられ、十鴉城に集められた。明頭さんの死体が発見されたのは、五月五日の朝だった。

3

一階エントランスの隣にある食堂に、ぼくたちは集まっていた。おだやかな鷹夜（たかや）君も、静かな四郎君も、クールな二郎（じろう）さんも、いつも以上に沈黙（ちんもく）している。ぼくはペニーワースさんの作ってくれたココアを飲みながら、まだ両手が震えていることに気づいた。当たり前だ。首無し死体を見たら、だれだってこうなる。

首無し死体。

意味がわからなかった。あんなものがどうして。十神の所有する島で。十神の関係者しかいない城で。この十鴉城で殺しなんて……。

「首がないってどういうことだ！」

食堂に飛びこんできたのは雄介さんだった。
目は充血し、酒くさい息をまき散らしていたけど、実の妹が殺されたのだから、素直に嫌悪することはできない。それでも雄介さんの罵倒がぼくに向けられるのはいやだったので、『ショックを受けてココアを飲む子供』を演じた。
「首がないってどういうことだ！」雄介さんはふたたび叫んだ。「くそったれの人殺しがいるのかよ、この島に。ああ？」
「ごらんになったのですか？」
「ごらんになったも何も、あそこは俺の部屋だろうがペニーワース」
雄介さんは鍵を見せつける。「で、どうして妹があんなふうになってる。殺したのはだれだ」
「うるせーよアル中」そう云ったのは二郎さん。「今までどこ行って

た」
「疑（うたぐ）るか。朝顔は俺の妹だぞ。お前らみたいな腹違いとは違う、純粋な……」
「どーでもいいし。てめーが今までどこにいたのかを聞いてるし」
「散歩」
「一郎兄貴の見立てじゃ、死亡推定時刻は昨日の午後十時から十一時のあいだらしい」
「そのときなら城にいたよ。蜜造（みつぞう）と飲んでた。つまらんコンビでチビチビやってたんだ。序列が白銀の『超高校級』さんは同情してくれるんだろうねえ。いや、お前は脳まで筋肉だから、ひとの気持ちなんて考えられないか……」
「んだとコラ」
二郎さんが立ち上がる。

二郎さんが立ち上がる

「争いはいけません」
陶器人形が声を発した。
薄茶色の髪。
重みのある睫毛。
硝子細工のような瞳。
そこに宿る不安定な輝き。
鷹夜君。
「雄介さんも二郎さんも、煽るのが上手ですね」鷹夜君は笑顔を浮かべた。「ですがぼくたちが今すべきことは、この不安を解消することです」
「だったら警察を呼べよガキ！」
「そうはいきません。それはいけない。今は『次期当主決定戦』の真

ーそ、はいけません。それはいけない。今は『次期当主決定戦』の真っ最中ですからね。警察を呼んでしまっては、解散せざるを得なくなる」
「後継者レースなんざ、今度やればいい」
「お父上が、それをみとめるでしょうか」
「鷹夜様のおっしゃるとおりでございますな」ペニーワースさんが会話にくわわる。「殺人を理由に、『次期当主決定戦』を中止させることはできません」

「なんだそれ……。俺の妹が殺されたってのに、まだつづけるつもりかよ。頭おかしいんじゃないのか！　おい、十神の中からまた死人が出たら責任問題だぞ、執事」
「みなさまはまだ、十神ではございません」

ぼくたち十五人の中から、『次期当主決定戦』を勝ち抜いた一人だけが、十神財閥の次なる当主となる。
必要なの一人だけ。
仮免許しか持たない人間が死んだところで十神は傷つかないし、今回のような突発的な問題を乗り越えたうえで勝ち抜いた者は、まさに次期当主としてふさわしい。これが執事の本音だろう。ペニーワースさんは優しいけど、十神のことになるとスタンスは冷たい。
雄介さんは深い息を吐いた。
「……わかったよ。お前たちの狂気は理解した。だけどな、この島に殺人犯がいるってのに、そいつを野放しにしておくのか？」
「こうしましょうよ」鷹夜君が提案した。「『次期当主決定戦』は続行させつつ、朝顔さんを殺した犯人が気になるひとは、そのひとたち

で犯人さがしをする……。これなら問題は生じませんよね。ペニーワースさん

「よろしいでしょう」

満足そうにうなずくペニーワースさんの横で、雄介さんがぼくを見ていた。

いやな目で。

「おいガキ。お前がやったんじゃないのか？」雄介さんが云った。

「ええ？　くそったれが。眼鏡（めがね）坊やが」

「ぼ、ぼくは」

「ニセモノが傷ついた顔をするな。だいたいお前、なんでこの島にいるんだ？」

「そんな……」

「まあいい。さっさと朝顔の首を見つけよう。首がないってことは、そこに証拠があるかもしれない！」

雄介さんは食堂を飛び出した。

「芝居くせー」

二郎さんがつぶやいた。

4

鷹夜君。雄介さん。二郎さん。四郎君。ぼく。そして使用人の真壁さん夫婦。島内のどこかに首が捨てられたと判断したぼくたちは、この七人で捜索することになった。

島は小さく、十分もあれば一周できた。

雄介さんは煙草をくわえ、いつのまにかウイスキー瓶を持っている。元『超高校級の美食家』として名を馳せた雄介さんの舌は、ニコチンとアルコールのせいで、ひどいことになっているだろう。自分の才能を破壊する雄介さんが憎らしい。ぼくは才能もなければ、十神の資格すらないかもしれないのに。

「犯人を見つけたら、オレがボコってやるよ」

先頭を歩くのは二郎さん。『超高校級の空手家』がいるので不安はゼロ……といえば嘘になるけど、殺人者に全員殺されるという展開はないだろう。二郎さんの実の弟である四郎君も淡々と歩いている。

おびえているのは真壁夫婦だった。料理や掃除といった雑用を担当する二人は、十神に長いこと仕えているけど、ペニーワースさんほど

の忠義心はなく、よく云えば常識的だ。ぼくはこの夫婦が昔から好きだった。異様な人間ばかりの島で、常識はふだん以上の価値を持つ。

塔に到着した。

といっても実際の塔ではなく全長十メートルほどの細い三角錐だ。本当はガゼボ（西洋風の東屋）を作るための支柱だったのだけど、なぜか工事が中断されて支柱だけが残り、ぼくたちはそれを塔と呼んでいた。

異変にはすぐ気づいた。

支柱の下に何かがある。

ぼくは眼鏡をかけ直す。

泥で汚れたそれは、

[illegible]。

絶叫しながら塔に近づこうとする雄介さんを、鷹夜君がとめる。
「待ってください。現場を保存しましょう」
「うるさい！」
雄介さんは自分よりはるかに年下の少年を、遠慮なく放り投げた。
「ぼくたちが解決すればいい」鷹夜君は身軽に着地する。「そのための現場保存を……」
「うるさいうるさい！　探偵ごっこか！　うるさいうるさいうるさいうるさいうるさ」
ヒュン。
風を切る音がしたかと思うと、雄介さんの動きが停止。そのまま倒れそうになった体を、二郎さんが軽々とかつぐ。

れそうになった体を、二郎さんが軽々とかつぐ

「だまらせた」二郎さんは拳をにぎった。「あ、殺してねーから」

真壁さん夫婦は生首に震え上がり、ナンマイダブナンマイダブと唱えている。ぼくはぼんやりと、朝顔さんがカトリックだったことを思い出す。カトリックでは最後の審判のあとに死者が復活するらしいけど、首と体が離れていても問題ないのだろうか。

鷹夜君は生首をまじまじと見ていた。

「切断面はあまり綺麗ではありませんね」そして人形めいた顔つきのまま云う。「さて、どうやったのでしょう。凶器の持ちこみは基本的にできないから……」

おそらく『検査』のことを云っているのだろう。

ぼくたちは島に入る際に、持ち物を制限される。飛行機に乗るとき

と同じく、危険物は持ちこめないようになっているのだ。
「真壁さん、ノコギリはこの島にありますか……いや、ワイヤーのようなものでもかまいません」
鷹夜君が質問すると、真壁さん夫婦は長年連れ添った二人だけにしか通じない言語でひそひそと会議をしたあとで、物置小屋にワイヤーがあったかもしれない旨をつたえた。物置小屋の中を事前に知ることは可能だ。『バカンス』があるから。
今回の『次期当主決定戦』がはじまる以前に、ぼくたちは『バカンス』で何度か顔合わせをしている。強制参加ではないけど、本土ではなかなか会う機会のない『ほかの兄弟』と、この島で数日をともにするイベント。ようはライバル視察だ。ちなみに『バカンス』のときも

『検査』があるので、この日のために得物を隠しておくなんてことはできない。
「跡があるね」
四郎君の声。
目を凝らしてみると、支柱横の地面に、何かを突き刺したような痕跡があった。鷹夜君も気づかなかったようで、四郎君の観察眼を評価している。
自分と同じくらいの子供たちがサクサクと捜査する様子を、激烈な劣等感の中で見ていた。やはり本物は違う。ぼくはしょせんインチキ人間。このていどのスペックで、みんなに勝って十神財閥の御曹司になるつもりなのか……いや、ならなければならない。それが義務だから。

「現場保存と云い出したのはぼくですが、朝顔さんの生首を放置するのは忍びない」鷹夜君が小声で云う。「二郎さん、持って帰ってあげてもかまいませんか？」
「オレはどーでもいいし」
本当にどうでもよさそうだった。
ぼくたちは引き返す。
城に戻ってみると、何やら騒がしい。
城内に残っている兄弟のうち数人が、庭園に出ていた。
庭園には人工池が張られていて、その前に立つのは、ペニーワースさん。一郎さん。絵雄美（えゆみ）さん。そして、
十神忍。
ぼくの姉さん。
四人は人工池に浮かぶボートを見ているようだった。

四人は[illegible]を見ていたのだった。

ボートの中で、和介（わすけ）さんが死んでいた。

胸には、刃物が刺さったような痕（あと）。

「どういうこと……。説明して和夜（かずや）」

姉さんが聞いた。

ぼくが知りたいくらいだよ。

5

「和介氏の死因は失血死。胸を一突きにされて、心臓はおろか背中まで貫（つらぬ）かれている。腐敗（ふはい）の具合から見て、死亡推定時刻は一昨日の夜中

といった感じだな。つまり、島にきて三日目。朝顔嬢（じょう）の死よりも前のできごとというわけだ」
一郎さんによる検死結果を、ぼくたちは食堂で聞いている。
ぼくは姉さんとならんで座り、ココアを飲んでいた。本日二杯目。べつにココアが好きなわけではないけど、甘いものをたっぷり摂取して、気分を落ちつかせたかった。姉さんもそうなのか、紅茶派なのにココアをすすっている。青ざめた顔が美しかった。
十五人の兄弟が十三人に。
そのせいもあるけど、食堂には空席が目立った。
一郎さんと四郎君。蜜造さんと鷹夜君。絵雄美さん。ぼくと姉さん。あとはペニーワースさんの八人がいるだけ。
「凶器は？」

鷹夜君が律儀に挙手する。
「見つからなかった」一郎さんが答えた。「あたりをざっと探したが、それらしいものはなかったよ。人工池の水を抜いてもいいが、おれがもし犯人なら凶器は海に捨てる」
「凶器の出所は？」
「それについてペニーワースから報告があるそうだ。頼む」
「御意」ペニーワースさんは一礼した。「まず鋼鉄製のワイヤーでございますが、これは三年前に購入してから、物置小屋に放置されておりました。ワイヤーを巻き取るための電動ウインチと、そのリモコンも同様です。小屋の鍵は破壊されておりました」
「管理が甘い」

「もうしわけございません一朗様、しかし刃物にかんしては万全でございます。みなさまもご承知のとおり、厨房には防犯センサーが設置されておりまして、異常があれば即座に警報機が鳴る仕組みになっております」

「和介さんの傷跡は刃物によるものに見えましたが、その凶器はどこから湧(わ)いて出たのでしょう」鷹夜君が首をかしげる。「ペニーワースさん、ぼくたちが島に入るときは『検査』を受けますよね」

「いかにもでございます鷹夜様。何人(なんぴと)たりとも、この島に危険物は持ちこめません」

「でも『検査』を通過せずに、船やヘリで直接乗りこむのはどうですか？　地図にないとはいえ、ここは瀬戸内海に浮かぶ島の一つですし、ぼくたちは『バカンス』で何度もきています。なんだってできますよ」

す」
「島の半径十キロ以内は、レーダーを張っております。部外者の侵入はおろか、凶器を忍ばせることもできません」
「では、ボートを自由に使える真壁さん夫婦が犯人ということになりますよ。厨房も使えますし」
「動機がございません」
「真壁さんはずっとこの城に暮らしているのですか？」
「ふだんは本土で十神にかかわる仕事をしておりますが、『バカンス』があるときは用意もかねて、一週間ほど前から島に入らせています。今回、真壁には『バカンス』と称して島に入れさせたのち、『次期当主決定戦』をおこなうことを教えました」
「ねえ……真壁さんが犯人の手助けをしている可能性はないかしら。

「それ……真壁さんが犯人の手助けをしている可能性はないかしら

……部外者を本土からひそかに連れてきたとか」

そんな質問をしたのは絵雄美さんだ。暗い顔つきでポニーテールをいじりながら、アンニュイな声を発した。

「否(ノン)。ありえませんな。くり返しますが、真壁には動機がありませんし、何よりこちら側の人間でございます。もしそのようなことが露見すれば、あらゆる意味で真壁の首が飛ぶでしょう」

「あなたが犯人ということは……」

「愚問でございますな、絵雄美様」

わかったことは二つ。

この島には部外者も凶器も入りこめないこと。

この島の中に犯人がいること。

「『存在しないはずの凶器』か。謎が増えたな」しばらくして一郎さんが口を開いた。「捜査はあとにして、軽く何か食べよう。真壁夫妻が作ってくれているから。そもそも……あの二人が犯人なら、おれたちはとっくに毒殺されているさ」

6

集まったのは、一郎さん。鷹夜君。四郎君。ぼく。そして姉さんの五人。

殺害現場となった雄介さんの部屋には、なんともいえないにおいが漂っていた。死臭が。

漂っていた　死臭だ

朝顔さんの死体には、白いレースがかけられている。切断面からにじみ出た血が、布地を赤く染めていた。

「たまらんな」

一郎さんの言葉には、いくつもの意味がこめられているように感じた。

レースが剝がされ、首のない朝顔さんの胴体を見た瞬間、姉さんは泣き出した。ぼくも泣きそうになっていた。みんな朝顔さんが大好きだった。

「やはりワイヤーだな」

「やはりワイヤーです」

一郎さんと鷹夜君はすでに捜査をはじめていた。四郎君は部屋のド

アを確認している　このときはじめて　二人の白銀と一人の黄金にはさまれていることに気づいた。そしてぼくは青銅。序列最下位。ふたたび劣等感。呼吸が荒くなる。でも今は、そんなことをやっている場合じゃない。

お前も捜査をしてみろ。

ふり落とされないように食らいつけ。

十神の名にかけて。

「窓の鍵は古典的な回転式。どの部屋も同じだが」一郎さんが窓の縁(ふち)を軽く叩いた。「外から施錠(せじょう)するとなれば機械が必要だ」

「機械工学のプロは、ぼくたちの中にはいません」鷹夜君が言葉を受ける。「島内にあるものだけで、鍵をかけるロボットを作れるような

者はいないでしょう」
「鷹夜氏、ではどうやって鍵をかけた？」
「無意味な質問です」
「このドアも普通だね……」
四郎君はつまらなそうに云った。
ぼくも考えろ。
やってみせろ。
『次期当主決定戦』で勝利するつもりなら、何か見つけてみろ。
ためしに、床一面に広がる血痕に目をやった。乾燥して赤黒くなったそれは、地表に流れ出た溶岩のように固形物となっていて……どういうことだろう。死体の足もとあたりに、不自然に四角く切り取られた痕跡を見つけた。それは封筒ほどのサイズだった。

「和夜君も気づきましたか」鷹夜君が硝子玉のような目を向けた。
「おそらく遺書でも置いてあったのでしょうね」
なるほどこうやって思考すればいいのか。ではどうして遺書がないんだ？　というか、遺書？
「こんなところだな」一郎さんもぼくをちらりと見る。「和夜氏、忍氏といっしょに部屋に戻っていなさい。こういうことは大人にまかせておけ」
「え、あの」
「安心しなさい。これ以上の死者はおれが出させない」
「でも」
「これは十神の領分だ」
本人は傷つけるつもりはなかったのだろうけど、気分が土砂降(どしゃぶ)りに

なった。十神の領分。十神の領分。十神の領分……。
「四郎、お前も戻ってろ」
「一郎兄さん……犯人はどうするの」
「犯人かどうか事情聴取だ」

7

「ぎぇえええええええええええええええええええ」
閉ざれた一郎さんの部屋。
絶叫の主は、雄介さん。
「ななっ、何ごとかねこれは」
騒ぎを聞きつけたのか、蜜造さんがやってきたけど、ドアを開ける
[illegible]

勇気はないらしく、部屋の前にいるぼくと姉さんにたずねた。
「雄介さんに、事情聴取をしているそうです」
「ご、拷問の間違いだろ。神聖なる十鴉城でなんてことを」蜜造さんの分厚い眼鏡がずれた。「僕は聞かなかったことにする」
それだけ去うと、逃げるように去っていく。
「和夜……」姉さんがぼくの手を握る。「私から離れちゃだめよ」
「うん」
ぼくは幸福の中で返事をしたけど、これじゃいけないと思い直す。
ぼくが姉さんを守らなければならない。
やがてドアが開けられ、一郎さんと二郎さんと鷹夜君が出てきた。
「雄介氏は口を割らなかった」
一郎さんが報告した。
「面目ないです」鷹夜君は栗色の髪に手をやった。「ぼくはしょせん

扇動者。『超中学生級のアジテーター』にすぎません。交渉人なら
よかったのですが……」

「雄介氏の意図がなんであれ、灸はすえた。これでおかしな動きはしないだろう」
「一郎兄貴、もっと痛めつけてやってもいーんだぜ」
「冗談はよせ二郎。お前の拳は今日も最低すぎて最高だったよ」
三人は廊下に消えた。
ドアの隙間から、雄介さんが見えた。
ずいぶん痛めつけられたらしく、昔話に出てくるいじめられたカメみたいに倒れていたけど、視線はぼくたち……いや、ぼくに向けられていた。笑っている。笑いながら、口をぱくぱくさせている……ぼく

に言葉を放っている。単純な口の動きはあきらかに、『死ね。死ね。死ね。死ね。死ね』とくり返していた。

「くふふふふふ」

「ふふふふふふく」

新たな笑い。

階段の踊り場で、二体の人形が肩を組んでいた。

白い顔。白い手脚。白と黒のドレス。髪は金というより白に近い。

同じ顔。同じ声。すべてが無機質。だけどあれは人間だった。

十神朝(あさ)。

十神夜(よる)。

二人で一つ。

二人で『超高校級の気象予報士』。

すんぶん

双子姉妹は寸分たがわぬタイミングで笑い、寸分たがわぬタイミングでそれを引っこめた。

「あら和夜。こんなところで油を売って」

「あら和夜。こんなときでも姉を頼って」

「殺しは開幕したばかり」

「まだ殺しは終わらない」

「92%の確率で殺しはつづくでしょう」

「殺人は92%の確率で起こるでしょう」

不安で不快な予報を発すると、双子姉妹は肩を組んだまま去る。

こうして五日目の夜はすぎていった。

8

初日はそれでも幸福だった。

『次期当主決定戦』の報せを受けたぼくたちは、直後にやってきた黒服たちに、ほとんど拉致されるように連行された。

ぼくと姉さんが乗せられた船には、異母兄弟の約半分がいた。

二年前の『バカンス』で見たときとくらべて、絵雄美さんが大人びたことにおどろき、二郎さんの筋肉が増強したことにもおどろいた。雄介さんの酒量と悪態は増し、朝顔さんはもうぞっとするほど美しくなっていた。朝夜の双子姉妹は二年前とまるで変化がなかった。残りの兄弟はべつの船に乗っていると、黒服の一人が報告した。

島に到着。

部屋で休憩するひまもなく、ぼくたちは食堂に集められる。
各座席には、それぞれの名札と、一枚の紙が置かれていた。

『次期当主決定戦メンバー』

（舞奈（まいな）の子）

①一郎（23）元『超高校級の外科医（げかい）』『白銀』

②二郎（18）『超高校級の空手家』『白銀』

③三郎（さぶろう）（15）『青銅』

④四郎（14）『白銀』

（義江（よしえ）の子）

⑤蜜造（27）『青銅』
⑥鷹夜（14）『超中学生級のアジテーター』『黄金』
（早耶（さや）の子）
⑦雄介（31）元『超高校級の美食家』『青銅』
⑧朝顔（28）『青銅』
（ルルドの子）
⑨和介（22）『青銅』
（哉子（かなこ）の子）
⑩絵雄美（19）『青銅』

（アナスタシアの子）

⑪朝（16）『超高校級の気象予報士』『青銅』

⑫夜（16）『超高校級の気象予報士』『青銅』

（道子の子）

⑬涼彦（26）元『超高校級の殺し屋』『白銀』

⑭忍（14）『青銅』

⑮和夜（13）『青銅』

◎本命　鷹夜『黄金』

○対抗　一郎『白銀』

▲単穴　二郎『白銀』

△連下　涼彦『白銀』
×無印　四郎『白銀』

　ぼくたち十五人を、馬か何かだと思っているようなあつかいに、雄介さんと和介さんが抗議の声を上げて、不満の空気が広がっている。いっぽうのぼくは、自分の欄(らん)に異常がないのを確認してほっとしていた。
「ご機嫌麗(きげんうるわ)しゅう」ペニーワースさんが深々と一礼した。「唐突(とうとつ)な集合、まこと恐縮の極致(きょくち)にございますが、ご容赦(ようしゃ)いただきたく存じます」
「そういうのはいいよ執事」
「ふたたび恐縮でございます一郎様」

「で、この破廉恥な紙切れは？」
「出回っているのでございます」
「オッズだとすれば、倍率が書かれていないが……」
「こちらで消しておきました。破廉恥も度がすぎましたから」
「胸クソ悪い『ゲーム』の話は聞くが、自分がその標的になったかと思うと、さらに胸クソ悪くなる」
一郎さんは露骨に嫌悪をしめした。

この世には、金とひまを持てあました連中というものが実在して、そいつらは悪趣味なことに、他人の人生を使ってひま潰しの『ゲーム』を楽しんでいた。探偵と犯罪者の推理対決だの、血液を賭けた麻雀だの、命をコイン代わりにしたギャンブルだの、他人に命がけの戦いをさせて、それを見ながらゲラゲラ爆笑していた。

そして今回は同じ立場……いや、はるか格上である十神財閥の、そのもっとも重要な『次期当主決定戦』まで賭けの対象にしているのだから、よほど娯楽に餓えているのだろう。ぼくが当主になったら全員倒してやると思った。そいつらも姉さんを傷つけるから。
「おい執事、このオッズを見せて、俺たちの尻を叩いているんじゃなかろうな」雄介さんが酒くさい息を吐いた。「俺はな、他人の評価なんざまっぴらなんだよ！」
「だったら引っこめ」二郎さんがすかさず云う。「てめー、なんで美食家やめたんだ？」
「聞いてなかったのかよ。俺は他人に評価されるのがまっぴらなんだって」

「美食家なんだから、評価すんのはてめーだろ。てめーはただ、戦いに疲れて……」
「はっ！　パンチングマシーンが精神分析の真似ごとか？　百円玉も入れてないのによくしゃべる」
「んだとコラ」
二郎さんが立ち上がり、戦闘の空気が濃くなったそのとき。

「**ポン**」

朝顔さんが人差し指を立てると、二人はバツの悪い顔を浮かべ、そのまま席についた。
「おなじみの光景ですね」
「なんだと鷹夜！」

「ああ、ごめんなさい雄介さん。ただの職業病です」
鷹夜君は栗毛色の髪をかき上げて謝罪した。
『超中学生級のアジテーター』。

その特異な才能は世界に重宝されていて、軍事国家のボスの演説文を書いたり、まとまりかけた紛争にふたたび火種を投下したりするという大きな仕事をいくつもこなして、わずか十四歳で世界の運営に参加している。そんな鷹夜君は、黄金のランクに位置する唯一者だった。

十神一族はその強さにより、序列がつけられている。
頂上は黄金。

つづき白銀。
最弱が青銅。

そしてぼくは青銅だった。なんの才能も持たない平凡人間で、さらには十神の資格だってあやしい。
「では、はじめるといたしましょう」ペニーワースさんが云った。
「みなさまが十鴉城に集められた理由は、ご理解しておりますな。今回は『バカンス』ではございません。あれは、今日という日のための演習にすぎません」

ペニーワースさんの灰色がかった瞳が、ぼくらを射貫く。
わかっている。
みんなわかっている。

いじけている場合じゃない。
ぼくは勝利しなければならない。
姉さんのために。
「ただいまより、『次期当主決定戦』を開始いたします」ペニーワースさんは宣言すると、今やほとんど見かけないカセットデッキを取り出して、「それではこちらをお聞きください」とつづけた。
再生ボタンが押される。

「よくきたな、子供たちよ」

十神財閥現当主、十神鬼城(きじょう)。
期待のせいか不安のせいか、それとも父親が持つ異様な磁場をテープ越しに浴びたせいか、心に負荷がかかるのを感じた。

「この島に、次なる十神をになう候補が十五人も集まったことに、私の遺伝子の強さと、お前たちの才能の豊かさを誇りに思う。この中にいる者ならだれであろうと、『十神一族の繁栄の秘密』をさずけてもいいだろう」カセットデッキから荘厳な声が響く。「最初に云っておこう。私の子供はお前たち十五人だけではなく、合わせて百八人いる」

「百八人だぁ？　聞いてないぞ！」

雄介さんが叫んだので、ペニーワースさんは停止ボタンを押した。

「絶叫はすみましたかな」

ふたたび再生ボタンが押されて、カセットテープが回転。

「十神に『特殊な世襲制度』があるのは知っているな。私には特定

の妻が存在しない。世界全土の優秀な女性に種を注ぎ、そうして生まれた百八人を競争させた。本人たちも気づかぬうちに勝負はついた。勝負とはそういうものだ」

信じられない。

ぼくより劣った人間が、九十三人もいたなんて。十神の血を継いでいるくせに……。

「勝ち抜いたお前たち十五人には『バカンス』によって顔を合わせ、互いを知ってもらった。そのうえで争い、そのうえで勝ってもらいたい。すべての兄弟を蹴落として、頂上に立ってもらいたい。強さの果てにある孤独を感じてもらいたい。前置きはここまでだ。では、『次期当主決定戦』の内容をあたえる……」

「今日から十日間のうちに、私の『信頼』を獲得しろ」

「リミットは十日後の正午。『信頼』を見つけることができれば、ただちに迎えの船をやろう。リミットをむかえても『信頼』を得られなければ、全員素質なしと判断して、十神から去ってもらう。決定戦のあいだ、島内、城内の移動は自由。何をしてもかまわない。私の『信頼』を獲得した者が現れた時点で、『次期当主決定戦』は終了だ。一人の勝者のみが、私の後継者となれる。それ以外の者からは十神姓を剝奪し、十神とは縁を切り、一般人として余生をすごすがいい。以上だ。健闘を祈るぞ、私の子供たちよ」

ペニーワースさんが停止ボタンを押した。

だれもが沈黙している。

緊張と、それより少しだけ大きな困惑で。
ぼくは……おそらくほかの兄弟たちも……もっと陰惨なものを予想していた。最後の一人になるまで殺し合えとか、そうでなくても心を傷つけ合うタイプの冷徹な指令が下ると思っていた。なのに『信頼』を手に入れろだって？　次の十神のトップを決める争いがデスゲームではなく、ありもしない宝を求めるかぐや姫とは、だれが予想できただろう。
十神鬼城の口から『信頼』という言葉が出てきたことが理解できなかった。他人を追い落として、粉々にて、自分の履歴に勝利の花だけを咲かせてきた十神鬼城が、『信頼』を欲している？　これはどういうことだろうか。言葉の裏を読むべきか。まっすぐに受けとめるべきか。その段階からわからない。何をどうすればいいのか見当もつかない。『次期当主決定戦』がついに開幕したというのに、ぼくはさっそ

く詰んでしまう。
「……なあ執事、親父の『信頼』ってなんだよ」
長い沈黙をやぶったのは雄介さんだ。

「お答えできるわけがございません」
「物質的なものか？　それとも精神的な？」
「ノーヒントでございます」
「お前は知ってるのかよ」
「ノーコメントでございます」
「あの親父が、あの鬼畜が、『信頼』をほしがるとは思えないが。何かの比喩か？」
「ノーヒント&ノーコメントでございます」
「律儀！」

「執事でございます。わたくしはご主人様から、『次期当主決定戦』の立会人（たちあいにん）をまかされておりましてな。公平。公共。中立。中庸（ちゅうよう）をモットーとしておりますので」

「だったらこいつを『次期当主決定戦』のメンバーから除外しろよ」

雄介さんの無遠慮な指が、ぼくをしめす。

怒り。悲しみ。不満。不安。違う。どれもぼくの感情を説明していない。

絶望。

あるのはそれだけ。絶望だけ。慣れ親しんだ絶望だけ。ぼくの胸は絶望でぎゅうと痛み、ほんの一瞬だけ窒息（ちっそく）しかけた。目から涙があふれそうになってくる。云いたいことは山ほど浮かぶのに、一つも言葉にならない。

もう慣れた。
もう慣れた。
もう慣れた。
それでも傷はつく。
ぼくの沈黙をいいことに、双子姉妹も参加してきた。
「うふふふふ。そうよ和夜には関係のない話」
「ふふふふう。そうよ和夜は資格がないのに」
「そ、そうだよおおお。こいつには資格がないよお！」和介さんが割りこんできた。「だ、だってこのガキは十神の人間じゃ……」
「やめて」姉さんが立ち上がる。「和夜は私の弟です。十神和夜です。この島にいるのが、何よりの証拠のはずです」
「ニ、ニセモノだよおおお！　忍ちゃんがなんと云おうと、こいつはニセモノだあ。ひひっ、さっさと出てけよお」

「またお姉さんに助けてもらっている」
「お姉さんに甘えてバブバブしている」
「和夜は私の弟です」
　姉さんはくり返した。
「ひひっ」和介さんが肩を震わせて笑う。「し、忍ちゃんが庇（かば）っても、それで正当性が保証されるわけじゃないよお。和夜については、今ここではっきりしてやったほうがいいんじゃないかなあ。ボクの『夢』のためにも。ライバルは一人でも少ないほうがいいから」
「はっ！　何が『夢』だか」雄介さんが吐き捨てるように云った。
「おい和介、お前の『夢』とやらを、みんなの前で云ってみろよ。恥（は）ずかしくなければ」
「え？　べつに恥ずかしくなんてないけど。ボ、ボクが十神家の当主

になったら、お前らみんなを足で使って死ぬまでくだらない仕事を押しつけてグズグズのボロボロにしてやるんだあ」
「本当にクズだなお前！」
「復讐だああ！」
「何度聞いてもクズ級の『夢』だよ」
「あらそんなことないわ雄介さん。『夢』は主観的なもの」
「あらそんなことないわ雄介さん。『夢』は個人的なもの」
二つならんだ同じ顔から、少しだけ内容の違う言葉が同時に流れた。
「そういや、双子ちゃんの『夢』を聞いたことがなかったな。いい機会だから教えろよ」
「私たちが十神家の当主になったら、世界中の放送局を買い取って、

二十四時間つねに『朝夜姉妹のウェザーリポート』を流します。あとは野となれ山となれ」
「私たちが十神家の当主になったら、十神の資産をドブに捨てるように使い潰し、自分たちをひたすら輝かせます。そのあと十神がどうなっても知りません」
「お前らもクズだな！」
「だって十神の行く末なんて興味ないから」
「だって自分たちの輝きしか関心ないから」
「くだらない……」絵雄美さんが気だるそうに息を吐く。「十神も、自分も、くだらない」
「ではあなたは後継者レースに参加しないで」
「ではあなたは『次期当主決定戦』を降りて」

「もらえるものはもらう。それが私のポリシー……。私がこの戦いに勝ったら、十神の資産で、世界中に戦争を起こしてやるの。そして私も世界もみんな死ぬの」

狂っていた。

どいつもこいつも狂っていた。

蜜造さんは『兄弟すべて巻きこんでの酒池肉林』を望んでいると公言していたし、二郎さんは『後継者レースに興味はないけど勝負と名のつくものにはすべて勝つ』と宣言しているし、三郎君は『お肉食べたい』しか云わないし、こんな連中に十神を継がれるわけにはいかなかった。一郎さんは十神財閥の純粋な発展を夢見ているようだったけど、一郎さんが後継者に決定した瞬間、ぼくや姉さんは十神の庇護下には置かれなくなる。十神財閥が持つすべての権力を奪われる。そうなればぼくの存在価値はいよいよゼロ。

勝利しなければならなかった。
十神のために。じゃない。

姉さんのために。
「ま、なんでもいいさ。俺には関係のない話だ」
雄介さんは立ち上がる。
「どちらへ雄介様」
「部屋で寝る。俺には関係のない話って云ったばかりだろ！　耳あんのか執事！」
喚（わめ）き立てると、本当に食堂を去ってしまう。
「へへっ、あいつが酒飲んでずっと寝てりゃ、それだけ勝率が上がるわけだよお」
和介さんがひきつった笑い声を上げた。

「十日間ずっと泥酔（でいすい）していればいいのに」
「人生すべてで酩酊（めいてい）していればいいのに」
「み、みんなは知ってる？　あいつの舌、ほとんど味がわからなくなってるんだよお。なんか病気で……」
和介さんの言葉を、朝顔さんがさえぎる。
いつものように人差し指を立てて。

「大丈夫さ。私たち十五人は兄弟じゃないか。これまでもこれからも、ずっとずっと兄弟じゃないか。とうとう『次期当主決定戦』がはじまったし、兄弟が全部で百八人いたことにはびっくりしたけど、そんなんじゃ、私たちを引き裂くことはできないね。みんなにも、私の『夢』を教えよう。私はね、兄弟が一人の例外もなく、みんな幸福に

生きられたらそれでいいんだ。そのためなら命だって捨てる覚悟さ」
朝顔さんの言葉のあとは、だれも何も云わなかった。
ぼくはそっと周囲を観察する。食堂には、今さっき出ていった雄介さん以外にも、三郎君の席が空いていた。それから……あの男。涼彦の席も。
絶望の予兆に満ちていたけど、それでもやはり初日は幸福だった。

9

雄介さんの首無し死体が見つかったのは翌朝、六日目のこと。

朝顔さんが死んだのと同じ部屋、同じ場所で死んでいた。
「おれのミスだ」
一郎さんは首無し死体を見下ろした。
姉さんは震えていた。
ぼくだって震えていた。
さすがのペニーワースさんも、疲労したようなため息を吐いている。
「ドアの鍵は開いていた。窓の鍵も……」一郎さんが小窓を開けた。
「当然、開いているか。みんなに話そう。すべてを」
「一郎さん、それはつまり、『探偵さてと云い』というやつですね」
鷹夜君は妙に楽しそうに、硝子玉のような瞳を輝かせた。
「探偵役はおれがやる。鷹夜氏は黄金とはいえ若いし、何より言葉が危険すぎるからな」

「では、ぼくは塔を見てきましょう」
「ペニーワース、全員を集めてくれ」
時刻は午前九時十九分。
食堂に集まっているのは十人。

塔の確認に向かった鷹夜君はべつとして、姿が見えないのは今回も三郎君と涼彦。『次期当主決定戦』にも殺人事件にも興味がないのか。それとも……。
「いない者は無視して進める」一郎さんの声で我に返った。「真相を説明しよう。朝顔嬢と雄介氏はどちらも自殺だ」
手短な、サクッとした口調。
異論も反論もなかった。みんなその言葉を、ごく当然のような顔つきで呑みこんでいる。心が乱れているのは、ぼくだけ？

「二人は自殺方法もいっしょで、雄介氏の作った自殺装置によるものだ。実用的ではないので、雄介氏は手慰み、あるいは悪質なジョークとして作っただけかもしれないが、それを実際に使おうとする者が現れた。朝顔嬢だ」

朝顔さん。

自殺だった……。

「カラクリは単純だ。外にある物置小屋から、ワイヤーと電動ウインチを運び出して、塔の近くに設置する。そして、あらかじめ部屋の小窓から外に垂らしておいた縄を、輪を括ったワイヤーの先端にむすびつける。部屋に戻ってから、縄を引いてたぐり寄せたワイヤーを首に巻き、リモコンスイッチをオン。ワイヤーが食いこみ、やがては首を切断する。尋常(じんじょう)ではない痛みに絶叫したくても、咽喉を圧迫されて

いるためそれもできない。部屋の前でチェスをしていたおれと四郎が異変に気づくこともない。こうして首無し死体が完成した」

「でも……首は室内に残るんじゃないかしら？」

　疑問を口にしたのは絵雄美さんだ。

「肉の一片が、首の皮一枚が、ワイヤーの繊維に引っかかり、塔まで運んだのだろう。朝顔嬢の生首がひどく汚れていたのはそのためだ」

「あなたの云うように自殺なら、なぜ窓やドアに鍵がかかっていたの？」

「雄介氏のしわざだ。深夜、自室に戻った雄介氏は、首無し死体を発見して、事態をすぐに把握した。おそらく遺書もあったと思う」

「い、遺書だと？」蜜造さんが声を上げた。「聞いてないぞそんなの」

「おれたちはその形跡を見つけている」

そう、ぼくたちはたしかにそれを見つけた。朝顔さんの流した血による告発を。

「雄介氏には、朝顔嬢の自殺を知られたくない理由があった」一郎さんは説明を再開させる。「そこで他殺に見せかけるため証拠品を隠し、遺書を持ち去り、窓とドアに鍵をかけて密室殺人を演出した」

「自殺を知られたくなかったのはなぜだ」

「わからない」

「そ……それじゃこまるだろう！」

蜜造さんが文句を垂れた。

「自殺の手法を説明したときのように、見てきたふうな仮説を語るのは簡単だ。でもおれは、ひとの心でそれをやるのは好きじゃない。な

ので遺書の内容もふくめて、雄介氏から聞き出そうと、やや強引な事情聴取をしたのだが、口を割ってはくれなかった。そして自殺した。おれのミスだ」

「あのひとは自殺したかったのかしら」

「あのひとは他殺したかったのかしら」

朝さんと夜さんが同じ声でたずねた。

「どうもお待たせしました」鷹夜君が食堂に入ってきた。「自殺装置はまるごと残っていましたよ。雄介さんの首をちぎる途中で、電動ウインチが抜けてしまったようですが、塔の支柱に引っかかっていました。塔は保険だったのですね。たしかに、城のあたりには手ごろな木もありませんから……。あ、持ってきたけど見ます？　雄介さんの生首ー

「もういい！　自殺したやつらなんかどうでもいい！」蜜造さんは眼鏡の奥にある瞳を歪（ゆが）ませた。「で、和介を殺した犯人は？」

そうだった。

和介さん殺しが残っている。

事態が収束（しゅうそく）したわけではない。

「和介氏の殺人は夜中におこなわれている。アリバイを照らし合わせたところで、大した成果は出ないだろう。今ある情報だけで犯人を見つけるのは不可能。よって犯人はわからない」

「あ？　朝顔か雄介の、どっちかが犯人じゃないのか」

「………」

言葉の歯切れが悪い理由を、ぼくはようやく察した。

あの兄妹のどちらか、あるいは両方が和介さんを殺した犯人で、良

心の呵責に耐えられずに自殺した。と推測してはいるけど、証拠も
なしにそんなことを云いたくないのだ。
一郎さんは探偵にはなれないと思った。
探偵をするには、優しすぎる。
「犯人がわからなければ……こ、こまるだろ」
蜜造さんの顔色は、不安のせいで土気色だ。
「蜜造氏がこまっては、おれたちもこまる」一郎さんが間を置かずに
返した。「雄介氏をうしなった今、最年長はあなただ。おれたちをみ
ちびく義務がある」
「や、やめてくれ！　僕は一般人なんだ。まともなのは僕だけなん
だ……」
「自殺装置を厨房に移そう。これでだれもひとを殺すことはできな
い」

い」

「安心できるか！　和介を殺した犯人は、『存在しないはずの凶器』を持ってるのに！」

「案ずるな蜜造氏。何があろうと、これ以上の死者はおれが絶対に出させない」

10

五時間後。

一郎さんの死体が発見された。

密室で。

うつぶせに倒れた死体の右腹部あたりには、自分の血で書かれた

『夜』という文字があった。そして六日目は終了した。
あと四日。

11

「じ、冗談じゃない。こ、殺されてしまう……。逃げよう鷹夜。僕たちだけでも逃げよう」
「おめおめと引き下がるわけにはいきませんよ。逃げれば十神の後継者になれませんしね」
「だ、だが一郎君まで殺されたんだぞ。あの白銀までが、元『超高校級の外科医』までが一

紙の分布図』[illegible]」
「白銀とて無敵ではありませんし、お忘れですか蜜造兄さん。あなたの弟は黄金ですよ？」
「忘れるわけないだろ……。鷹夜、黄金だとしても考え直せ。逃げよう。今すぐここから」
「ここは陸の孤島ですが。お父上の『信頼』を見つけないかぎり、船はやってきませんが」
「だったらお前が見つけろよ。『超中学生級のアジテーター』の力でもって今すぐにな！」
「そうしたいのはやまやまですが、ぼくの才能が得意とする分野ではありませんから……」
「……考えがあるんだ。ボートで真壁に本土まで行ってもらい、味方を呼ぶというのは？」

「たしかに、お父上は『何をしてもかまわない』とのことでした。ルールは存在しません」
「僕には才能がない。だから、お前たちのように使われる経験はないが、その逆はあるよ」
「『ひとを使う才能』もまた才能ですよ、蜜造兄さん。協力者に心当たりがありますね？」
「一筋縄ではいかないだろうし、大金もかかる。そのかわり口が堅（かた）くて、何よりも有能だ」
ぼくにできること。
それは盗み聞き。

七日目の朝は異常事態ではじまった。

十鴉城の用途として、来客がくることは考えられていないので、インターホンもなく正面の扉が開かれる。

高そうなスーツを身にまとった男。

長いブロンドの髪をたたえた少女。

「二十億四千七百万」男はよく通る声で云った。「エントランスにある家具の合計額だ。さすが十神財閥。逸品ぞろいだな」

「どちら様で」

ペニーワースさんが立ちはだかる。

「私は『激情にして最速（アレグロ・アジタート）』の異名を持つ探偵、七村彗星（ななむらすいせい）。これは助手

のポラリス・P・ポランスキー」
七村と名乗った探偵は、傲慢（ごうまん）そうな瞳をペニーワースさんに向け、ポラリスと呼ばれた少女……ぼくと同年代くらいだろう……は、スカートの端（はし）をつまみ上げて西洋式に会釈（えしゃく）をした。
「お引き取り願いましょう」
「私は十神蜜造から、事件解決の依頼を受けている。執事との交渉に時間をかけているひまはない。時と金は待ってくれないからな」
「『次期当主決定戦』に第三者を介入させるとは、どのようなお考えですかな」
ペニーワースさんは、探偵を迎え入れた蜜造さんと鷹夜君を見やる。
「外部から応援を呼んではいけないというルールはなかった。それに、非常事態だと」
蜜造さんの額（ひたい）には冷や汗が浮かんでいた。「こういう

い、非常事態だ」蜜造さんの額には[illegible]ていた。「こちら
の七村先生は有名な探偵だ。いくつもの難事件を解決している」
「いかにも私は有名な探偵だ。探偵図書館によるＤＳＣナンバーは『９００』のダブルゼロクラス。おもに殺人事件をあつかっている」
「探偵図書館。あの犯罪者の巣窟（そうくつ）ですか。なおさら、お引き取りいただきましょう」
「帰りのボートはもうない。我々を迎えにきた夫妻は、少し遅めのハネムーンに旅立ったようだが……」
　七村の言葉を聞いて、蜜造さんは外に飛び出した。
「いない！　あいつら逃げやがった！　たった一つのボートで！」
「ひさしぶりの下界を味わい、我に返ったのだろう。一般人としては当然の反応だ」七村はなんでもないふうに答え、対峙（たいじ）する執事に視線を戻す。「我々は帰る手段をうしなった。まさか野宿させるわけにはは

いかないだろう」
「……ボディチェックをさせていただきます」
「好きにするといい。執事よ、あなたはどうも探偵によい印象を持っていないようだが、これだけは宣言させてもらう。探偵として私が相手にしているのは人間ではない。mysteryだ。私は目の前にある謎を解く。そのために存在している」
探偵は宣言をすると、勝手知ったる我が家のように、エントランスをつかつかと歩きはじめた。
ぼくたちは突然の闖入者(ちんにゅうしゃ)に対して、とるべきすべを知らなかった。
「陸の孤島で連続殺人かい。まるで『黒の挑戦(デュエル・ノワール)』だな」

「生き残っているのは十一人か。残高はたっぷり。貯金は思考に余裕をあたえる」

もし二郎さんに聞かれたら、ぶち殺されていただろう。

七村はさっそく好き勝手をはじめた。ペニーワースさんに断りなく貯蔵庫から持ち出したワインを、助手のポラリスに注がせている。話さないのか、話せないのか、黄金色の長い髪を揺らす無口な少女は、よくできた人形にしか見えない。鷹夜君や朝夜姉妹と同じカテゴリーに属している。

探偵は強権を発動して、一人ひとりを食堂に呼び出し、事情聴取をることになった。

おこなっていた
　事情聴取を終えた姉さんの感想を聞いてみると一言、「ひどかった」とのこと。そしてぼくはこれから、ひどい事情聴取を受けようとしている。だだっ広い食堂には、七村とポラリスだけ。味方はいない。味方なんて姉さんのほかにはもとからいないけど。
「楽にしなさい」七村が無茶を云った。「きみが十神和夜か。十三歳の青銅。時間に裏切られたと思っているかね？」
「……なんですかそれ」
「『次期当主決定戦』があと十年、いや三年でも遅ければ、青銅ではなく白銀、もしくは黄金の序列にいたと思うかね？」
「いえ、ぼくは才能に恵まれていないので」
「自分の姉に欲情（よくじょう）したことはあるかね？」

は？
眼鏡がずれた。
こいつは何を云っているんだ？
「質問の意味が……」
「『質問の意味がわからないのですが』という台詞はやめてくれ。そこから派生する会話もかんべん願おう。時間のむだというやつだ」
「欲情なんて……するわけないでしょう。だって姉ですよ？」
「実の姉ならね」
ふくみのある表現に戦慄する。
「では次の質問。これは全員に聞いているのだが、一郎が死ぬ前後のことを、覚えているかぎり正確に話してくれたまえ」

一郎さん。
これ以上の犠牲者を出すまいとがんばった一郎さん。
ぼくは眼鏡をかけ直すと、一郎さんの努力を悲しく思いながら話した。午後九時三十分ごろ、外がさわがしいので廊下に出てみると、ペニーワースさんと二郎さんと絵雄美さんの三人が、一郎さんの部屋のドアを開けたこと。室内のあちこちに血が飛び散っていたこと。その中で死んでいる一郎さんと血文字を見たこと……。
「ダイイングメッセージ。探偵小説における古典的な謎」七村はワインに口をつける。「だが、その内容が『夜』とはね。名前に『夜』がついているのは、鷹夜。夜。そしてきみ……和夜君の三人だけ。時間の省略にはなるが、これでは興醒めだ」
「ぼ、ぼくじゃないです！」

「そう答えるだろうな」
「ぼくが犯人なら、どうして一郎さんは『夜』なんて書いたんですか？　和夜なんだから、普通は『和』から書くはずです」
「そう答えるだろうな」七村はくり返す。「この件は解決しているからもういい」
「解決している？」
「そういうリアクションもいらない。私の最速に水を差すのは重罪だ。というわけで和夜君、罪滅ぼしに仕事をしなさい。涼彦の部屋に案内してもらおうか」
「え……」
「だからリアクションはいらないと云っているだろう」

四方をコンクリートに囲まれた部屋。

窓がないため、電気をつけなければ午前中でも光がない。

そんな薄闇の中でどうやっているのか、あの男は読書をしていた。

「涼彦君だね」探偵が前に出る。「私の招集に応じないとはどういう了見だ。七村彗星をめぐる一分一秒、一挙手一投足(とうそく)に、どれだけのコストがかかっているのかを知らな……」

「ドハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

笑い声。

他人を見下したような。
他人が見えていないような。

信じているのは自分だけ。
信じられないのは他人だけ。
「ドハハハハハハハハハ……探偵だってさ。笑える。ホントにいるんだね。いきなりで悪いけど馬鹿みたいだよそれ」
ベッドに寝そべった涼彦は、視線を本からぼくたちに移した。睥睨(へいげい)という意志が、これ以上ないといったくらいにこめられた視線だった。
「きみが読んでいるのは、三一(さんいち)書房の夢野久作全集第七巻だね。夢野久作を読みながら探偵を愚弄(ぐろう)するのは、寿司(すし)を食いながら魚嫌いを公言するようなものだが」

「あるだろ、そーゆーの。『色の白い美しい子を　何となくイヂメて見たさに　仲よしになる』って感じの」
「『猟奇歌（りょうきうた）』か。そういえば七巻に収録されていたな。七という数字は孤独で美しい」
「笑える。探偵ってホントに探偵小説が好きなのな」
「きみも殺しが好きだろ。元『超高校級の殺し屋』は」
「探偵は密室って言葉だけで自慰（じい）行為できるってマジ？」
「殺し屋が犯人だとすれば退屈なオチだな」
「マトモな人間は殺しなんざしないさ」
ぼくは愕然（がくぜん）とした。
なんだこの会話は。
独善（どくぜん）同士の会話は。

「聞かせてくれないか。今回の事件、きみの評価は？」
「答えの代わりに忠告してやる。テメーのうしろにいるガキに気をつけな」
そう云われて気づいた。
ぼくたちの背後に、ポラリスが立っていることに。
ポラリスは今回も少女人形のように沈黙して、じっとこちらを観察していた。その目からは、感情と呼べるものを見つけられない。ポラリスなる存在が、観察という行為そのものとなっているようだった。
七村は助手と云っていたが、むしろ書記にしたほうがいいように感じた。
「忠告は受けとめよう」探偵はうなずく。「ではさらばだ」
去り際、

「和夜クンよ、二年ぶりに顔を合わせたのに挨拶なしか？」背中に声をかけられた。「それともお兄様に会えてうれし泣きして、涙を隠そうとしてんの？」
「……うるさい」
「オレがうるさいのはオレが一番よく知ってるさ。忍は元気かね」
「おまえが消えて、ぼくも姉さんも幸せだ」
「ガビーン！　弟に痛烈（つうれつ）な一言を浴びせられてお兄ちゃまショック。このまま岡山に引きこもって桃を……」
ぼくは言葉の途中でドアを閉めた。防音効果の高いドアに感謝。
「きみの兄は、いつもああなのか」
「いつもああです。あの殺人者は」
元『超高校級の殺し屋』。
くわしいことは知らないし知る気もないけど、涼彦は人間を殺して

殺して殺して殺して生きてきたし、それをとがめる者はいなかった。仕事なら殺人もほめられる。

十神財閥の者も多く在籍（ざいせき）している、希望ヶ峰学園。

ぼくはそのスタンスをおそろしく感じるときがあって、たとえばひと殺しすら『才能』としてみとめていること。『一流の才能』を集める学園には、倫理もクソもあったものじゃない。こんなことをつづけていれば、いつか内側から瓦解（がかい）するのではないか……。

涼彦の粘っこい笑い声が頭から消えてくれなくて、なんとなく探偵&助手コンビと歩いているうちに、三郎君の部屋の前にやってきてしまった。後悔するひまもなく、七村がドアをノック。応答なし。

「なんだこれは。十神の連中は私の時間をなんだと思っている」

一般的な探偵なら、三郎君の身に何か起こったのではと心配するところだけど、七村はスケジュールがうまく進まないことに怒っていた。

乱暴なノックをつづけていると、怪訝(けげん)そうにドアが開く。中で何をしていたのか、すさまじい湿気がぼくの眼鏡をくもらせた。

部屋には絵画の山。審美眼(しんびがん)のないぼくには価値がわからないけど、室内はたくさんの絵画で埋め尽くされていた。壁も見えないほどに。

「十一億三千万」

探偵が数字を口にする。絵の総額だろう。

そのように高級な部屋には似つかわしくない存在……汗だらけの太った少年が、ぬっと顔を出した。

三郎君。

今日もビデオカメラを回している。
「ぶひゅ！」三郎君が豚のように鳴いた。「あ、あ、暑苦しいノックをするな」
「きみの顔ほど暑苦しくはない」
「なんだお前。こ、殺すぞ……」
「私は探偵の七村彗星。事件を解決しにきた」
「事件？　解決？　ぶひゅ！　馬鹿なのか」三郎君は唾とともに悪態をぶちまけた。「ぼ、ぼくがどうして引きこもってるのかも知らないのか」
「さてね」
「身を守ってんだよ」
「だれから」
「こ……殺してんのはこいつさ。このニセモノさ」

三郎君の太い指が、ぼくにのびる。
やめろ。
今ここでそれをやめろ。
「なんだ知らないのか……。あ、あのね、こいつは十神の人間じゃあない」
「そこのけそこのけニセモノ通る」
「ニセモノニセモノまっすぐ通る」
朝さんと夜さんが、いつのまにか階段の上に立っていた。
仲良さそうに肩を組み、こちらを見下ろしている。
「和夜は１００％の確率でニセモノでしょう」
「ニセモノは１００％の確率で和夜でしょう」
やめろ。

今ここでそれをやめろ。
「ぶ、ぶひ！　朝ちゃまと夜ちゃまだ……ぶひゅううううううう！」
双子姉妹を見つけた三郎君は、歓喜（かんき）の鳴き声を上げながらビデオカメラを向けた。
「穢（けが）らわしい豚だわ」
「汚らしいのが豚ね」
「きょ、今日も死ぬほどかわいらしいですね。ど、どど、どうですか。ぼくといっしょに、アグー豚のしょうが焼きでも……」
「豚なのはあなたでしょう」
「あなたはとんだポークよ」
「そそそ、そんな悪口を云わないで。興奮（こうふん）しちゃう……ん？　ぶ、ぶひゅう！」

三郎君のビデオカメラが、ポラリスをとらえた。豚の口がニタリと開かれる。
空気を察したのか、七村はドアをすばやく閉めた。
ぼくへの攻撃はまだ終わらない。
「うふふふふ。ニセモノの和夜」
「ふふふふう。和夜はニセモノ」
「もうこれ以上、一族への介入はさせない」
「あなたはもう、一族の面汚し(つらよご)ができない」
「なぜなら」
「それはね」
「私たちはお父様の『信頼』に気づいたのだから」

「私たちはお父様の『信頼』に気づいたのだから」
二人が同じ台詞を発するなんて、はじめてのこと。
朝さんと夜さんは、言葉の効果がじゅうぶんに浸透（しんとう）したのを確認すると、肩を組んだままその場を去った。
七村がぼくを見ている。
「くわしい話を聞かせてくれるね、和夜君」

15

口無村（くちなし）が炎に包まれたのは、ぼくが推定年齢三歳か四歳のころだった。
世間では忘れ去られているけど、ネットではまだかろうじて『口無

村焼失事件』は生き残っていて、政府の陰謀だの、テロ活動だの、戦略核実験だの、激発的な伝染病だのと、いろんな説を見ることができる。
　涼彦のしわざ。
『超高校級の殺し屋』としての初仕事。だったらしい。
　初仕事は順調で、順調すぎてこまってしまうほどに順調で、こういってよければ、やりすぎた。口無村は切り刻まれた。家も、橋も、電柱も、自転車も、三輪車も、自動販売機も、男も女も子供も老人も、自宅の巨大金庫に隠れていた村長一家も、隣町の代議士と車で逃げようとした村長の妾も切り刻まれて、まっぷたつになった。
　そして火がつけられた。
　姉さんの話では、切断の雨と燃えさかる炎から逃れたぼくは、民家

のすみで震えていたらしい。どういうつもりか、幼い姉さんを同行させていた涼彦は、ぼくを見て驚愕したそうだ。初仕事とはいえ、絶頂期(ピーク)に近づきつつある自分の肉体と感性が、殺人を取りこぼすなんて信じられないと。さらにはぼくを見つけた姉さんが、ぼくにヨチヨチと近づいたかと思うと、まるでこれからの道をしめすように手をつないだというのだ。

こうしてぼくは十神になった。

というハードな過去を話したのに、七村はお気に召さなかったらしい。ぼくの部屋で自室のようにくつろぎながら、ポラリスが注いだワインに口をつけ、「なんだその話は」と云った。

「でも本当なんです」

「『口無村焼失事件』は知っているよ。探偵のあいだでは有名な未解決事件（コールド・ケース）さ。私が云っているのは、その犯人が涼彦で、生存者がきみということだ。事件の真相が近所にころがっているなど品性に欠ける」七村は眉間（みけん）に指を当てた。「まあいい。舞台設定に文句をつけるほうが品性に欠けるからな。ここは十神財閥の庭。多少の非常識は受け入れよう。だが」

「だが？」

「だがきみが十神財閥に仲間入りできたのかは疑問だ」

「できてませんよ。見たでしょう？」

ぼくの存在を心から受け入れてくれたのは、姉さんをべつとすれば朝顔さんだけで、その朝顔さんも死んでしまった。

「きみはＤＮＡ検査などを受けさせられなかったのか」

「義母（ぎぼ）の道子さんが、断固として拒否しましたから」

「後継者レースをさせるなら、手駒は一つでも多いほうがいいからな。それにしても、当主はきみの存在に疑問を持たなかったのか？　十神財閥の『特殊な世襲制度』は知っているが、だからといってあまりにザルだ。だれでも子供にし放題だ」

「当主……父は、ぼくをみとめてくれたのではないでしょうか」

「そしてあの適当な名前をつけたと？」

「あ、やっぱりそう思いますか。というか兄弟のほとんどが適当ですけど」

「私語をするつもりならこちらもするが、涼彦とは疎遠なのかね」

「……二年前に、家を出されたんです。あの、ちょっとしたことがありまして」

「ふむ。『口無村消失事件』の真相はペラペラと語れても、二年前に

起こった『ちょっとしたこと』は話せないか」七村はぼくを見据える。「ところで、執事にテープを聞かせてもらったよ」
「テープって、『次期当主決定戦』のテープですか？」
「ほかにないだろう。むだな言葉は時間の浪費だ。というわけでサクサク進めるが、テープには、『この島に、次なる十神をになう候補が十五人も集まったことに……』とあった。しかしあれは、きみを除外した人数ではないか。この島には、『真の十五人目』がひそんでいるのではないか。きみの存在は、後継者レースを複雑にさせるための生贄羊にすぎないのではないか。そして事件の犯人は、今もうまく隠れている『真の十五人目』ではないか」
　犯人を絞るすさまじい仮説が展開されているけど、それどころじゃなかった。

除外？
ぼくは最初から、参加させてもらっていない？
十神の血筋じゃないから……。
その発想は鈍い毒のようにゆっくりと、でも確実に体内を蝕んでいく。じゃあ、ぼくの努力はなんだった？　ぼくのがまんはなんだった？　ぼくは姉さんに何もできないのか……うろたえるな。これは探偵の推理にすぎない。オッズを思い出せ。ちゃんと『次期当主決定戦』にエントリーされていたじゃないか。まだ何もはじまっていないし、何も終わっていないじゃないか。
当主の『信頼』を獲得すれば、だれにも文句を云われることはない。血も資格も関係ない。ぼくが十神を継ぐ。ぼくが十神となる。そ

れしかない。ほかに道はない。

だってそうしなければ、十神和夜という名前が消えてしまうから。

ぼくには帰る場所がない。

過去も、口無村も、本当の家族も、存在しない。

もしほかのだれかが『次期当主決定戦』を勝ち抜いてしまったら、ぼくは十神和夜ではなくなり、姉さんもまた十神忍ではなくなる。ぼくと姉さんをつなぐ大切なものが消える。いっぽう涼彦と姉さんは血でつながっている。これでは姉さんが救われない。だれも姉さんを救ってくれない。ぼくが十神を継ぐ。ぼくが十神となる。それしかない。ほかに道はない。

目指すは次期当主。

十神の名にかけて。

「きみの立場はとても悪い。絶望と云ってもいいくらいにね。十神の血を継いでいないニセモノは、血筋も才能もないみなしごは、ここでくたばってもだれも悲しまないというわけだ」

七村とはこれ以上いっしょにいたくないので、ぼくは自室を出た。探偵も助手も追ってこなかった。後継者レースとは無関係なぼくなんて、容疑者としてマークする必要もないということか。

廊下で、二郎さんとすれ違う。

一郎さんが殺されてから、明らかにおかしい。うつろな表情を浮かべて、幽霊のように城内を徘徊するだけ。『超高校級の空手家』としての威圧(いあつ)感はゼロ。

実の兄弟が死んだら、こうなるのだろうか。
実の兄弟がいないぼくには、永遠にわからないのだろう。そう思うと安心しつつも、少しだけ絶望的な気分になった。
それでもその日は、ひさしぶりに殺人が起こらなかった。とはいえ、『次期当主決定戦』がはじまってから七日が経過。ぼくはまだ『信頼』を見つけられていない。それどころか、後継者レースに参加できているのかもあやしい。

16

「和夜。元気ないね……」
八日目も順調に経過し、夕食後の時間を、ぼくと姉さんは図書室で

すごしていた。
十鴉城の図書室には、古今東西の稀覯本はもちろん、『世間で公開されていない未公開の極秘資料』の写しが所蔵してある。『切り裂きジャック事件』も『ゾディアック事件』も『ブラック・ダリア事件』も『三億円事件』も、十神財閥の前では三文芝居にすぎないとでもいうように。
いっぽうで、十神財閥のマイナスイメージにつながる資料は、完全に抹消されていた。ちなみに涼彦は、自分が十神財閥の人間であるのをいいことにシステムを利用して、すべての仕事を闇に葬らせている。涼彦が殺し屋として活躍できるのは、本人の才能だけではなく、こうしたバックアップもあってのことだ。当然、『口無村消失事件』についての資料も存在しない。

「もしかしたらぼくは、後継者レースに参加させてもらってないんじゃないかな」

不安に負けたぼくは、七村の推理を姉さんに話してしまう。自分が十五人の中に入っていない可能性を。ぼくではないだれかが『真の十五人目』として島内に隠れている可能性を。

「たとえそうだとしても」やがて姉さんは云った。「和夜は私の弟だから」

「そうじゃないんだよ姉さん。ぼくも『次期当主決定戦』に参加したいんだ。そしてみんなをやっつけて、十神の後継者になりたいんだ。だって……」

「ぼくが十神を継げば、姉さんは救われるから」

「私は今も元気」
「でも」
「私は今も元気」姉さんはくり返す。「和夜、よけいなことを考えるのはよしなさい。十神だろうとなんだろうと関係ない。私はあなたの帰ってくるところを作った。それが、あなたを見つけた私の義務」
　救われた。
　その言葉で救われた。
　だけど、だけど姉さん、それじゃだめなんだ。言葉だけじゃたりないんだ。ぼくたちをつなぐ十神という名前が剝奪されたら、何もかも壊れてしまうんだ。ぼくは本当の意味で名もなき少年になってしまうんだ。それがどういう意味を持つのか、姉さんにはわからないの？姉さんの前に残るのは、あの男だけになってしまうんだよ。

「……兄さんも、大切な家族？」
あの男も家族なの？
あの男と二人だけになってもいいの？
姉さんが答えようとしたとき、物音がした。
本棚の隅に隠れるように、四郎君が立っていた。決まりの悪そうな表情。四郎君にしてはめずらしく、感情が顔に出ていた。
「……盗み聞きする気はなかった」
ぼくと姉さんは顔を見合わせて、笑う。
百年ぶりに笑ったような気がした。
「わかっているわ四郎君。今日も読書？」
姉さんがたずねると、四郎君は手にした書物を広げる。それは楽譜だった。

「シューベルトの自筆楽譜。気晴らしに……」
「気晴らしでシューベルトなんて素敵。でも本当、気晴らしがないとつらいね。私としては、『次期当主決定戦』なんてやめて警察を呼ぶべきだと思う」
「それか……『信頼』を早く見つけるか」四郎君が云った。「今の話だけど、『真の十五人目』を見つけることが、『信頼』の内容かもしれない」
「『真の十五人目』を発見したひとが、当主になれると?」
「ぼく、この城にきてからずっと、ひとの気配を感じているんだ」
「どこかに隠れているとでも……」
「ただの直感だけど、たとえば、あかずの間」
エントランスには昔から、何をやっても絶対に開かないドアがあって、ぼくたちはそこをあかずの間と呼んでいた。もちろん今回も開か

なかったが……でも、本当にそれでいいのか？　そんな簡単なことでいいのか？　そのていどで得られる『信頼』なのか？
新たな物音。
朝さん。
夜さん。
双子姉妹は今日も肩を組み、静かな歩みで入ってくる。
ぼくを見つけると、いつもなら悪態の十や二十は飛んでくるのに無言で進み、奥にある特別収蔵庫の扉を開けた。『世間で公開されていない未公開の極秘資料』は、そこに保管されている。
双子姉妹は中に入り、扉を閉めた。
「……ぼくとしては、殺人をとめるのが一番だと思う」その様子を見

届けてから、四郎君がふたたび口を開いた。「後継者レースより、犯人を見つけるのが先決」
「目星はついてるの？」
姉さんがたずねる。
「まだ……。『存在しないはずの凶器』も謎のまま」
和介さんと一郎さんの胸を突き刺した凶器は、今も発見されていない。
「ペニーワースさんが犯人っていうのは？」ぼくは口にした瞬間に後悔したけど、それでもつづけるほかなかった。「厨房には警報機があるって云ったけど、ペニーワースさんならそれをオフにできるかもしれない」

「『次期当主決定戦』の立会人が、そんなことしないと思うわ。和夜、ペニーワースさんをうたがうのはよくない」
「で、でも姉さん」
「わかってる。私たちの中に犯人がいるのは。だからって、そんなにはっきりした言葉、聞かされるほうはいい気分じゃない。あのね和夜、私はみんなが……」
姉さんが何か云いかけたそのとき、
ばたん。
特別収蔵庫の中で大きな音が響いた。
扉が開かれて出てきたのは、朝さん……いや、夜さん？
わからない。
なぜなら、一人だけだったから。

「燃えてるの！」
朝さんか夜さんのどちらかが叫んだ。
ぼくたちははじかれたように駆け出し、特別収蔵庫に入る。
「うおっ」
ぼくは思わずうめく。
中は燃えていた。
轟々（ごうごう）と。
炎々（メラメラ）と。
貴重な書架（しょか）を燃料として、いくつもの本棚に火がつき、室内の大半を包んでいた。それは床の一部も侵食している。紙と木によって構成された特別収蔵庫は火の海だ。
「燃えてるの！　燃えてるのおおおお！」
騒ぎを聞きつけたのは、[illegible]

騒ぎを聞きつけたのか、七村とポラリスがやってきた

「消火器は？」七村が周囲を見やる。「早く消すんだ。証拠が消し炭になるぞ」

というか、このままでは城全体に火が回るかもしれない。

でも、どうして火が。

さらにはどうして、永遠の双子のようにくっついていた朝さんと夜さんのうち、片方の姿が見えないんだ。

呆然としているあいだに、消火活動がはじまった。消火器だのバケツだのを持ってきて、あちこちにぶちまける。煙(けむり)が気管を殴(なぐ)りつけてきて、ぼくはせきこみながら特別収蔵庫を出た。

「燃えてるの。燃えてるの……」

図書室の床に倒れて、朝さんか夜さんのどちらかが泣いていた。

泣きながら笑っていた。

17

「では四郎君が楽譜を取りに入ったとき、特別収蔵庫に異常は見られなかったのだね」
「はい……」
「人影も、ふだんはなかった装置なんかも見なかったのだね」
「あそこにあるのは本棚だけだから……異常があればすぐにわかる」
「ふむ。そして特別収蔵庫の前には、和夜君と忍君の姉弟が陣取っていたわけか。広義の意味では密室状況だな」
　ぼくたちはまだ焦(こ)げくさい図書室の中でぐったりしていた。気づけばペニーワースさん、蜜造さん、鷹夜君も合流していて、みんな真っ

黒に汚れている。涼彦と三郎君はともかく、二郎さんの姿が見えないのが気になった。
話を整理してみると、どうにも奇妙な事態が起こっていることが判明した。
午後九時ごろ。夕食を終えて四郎君が特別室に入り、シューベルトの自筆楽譜を持ち出す。その直後、ぼくと姉さんが図書室に入って話しこむ。四郎君は気まずくなり、図書室のすみに隠れていたがやがて見つかり、三人での雑談がはじまる。午後九時三十分ごろ。双子姉妹がやってきて特別収蔵庫に入る。もちろん、それまでにだれかが図書室にやってくれば、ぼくたち三人の目が見逃すはずもない。
午後九時四十分ごろ。特別収蔵庫から出火。
夜さんが扉から飛び出す。
消火活動開始。まもなく鎮火。

消火活動開始。ぶじに鎮火。

だけど朝さんはどこにもいなかった。

焼死したのではと、火のくすぶる瓦礫を掻き分けて大人たちが捜索したけど、朝さんの死体は出てこなかった。

消失したのだ。

「夜君、意気消沈しているようだが私には関係ない。話を聞かせてもらおうか。中で何があった」

「燃えてるの。燃えてるの」

「遅い人間は好まない。私の速度に合わせるのは無理だとしても、せめて必死についてきてもらわな……」

「私たちが特別収蔵庫に入ったとき」夜さんの顔は青ざめていた。

「何も異常はなかったの。私たちはいつものように本を読んで、本と戯れていた。[illegible]

虚れていた　でも突然　朝が燃えた」

「朝が燃えた」七村がくり返す。「詩的な表現ではなく、物質的なぞれだとすれば、なかなか高級な謎だ」

「朝が燃えた」夜さんもまたくり返す。「本を読んでいたら、ぼうって、発火したの。朝はそのまま本棚に倒れこんで……なんとかしようとしたんだけど、火は消えなくて、そのうち火が部屋に回って、それで……」

「そのとき朝が読んでいた本のタイトルは？」

「『日はまた昇る』」

「なるほどじつに美しい」七村は満足そうにうなずくと、疲れきっているぼくたちに声を発した。「この短時間で、木と紙だけを燃料にした炎で、人体を燃やし尽くすのは不可能だ。人体消失事件。また一つ

新たな謎が提示された」

そうだろうか。火消し作業をしているとき、その隙を突いて朝さんが特別収蔵庫から逃げたのではないか。みんな必死だったし、煙やら水蒸気やらで視界がふさがれていた。

……だめだ。

記憶の断片にポラリスの姿があった。

ポラリスは消火活動のあいだ、図書室前で、観察者の目を向けていた。ちなみに特別収蔵庫は湿度調整と日差しの侵入防止をかねて、窓のたぐいは一切ない。

夜さんが喚いている。

「どうして……どうしてなの？　燃えたのにいいいいい！」

九日目の早朝。

夜さんの死体が見つかる。

自分の部屋で死んでいた。

首を切られて。

そして首はどこにもない。

「今回は密室ではなかったか。犯人の運も尽きたようだな」七村は首無し死体を見ながらつぶやいた。「今すぐ関係者を集めてくれ。解決編をはじめよう」

ぼくたちは食堂に集められたけど、これほどの事態になっても、涼彦と三郎君はやってこなかった。うしろめたいことがあるというより、完全無視を決めこんでいるように感じられたし、七村も話をはじめようとしている。あの二人は解決編とは関係ないのか。

ペニーワースさんをはずせば、生き残ったのは九人。

二郎さん。三郎君（不在）。四郎君。蜜造さん。鷹夜君。絵雄美さん。涼彦（不在）。姉さん（忍）。そしてぼく。

「さて。『激情にして最速（アレグロ・アジタート）』の異名を持つ、この七村彗星による解決編がはじまるわけだが、解決編は読者に合わせるのがフォーマットなのでね、のんびりやらせてもらおう」

「解決編って……」姉さんがおそるおそる声を出す。「犯人がわかったりですか？」

たのですか？」

「正しい常套句（じょうとうく）だな、お嬢さん。では私も常套句で返そう」

「謎はすべて解けた」

食堂にざわめきが広がった。

「だがその前に、あのくだらないトリックを解明しよう」

七村は靴音を立てて食堂を歩きはじめた。これもまたフォーマットか。

「朝と夜の双子姉妹が衆人環視の中、謎の消失事件に巻きこまれた……という視点が、そもそもの間違いだ。夜は自分の姿を見せつけるようにして特別収蔵庫に入り、朝の人形に火をつけた」

[illegible]」
「に、人形？」声を上げたのは蜜造さんだ。「あれは人形だったのですか？　本物の朝はどこに」
「十神朝という人間は最初からいなかった。諸君が見ていたのはよくできた人形だ」
「信じられない。朝は普通に歩いていたし、会話だって……」
「普通に歩いていた？　私が見たところ、朝と夜はつねに肩を組んでいた。あれはね、夜がささえていたのだ」
云われてみれば、いつも肩を組んでいた。その様子は『バカンス』で何度も見ていたし、顔も声も服もそっくりな双子なので、なんとなくそういうものだと思っていたけど、あらためて考えてみれば不自然きわまりない。

「どういうカラクリかは今となっては不明だが、おそらく自立型で、下半身に関節がつけられていたのだろう。どうせやるならロボットでも作っておいて、今回だけ燃えやすい人形を持ってくればよかったのに。ツメが甘い」

「し、しかし探偵さん」蜜造さんはまだ納得していないようだった。

「僕は朝と会話したことがありますが」

「朝だけと会話したことは？」

「それは……」

「いいかね蜜造君。朝と夜はつねに同時にしゃべり、朝だけが話すということはなかった。そんなものは会話ではない。事前に夜が声を吹きこんでおいたにすぎない。双子だから声が似ているという先入観もあるし、同時に発声すれば、録音による微細な違和感も消せるだろう。上半身という存在は人形で実在の人物ではなかったという話は内

ネ一神朝という存在は人形で実在の人物ではなかったという設定に納得したね？」七村の足音が響く。「特別収蔵庫に入った夜は、朝の人形に火をつけ、じゅうぶんに燃えたのを見計らって外に飛び出すと、『燃えているの！』と叫んだ。そこの執事、刃物の管理には自信があるようだが、火はどうだ」

「マッチやライターといったものには、さほど注意を払っておりませんでした」

ペニーワースさんが答えた。

「……二つ疑問があるわ」そう云ったのは絵雄美さんだ。「どうして夜ちゃんは、朝ちゃんを作ったの？　それとどうして今回、朝ちゃんの人形を燃やさなければならなかったの？」

「絵雄美君は一人っ子のようだが、母親は努力しなかったのか？　この『次期当主決定戦』に勝てば、十神財閥の後継者となる。洵は一人

の『次期当主決定戦』に勝てば、十神財閥の後継者となる。駒は一人でも多い方がいい」七村はぼくに云ったことと同じ話をした。「そして朝の人形を燃やしたのは、まさに『次期当主決定戦』に勝利するため。十神財閥現当主である十神鬼城の『信頼』を獲得しようとしたわけだ。そう……」

「『奇想の演出』さ」

ピンとこなかったのは、ぼくだけではないようだ。絵雄美さんも蜜造さんも姉さんも、不可解そうな顔つきをしている。鷹夜君だけが笑みを浮かべ、「やはりそういうことですか。あれで勝ち抜けると思ったわけですね」と云った。

「その通り。彼女は博打に出た。『信頼』の内容を、『不可解な現象を

「その通り。夜は博打に出た。『信頼』の内容を『不可解な現象を作り上げろ』と推理した夜は、朝の人形を燃やして、燃えさかる密室からの消失事件を演出したのだ」

和介さんや一郎さんの殺人には、『存在しないはずの凶器』やダイイングメッセージという『奇想』があったけど、当主が満足するほどの内容ではなかった。朝顔さんと雄介さんは自殺だったし、ワイヤーを使ったトリックもすぐさま看破(かんぱ)されたので『奇想』とはいえない。そう読んだ夜さんは、今まで隠してきた朝さんの人形を使って、より派手な『奇想』を作ったわけだ。

「だが夜は読み違えた」探偵は冷酷に云う。「着眼点はよかったが、『奇想』としては三流だ。まあ、どちらにせよ当主の『信頼』は、その種のものではないだろう」

「『信頼』の内容とは?」

「蜜造君。私の仕事は事件の解決だ。『信頼』を考えるのは諸君ではないかね」
「で、では夜を殺したのは……」
「むろんこの事件の犯人がやったのだよ」
解決編が本題に入る。

20

「たくさんの人間が死んだように思えるが、純粋な殺人事件は三つだけ。連続殺人事件としては少ないくらいだ。朝顔と雄介は自殺で、朝は人形だったからな」食堂を歩き回る探偵の姿を、ぼくたちの視線が追いかける。「和介。一郎。夜。この三件の殺しだけを考えてやればいい。では最初の和介殺しに

い　ては最初の和介殺し」
　和介さん。
　三日目の夜に殺された和介さん。
「和介の死亡推定時刻はあいまいだが、私の事情聴取によれば、夜中にわずかでもアリバイのある者は七人もいる。朝顔と四郎君と鷹夜君は食堂にいた。雄介と蜜造君は、蜜造君の部屋で酒を飲んでいたと執事が証言している。朝と夜と忍君の三人……朝は人形なので二人だが……は、エントランスで雑談をしていた。この七人は除外してもいいだろう。そして次、一郎殺し」
　一郎さん。
　六日目の夜に殺された一郎さん。
「このときにアリバイがあるのは四人。絵雄美君と忍君が食堂にいた
ここを執事が確認し、蜜造君と鷹夜君は庭に出ていたと二人は証言し

ことを執事が確認し、雷遊君と鷹夜君に廊下に出ていたと二人に証言している。つづいて夜殺し」

夜さん。

八日目の夜に殺された夜さん。

「アリバイがあるのは二郎君だけ。廊下の片隅で朝までぼうっとしていたところを、何人もの人間が見ている。今回の事件を単独犯と仮定すると、三件の事件すべてにアリバイのない者は、涼彦君。三郎君。和夜君。この三人に限定される。そのうちの二人は単独行動をしていて、ほとんど人目に触れていない。しかも一人は元『超高校級の殺し屋』という、隠密殺人にうってつけの才能を持っている」

「そんな」

姉さんが口もとに手を当てた。

だけど三姉妹には、それはそれぐらいで、ほかのみんなはごく当然のよう

だけど反応といえばそれくらいで、はたのみんなはごく当然のよう
に探偵の話を聞いていた。『さもありなん』という感じで。
「忍君、聞かせてもらおう。きみの兄である涼彦君は、得物を持たず
して首を狩ったりできるかね？」
「そんな……私、わかりません。兄さんはたしかに殺しのプロですけ
ど、いつも刃物を使っているみたいでしたし、あの、私、わかりませ
ん」
「和夜君は？」
「ぼくもちょっと……。兄が仕事をしているところなんて、見たこと
ないですし」
「オレが直接お答えしてやんよ」

食堂に涜彦がいた。いつのまに。
「重役出勤(じゅうやくしゅっきん)かい」七村は云った。「探偵が解決編をしているのだから、容疑者は最初から舞台に集合してもらわなければ」

「え？　オレも容疑者なのかよ。まいったな。『此の顔はよも　犯人に見えまいと　鏡のぞいてたしかめてみる』ってやつだぜ……あれ。それだとオレが犯人になっちまうか。ドハハハハハハハハハハ！」
「あらためて質問する。きみは素手で首を切断できるかね？」
「被害者の傷口を見たけどよ、あれは素手じゃやれん。するどい刃物が必要。絶対必要。あとオレにゃ殺人美学っつーものがあって、刃物以外での殺しはしないんだな」
「だから自分は犯人ではないと？」

「っていうかテメーは、オレを犯人と思ってないだろ?」
「きみには、殺人の動機が見当たらない。後継者レースにも関心がないようだし」
「依頼されたかもしんねーぜ。この中のだれかに」涼彦は混ぜ返す。
「あとオレの証言が真実って証明もできねーし。手刀でスパスパって人体切断できるかもしんねーし」
「問題ないさ。たしかに本来であれば論理的に詰めていく必要があるだろうが、私は犯人を知っているし、証拠もにぎっているからね」
「お呼びじゃないってわけね。ほんじゃ、部屋に戻らせてもらうわ。容疑者のみなさんは引きつづき、ハラハラドキドキの解決編を楽しんでね〜」

入ってきたときがそうであったように、帰りも唐突、気づいには涼彦の姿はなかった。ぼくたちは沈黙して、この奇妙な空気に耐えるほかなかった。

「さきほども云ったが」沈黙をやぶるのはいつだって探偵だ。「本来であれば、ここは論理的に詰めていかねばならない。純粋論理によってあらゆる可能性を排除し、唯一残った可能性のみを現実とせねばならない。しかし……これもくり返しになるが……私はすでに犯人を知っていて、その証拠もある。これ以上、彼について言葉をついやすのは、いかに解決編であっても時間の浪費だ」

「……証拠があるって本当?」いつも世界に無関心な絵雄美さんが、めずらしく身を乗り出す。「信じられない。いつのまに」

「いつのまにか『いつのまに』を成し遂げるのが名探偵だよお嬢さん。時は満ちた。ではそろそろ、犯人を名指ししよう。犯人はきみ

だ……十神和夜君」

21

なんでそうなるの？
なんでそうなったの？
「なんでぼくが犯人なんですか！」ぼくは叫んだ。「アリバイがありますよ！」
「ないよ。和介殺しも一郎殺しも夜殺しも、きみにアリバイはない」
「三つの事件すべてでアリバイがないのは、兄さんだってそうじゃないですか。あと三郎君も。なんでぼくだけ……」
「残念な情報をきみにあたえよう。ポラリス、例のものを」

そういえば姿の見えなかったポラリスが、もったいぶるような足取りで食堂に入ってくると、小さな機械を七村に渡した。
ビデオカメラ。
「三郎君がこれを提出してくれた。……ああ和夜君。そんなに眼鏡を震わせるなよ。きみの犯行の様子が記録されているわけじゃない。記録されているのはこれ」
七村は画面を開くと、再生ボタンを押した。
『ぶ、ぶひひひっ。げ、現在時刻は、深夜三時七分……。では次、ろ、ろ、六十八曲目。みっくすJUICEの最初期のヒット曲、『The IJIN-DEN~天才の法則』を歌います……。り~んごがーおーちるその~とーき~。ぶ、ぶひひ。あ、発見！　みーずーさーえわかせばつ

っはしる〜〜。そ、それ発明？　あーのーきょうだいーがやらなーきゃ〜スペースシャトルもな〜〜い　でっかいあおぞーらは〜　いまでもとりのもの〜〜〜ぶっぎいいいいいいいいい！』

素っ裸の三郎君が曲に乗せて歌いながら、はげしいダンスを踊っていた。

「このおぞましい映像は、三郎君の趣味らしい。彼はこの城で部屋から出ずに、ずっとアイドルソングを熱唱していたのだ。全裸（ぜんら）で」

七村の言葉の通り、三郎君は裸踊（はだかおど）りをしながら絶唱していた。たまに菓子類を食い散らかしつつ。

「三郎君は根っからのアイドルマニアで、全裸でアイドルソングを歌

う自分を映像におさめると、たまらなく興奮するそうだ。他人の趣味に口出しするのは礼儀に反するが、ゴミのような趣味だ」七村は画面を閉じた。「この映像は編集されておらず、違法改造された大容量ハードディスクに、日々の様子もふくめて延々と記録されている。私とポラリスが十倍速でチェックしたところ、細工した様子は見つけられなかった。アリバイと云うのなら、これ以上のアリバイもなかろう。和夜君もアリバイがあるのなら、今すぐ提出しなさい。ゲスい内容じゃなければ幸いだが」

ようやく気づいた。

この探偵は、ぼくをハメようとしているのだ。

十神和夜という名前を、ぼくから奪おうとしているのだ。

負けるものか。

ぼくがいなくなったら、この狂った城の中で、姉さんは一人ぼっち

になってしまう。そして狂った兄弟のだれかが次期当主となって、姉さんは十神から追い出されてしまう。そんなことになれば、姉さんはふたたび涼彦に回収されてしまう。冗談じゃない。
ぼくはかならず一等賞に、十神の跡継ぎになる。
姉さんのために。
十神の名にかけて。
「一郎さん殺しのアリバイが弱いひとが、二人います」ぼくは必死に頭を回転させる。「蜜造さんと鷹夜君です。実の兄弟同士のアリバイなんて信じられない。それに一郎さんのメッセージには『夜』とありました」
「身内に罪をなすりつけようとするとは、末恐ろしい子供だ。だがたしかに、蜜造君と鷹夜君のアリバイは弱い」

「だったら……」
「それでも夜殺しのアリバイはある」
「ぼくと蜜造兄さんは」鷹夜君が硝子細工のような目をぼくに向けた。「夜さんが殺されたとき、七村さんとポラリスさんと事件についての話をしていたのですよ。食堂でね。そのあいだ、ペニーワースさんが飲み物を作ってくださいました。そうですよね？」
「はい。事実でございますな」

ペニーワースさんは表情の読み取れない顔つきで、しかし首を縦に振った。
「私がセッティングしたのだ。ささやかな酒宴をね」七村が言葉を継ぐ。「云うまでもないことだが、依頼主とはいえ蜜造君と、そして鷹

夜君のことも疑った。和介殺しのアリバイがなく、一郎殺しのアリバイも脆弱だからね。それもあって、二人にはつねにアリバイを作ってもらうようにしていた。そして夜が殺された。事件すべてのアリバイがないのは、きみと涼彦君だけ」
「でも、でも血文字が」
「ダイイングメッセージかい？　むろんあれは『和夜』と書いたのだろう」
「そんなのわからないじゃないか！」
「普通、ダイイングメッセージというものは、犯人に致命傷を負わされ床に伏しているときに、かろうじて動く指を使って書く。そうなると自然、流れ出る血液の影響を受けない場所に書かれるのだが、血文字は死体の脇腹付近にあった」
「それがなんだ」

「きみは一郎に致命傷をあたえて部屋から逃げた。一郎は追撃をおそれてドアに鍵をかけた。これが密室の正体。我々の業界では、内出血密室と呼ばれているものだ。部屋中が血だらけだったのは、瀕死の一郎が動き回っていたためだろうな。やがて一郎は力をうしない膝を突き、その姿勢のまま『和夜』と犯人の名前を書いた。そして絶命し、倒れ、体内に残っていた血が、『和』の部分を消したのだ」
「そんなの！　そんなの、わからないじゃないか。『鷹夜』って書いたかもしれない。鷹夜君が犯人……いや、蜜造さんと共犯かもしれない」
「いい思考速度だ。だがきみの云うように二人が犯人だとしたら、なぜ私に事件解決を依頼した？　この七村彗星に。自分で自分の首を絞めるようなものだ」

「お前もグルだからだ！」
「ほう」
「金で動いてるんだろ？　こんなふうにデタラメな推理をやって、だれかを犯人に仕立て上げろって依頼されたんだ！」

「探偵と依頼人による共犯説を持ち出したところで、夜殺しのアリバイは揺らがない。まさか執事も共犯とは云わないだろうな」
「二人が殺したのは和介さんと一郎さん。夜さんを殺した犯人はべつにいる」
「異様な城とはいえ、殺人鬼が何人もいるというのはどうかと思うが。何より蜜造君と鷹夜君には、こんな事件を起こす理由がそもそもない」

「ぼくだって！」

「でもきみは十神の者じゃないのだろう？」

みんなが知っている秘密を、七村ははっきり云った。

仲間はずれ。

ぼくだけ血を継いでいない。

ぼくだけ十神の資格がない。

「だからって、それでみんなを殺す理由にはならない！」

「なるさ。十神の後継者を殺して回る理由にはね。立場の悪いきみは、それでも今までがまんして苦境(くきょう)に耐えてきたが、いざこうして

『次期当主決定戦』がはじまると、自分にはその資格がないのではという発想にやられた。それでリミットまでに候補者たちを皆殺しにして、生き残った自分が後継者になるようにした」

くそ。どうして。どうして。

どうして姉さんは助けてくれないんだ？

姉さんだけではない。食堂にいるほかのみんな……ペニーワースさん。二郎さん。四郎君。蜜造さん。鷹夜君。絵雄美さん。みんなの目が怖い。いやだ。やめてくれ。出自（しゅつじ）が違うだけじゃないか。どうして探偵の戯言をすっかり信じているんだ。みんな今まで、ぼくをどんな目で見ていたんだ。ぼくがやったとどうやって証明するんだ。凶器だってまだ見つかっていないのに。

「そうだ凶器」ぼくはあわてて云う。「凶器はどうするんだ。ぼくは刃物なんて持ってない。それに子供が、たとえば不意打ちしてみせたって、和介さんや一郎さんみたいな大人を殺すなんて……」
「凶器よりもはっきりした証拠を見せよう」
話はここまでというような口調で、七村はポラリスを呼ぶ。
ポラリスはこんどは、大きな紙袋を持ってきた。
「執事に協力してもらい、和夜君の部屋をしらべさせてもらった。中から出てきたのがこれだ」
探偵は紙袋に手を突っこみ、それを掲(かか)げる。
夜さんの生首。

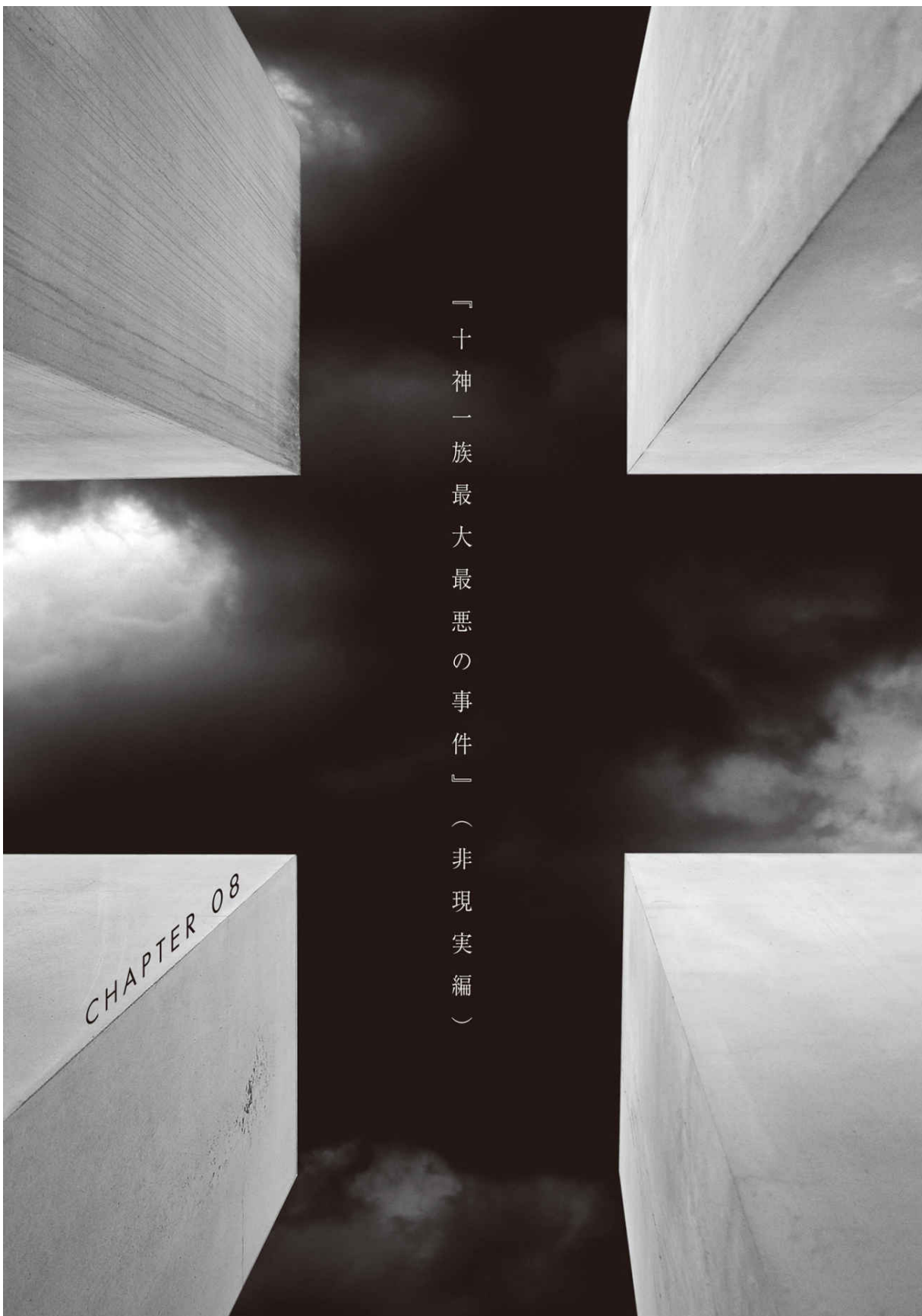
悲鳴が響いた。
それは姉さんの絶叫だった。
七村が生首をテーブルに放り投げると、姉さんは声帯の限界まで叫び、そのまま引きつけを起こしたように倒れた。すぐに四郎君が介抱する。蜜造さんも女みたいな悲鳴を上げて、椅子から倒れ落ちる。鷹夜君は興味深そうに生首を見やり、ペニーワースさんと二郎さんは動かない。

なんだこれ。
こんなものがぼくの部屋に？
嘘だ。嘘だ。嘘だ！
やはり七村は、ぼくを罠にハメようとしているのだ。
「和夜君の部屋の調査は、執事にも同行してもらった。私の細工では

ないことを、彼が立証してくれるだろう」
　この茶番に、ペニーワースさんも一枚噛んでいる？　いや、この中のだれよりも『次期当主決定戦』をつづけたいはずの執事が、そんなことをするとは思えない。それとも、ぼくのように血筋と関係のない者は、どうなってもいいと？　話をまとめるためなら嘘も吐くと？
　疑えばキリがない。
　そしてぼくには、他人を疑う時間はもうない。
「ニセモノがひと殺し」絵雄美さんがつぶやく。「ありがちな展開だわ。つまらない……」
「残念です、和夜君」
　鷹夜君が目を伏せた。

「地下牢にぶちこんでおけ！」蜜造さんが勝ち誇った声で提案した。
「『次期当主決定戦』が終わるまで、こいつを幽閉（ゆうへい）するんだ！」
だれも何も云わない。それは否定の沈黙ではなかった。地下牢？
そんなものがあるのか？　この城に？
七村はいつのまにかワイングラスを手にしていて、中には上品な量のワインが入っていた。
　血よりも赤いワインが。
「私の解決編は以上だ。探偵の世界では、乾杯ははじまりではなく終わりにする。それでは諸君。流血の果てに……」七村は優雅にグラスを掲げた。「乾杯（スコール）」

CHAPTER 08
『十神一族最大最悪の事件』（非現実編）

1

地下牢に幽閉された。
年代物の格子(こうし)は木で作られていて、がんばればなんとかなりそうだったけど、がんばらなければならないのはそこじゃない。
探偵のでっちあげを暴くこと。
でもどうやって。夜さんの生首まで持ち出されて、みんな探偵の言葉を信じている。もちろんぼくのしわざじゃない。生首がぼくの部屋から出てきたなんて嘘っぱちだ。
姉さん。
どうしてぼくを信じてくれなかったのだろう……いじけているひまはない。こんな地下牢は早く抜け出して、『次期当主決定戦』に参加しなければ。ぼくが十神の頂点に立って君臨(くんりん)しなければ。姉さんのた

しれない。[illegible]姉さんのた
めに。姉さんを狂った連中から守るために。
今やこの城は、探偵が主導権をにぎっている。
あいつは依頼主の蜜造さんの期待通りに、これからも冤罪を広める
かもしれない。そうなれば姉さんだって危険だ。ぼくが姉さんを守ら
なければ。姉さんはこの城で唯一の常識人だ。こんなところに一人で
いては、壊れてしまう。壊されてしまう。
だけど容疑者……というか犯人にされてしまった以上、ぼくがここ
を出るには、無実である証拠を見つけなければならなかった。
無実である証拠？
そんなものない！
探偵に先手を打たれて八方ふさがり。もしぼくが新証拠を見つけた
ところで、だれも信じてくれないだろう。やってられなかった。こん

な状態で、こんな気分で、がんばるということはできない。希望もなしに、どうやってがんばればいいのか。

絶望。

今のぼくにあるのはそれだけ。

絶望はひとをだらしなくさせる。ぼくは冷たい地下牢に寝そべり、思いつくままの呪詛と殺意を吐き出した。ちくしょう。探偵のちくしょう。蜜造さんのちくしょう。助けてくれなかったみんなのちくしょう。姉さん、姉さんのちくしょう……。

「世界征服でもしたいわけ？　そんなに殺意を振りまいてさ」

ぼくしかいないはずの地下牢から、声がした。
幻聴。ではない。
「こっちよこっち」
ふり返ってみると、そこには一人の少女がいた。
長い黒髪に、無地のワンピース。
信じられないほど白い顔には、濡れたような二つの瞳がくっついている。
知らない顔。まさか『真の十五人目』か。本当にいたのか。じゃあぼくは本当に最初から仲間はずれだったのか。絶望が広がる。
「鬼城君の跡継ぎはあんたね。あんまり顔が似てないけど」
「鬼城、君?」
当主のことだろうか。だとすれば、なんて非常識な呼び方だ。
「きみ、どうやって地下牢こ一

「こうやって地下牢に」
少女が床を叩くと、軽い音とともに一部が開いた。隠し通路とでもいうやつか。だけど閉じこめておくための地下牢に、どうしてこんなものが。
「慣れがいるのよ」少女は苦労して床を戻した。「角に力をこめて叩くのがコツ」
「……それより、きみはだれなの」
「私は件(くだん)よかわいそうな」
クダン？
どんな字を書くのだろう。そして何が『かわいそう』なのだろう。

「もちろんこれは通称よ。自分の名前なんてどうでもいいわ」クダンと名乗った少女は、心から興味なさそうに云った。「これ以外にも、いろんな名前をつけられちゃったな。くだべ。牛の如の者。牛鬼（うしおに）。アマビエ。尼彦（あまびこ）。覚（さとる）の化ケ物。牛女（うしおんな）。被験体Ｓ９３８……。ああでも、牛女だけは今も許せないかも。ホント失敬（しっけい）だわ。で、あんたの名前は？」

「……和夜。和む夜とかいて和夜」

「へー。鬼城君らしい適当な名前」

「きみはなんで当主のことを『君』づけで呼ぶの？」

「あんたはなぜ父親のことを『当主』って呼ぶの？」

「…………」

「何よ沈黙しちゃって。辛気（しんき）くさいやつね。緊張してんの？　それじ

ゃあ私がリラックスさせてあげる。とっておきの秘密なんだけど、鬼城君って最初は、太郎(たろう)っていう名前だったの。全国の太郎さんには悪いけど、名前をつけるときにまず除外するでしょ太郎って。鬼城君の名づけセンスのなさは親譲りってわけ」
「改名したのか」
知らなかった。
「改名したというか、私が変えさせたから」
「なんで」
「私が名前を奪ったからに決まってるでしょう。あのね、この世界でもっとも大切なのは名前なの。名前さえあれば、虚像(きょぞう)もまた実像になる。ニセモノとか本物とか、公式とか非公式とか、そういったものが

無効化される。……ねえ、本当に何も聞いてない？」
　クダンが首をかしげる。
　なんのことかはわからなかったけど、ここで不審を持たれるのは得策ではないことくらい察していた。こういうときは沈黙が有効。ぼくはしゃべりすぎた。しゃべりすぎて、もっとしゃべる探偵に云いくるめられた。
「わかった。愛されて育ってないのね。それで何も知らないんだ。やーいやーい」幸い、クダンはよくしゃべってくれた。「あんたって、とーってもかわいそう。ひとは愛されないと世界征服とかしちゃうから」
「ぼくは愛されて育ったよ」
「だからここにいるわけ？」
　一般的な返答は、「それってどういうこと？」みたいなやつだろう

けど、これではいけないことはわかっていた。さらに今回は沈黙が使えないこともわかっていた。
「そうだよ。ぼくは勝った」

勇気をふりしぼって云った。
どうなるか。
どう出るか。
クダンが凝視(ぎょうし)する。
深い穴のような瞳。
濡れたような黒い瞳。
ぼくはこの目を知っている。
草食動物。
牛。

「そ。おめでとう」牛女は云った。「これであんたは『十神一族の繁栄の秘密』を獲得できる。それじゃさっそく、あんたの一番大切なものをちょうだい」
「一番大切なものって?」
「決まってるでしょ。名前よ。十神和夜っていう名前」
たしかに十神和夜という名前は、ぼくにとって何よりも大切なものだ。
自分と姉さんをつなぐ唯一の証。
自分と十神を接続する金メダル。
自分が自分であるための履歴書。
ぼくはそれを、
「わかった」

くれてやることにした。
ほかに道はないから。
とん。
細い指先がぼくの額を突く。
たったそれだけ。
拍子抜けしたけど反応は見せなかった。怪しまれるわけにはいかない。
「はい完了」クダンは指をはなす。「和夜という名前は、これであんたのものじゃない。私の所有物。名前を奪われたあんたは、私から逃れることはできない。もう二度と、和夜という名前を口にしてはいけない。口にした瞬間にこの関係はおしまい。私だけの和夜。私の外側へは一歩も出られない」

私だけの和夜。というフレーズが思いのほか心地よかったけど、疑問が一つ浮かんだ。

「じゃあ、自分をなんて呼べばいいの？」

「好きなように呼んだら？　えーとね、たしか太郎君の適当な名前リストには、牧水とか公彦とか一義とか広明とか極夜とか白夜とかあった気がするけど」

「白夜」

「気に入った？　沈まぬ太陽。永遠の象徴」

「気に入った。それを使うことにする」ぼくは静かに眼鏡を押し上げた。「ぼくは……」

「ぼくは今日から十神白夜。十神財閥の御曹司だ――

「そ。おめでとう」クダンはふたたび云った。「ほらね、名前さえあれば簡単でしょ。現実も非現実も同じでしょ。あんたたちの世界なんてそんなもの。いつか壊れて、終わって、更新されて、それにも気づかないで生きている。それじゃ挨拶代わりに、ちょっとそれっぽい雰囲気で予言してあげましょう」

予言。

予言と云ったのか？

質問の衝動（しょうどう）が猛烈に湧（わ）いたけど、なんとか抑（おさ）えた。

クダンは牛によく似た濡れた瞳でぼくをとらえながら、奇妙な声でこう云った。

一ツ　『直（ジキ）ニ解放サレルデアラウ』

二ツ　『部屋ノ壁ヲ確認スベシ』

三ツ　『繰リ返シニ注意セヨ』

四ツ　『塵（チリ）ト化スデアラウ』

五ツ　『依（ヨッ）テ白夜ノ勝利』

「それ何？」

「知るもんですか。予言するのは私の仕事。それを活用するのはあんたの仕事でしょ、白夜」

「ぼくの仕事……」

「世界征服したいんでしょ」

「え？」

「隠すまでも韜晦するまでもなく、もうばっちり顔に書いてあるわ。私の予言があれば、もちろん可能よ」

クダンは隠し通路を開けると、「じゃあ」と云って消えてしまった。あまりにあっさりした退場だったので追うこともできなかった。

「予言。十神白夜。御曹司。世界征服……」

足音が近づいてくる。

ぼくは自分の顔をばしばし叩き、眼鏡をかけ直すと、『幽閉されていじけている子供』を演じた。

鷹夜君が地下牢の前にやってきた。

憔悴しきった顔つき。

「和夜君、きみを解放します」

「解放？」
「なんとお詫びしていいのか。きみも見ますか？　いえ、見るべきでしょう」
「何があったの」
「真犯人が自白……いえ、自殺しました」

2

『すべて僕がやりました。和夜君の部屋に生首を置いたのも僕です。部屋の鍵は探偵が開けました。探偵は僕の罪を他人にかぶせるために雇いました。罪の重さに耐えることができず自殺します。もうしわけありません。鷹夜は何も知りません。蜜造』

蜜造さんの首吊り死体は、部屋の中央付近でぶら下がっていた。その顔は葡萄色に染まり、舌がだらしなく垂れ、ロープでくくられた首は、心なしか少しのびているようにも見える。ロープは天井にある大きなシャンデリアに結ばれていた。踏み台に使ったのか、死体の脇には椅子が置かれていた。

「一時間ほど前、ぼくが発見しました……」鷹夜君の声はかすれていた。「鍵はかかっていませんでした。早く見つけてもらいたかったのでしょう」

ほらみたことか……。

ぼくは怒りと、それより少しだけ大きなよろこびに包まれながら息を吐いた。ほらみたことか。

壁にかかった振り子時計が鐘を鳴らす。時刻は午後四時ちょうど。

明日の今ごろは、『次期当主決定戦』がすべて終わって解散してい
る。
ぼくは蜜造さんの死体と、便箋にとりとめなく書かれた遺書を交互
に見ながら、クダンの言葉……いや、予言を思い出していた。

一ッ　『直ニ解放サレルデアラウ』

「鷹夜君。このことをみんなには」
「もちろん知らせました。忍さんは泣いてよろこんでいましたよ。涼
彦さんはゲラゲラ爆笑していましたが」
「蜜造さんは本当に自殺なの？　だれかが自殺に見せかけたんじ
ゃ……」

「もし絞殺したあとで、自殺に見せかけようと吊るせば、死体の首には二重の跡が残るはずです」
鷹夜君の言葉にみちびかれるように、蜜造さんの首を確認してみる。ロープが食いこんだ首に不自然な痕跡はない。
「遺書は本物?」ぼくはそれでもまだ心配だった。「だれかが書いたとかは」
「この筆跡はまぎれもなく蜜造兄さんのものですね。ぼくが保証します。ぼくが信用できなければ、ペニーワースさんにでも聞いてみればよろしいでしょう」
自殺……なのだろう。
「なんか、あっけなかったね」
「まったくです。あっけない幕切れでした。兄が犯人だったとは。これまでこ悩んでいたことは。どちらの意味でも気づいてやれず、苦

れほどまでに悩んでいたとは、どちらの意味でも気づいてやれず心苦しいです。黄金の称号を辞退したいほどに」
「鷹夜君……」
「和夜君、これで終わりではありません」鷹夜君は自分を奮い立たせるように、無理に声を張った。「ほとんど時間は残されていませんが、犯人が死んだ今この瞬間から、あらためてスタートです」
「スタートって、何が？」
「『次期当主決定戦』ですよ。忘れてしまったのですか」
正直に告白しよう。
忘れていた。
なぜなら、ぼくはすでにクダンを手に入れているのだから。
当主の『信頼』を獲得する前に、ゴールにたどり着いてしまったのだろう。

[illegible]
そんなことはもちろん云えないので、適当に話を合わせるために、
「そうだったね」と中身のない言葉を口にしようとしたけど……。

3

バリバリバリバリバリバリバリバリバリ！
轟音が外から聞こえた。
ぼくと鷹夜君は顔を見合わせ、次の瞬間には駆け出していた。
階段を飛ぶように降りてエントランスに到着すると、城の外に出る。
城の正面は開けた海岸になっていて、砂地の上では一機のヘリがホ

バリングしていた。
「依頼人が死んだ以上、もうここに用はない」
探偵……七村が、ヘリのデッキに立っていた。
「ちくしょう！　逃げるのか！」
「和夜君、無罪放免おめでとう」
「うるさい！」
「私の腕をもってすれば、部屋の鍵を開けるのは容易だったよ。この城、今後はセキュリティを強化したまえ」
「うるさい！」
「依頼人である蜜造は死に、私は前金だけでもたっぷりの依頼報酬をいただいた。十神財閥には感謝しているよ。また事件があったら私を頼るといい」

「うるさい！」
「鷹夜君、あとはきみの自由だ。オッズの通りにいけば、勝つのは黄金であるきみだろう。せいぜい私を儲けさせてくれよ」
七村は乱れる髪を押さえつけた。
鷹夜君は無言のまま、にらむような蔑むような視線をヘリに向けた。
城からみんなが飛び出してきてヘリを見つけると、いっしょに連れていってくれという声を上げた。
「あいにく定員オーバーだ。何より諸君にはまだ、『次期当主決定戦』が残っているだろう。馬には最後まで走りきってもらわねば」七村は無慈悲に云った。「十神鬼城の『信頼』を手に入れられなかった

としても、明日の正午にはリミットで、このゲームも終わり、せいせい楽しみたまえ。それでは諸君……ロング・グッドバイ」
探偵を乗せたヘリは上昇して、見せつけるように島内を一周したあと、遠くの空へと飛び去ってしまった。ぼくたちは空を見上げたまま、しばらく動けなかった。勝者という意味では、七村が一番の勝者のような気がした。あいつは探偵という才能をフルに使って、十神財閥を出し抜いたのだ。

ぼくは予言と呪いを混同させながら一心に願う。どうかあの探偵が金のせいで危機に遭遇しますように。そして己の才能に絶望しながら自殺しますように……。
「和夜！」
姉さんがぼくに抱きついてきた。
ま、皆のドームドーム、ぼくはとうとう泣きそうになる。ああ、ああ姉さん。

甘い香りが広がり、ぼくはとろけそうになる。ああ、ああ姉さん
でもぼくは和夜じゃないんだよ。ぼくは十神白夜。十神財閥の御曹司なんだよ。ぼくは勝った。事件も終わった。だから何も心配しなくていいんだ。
姉さん？
なんで泣いてるの……。

4

命の心配をしない夕食なんて、いつぶりだろう。ぼくたちは沈黙していたけど、それでも安心しながら温かい食事を口に運んでいた。ス
ープを飲むたび、肉を食べるたび、この体にエネルギーが充満するの

がわかる。
涼彦と三郎君はともかく、二郎さんの姿がないことが気になったけど、考えても意味がないと思い直す。そもそも二郎さんは空手家にすぎない。『信頼』を見つけるほどの推理力はないはずだ。ぼくは甘い肉を咀嚼しながら、自分を安心させる言葉をたくさん作り出した。
眼鏡を押し上げつつ、周囲を見回す。
みんなはまだ事件の余韻から抜け切っていないし、『次期当主決定戦』のことが頭から離れない。だけどぼくは違う。ぼくは余裕の気持ちでいっぱいだ。
あと一日。
明日の昼まで何ごともなければ、だれも当主の『信頼』を獲得できなければ、このゲームはご破算になる。そうなれば『十神一族の繁栄

の秘密』を手に入れているぼくが、自動的に十神財閥の御曹司とな
る。どうかこのまま何も起こりませんように。
「『次期当主決定戦』のことだけど……」
四郎君がぼくの安心を打ち破った。
「もちろん、現在もまだつづいております」
「それは知ってる……。あのさペニーワースさん、この戦いに勝った
ら次の当主になれるだけじゃなくて、特典がつくんじゃないかな。つ
まり、『十神一族の繁栄の秘密』のことだけど」
「特典とは？」
「ただの直感だけど……何かしらの才能を持ったひとがつくんじゃな
いかな。そしてそのひとは、城の中にいるんじゃないかな」
この鋭い子供を今すぐ静かにさせろ！

「なぜ、そのようなことをお思いになるのですか四郎君」
「……この城にきてからずっと、ひとの気配がするんだ。ぼくたちのほかに、だれかいるような気がして」
「私も……」絵雄美さんがスプーンを置いた。「昨日、人影を見たわ。気のせいかと思っていたのだけれども」
「人影って」
四郎君が追求する。やめろ！
「階段の踊り場で、女の子っぽい人影が見えたのよ。それで気になって近づいてみたら消えてしまったの」
「消えてしまった？」
「カラクリでもあればべつだけど。隠し通路のようなものが。でも見つけられなかったわ」
「[illegible]

「あかずの間……もう一度しらべてみようかな」
「ごちそうさま」
ぼくはスープを一気に飲み干し、そのまま食堂を出た。
露骨すぎたかと後悔したけど、あのまま仲良くお食事をつづける余裕なんてなかった。
部屋に戻ろう。
あと一日。そう、あと一日やりすごせばぼくの勝ちだ。というか、クダンはすでに十神白夜の勝利を予言している。勝つのは……いや、勝ったのはぼくだ。クダンはぼくを十神の後継者だと思いこんでいるし、予言によるお墨つきも得ている。今のぼくは、ツキが尻から火を噴いているのだ。気楽にやろう。
クダンについて思案していたせいだろうか、ふと第二の予言を思い出した。

ニツ　『部屋ノ壁ヲ確認スベシ』

ぼくの足は自然と、蜜造さんの部屋に向かっていた。
鍵は開いたままで、首吊り死体は片づけられていた。
三郎君の部屋と同じく、蜜造さんの部屋の壁にも、大量の絵画がかけられていた。あの探偵は、ここでぼくをハメる打ち合わせを蜜造さんとしながら、絵の総額を計算していただろう。探偵め。あいつだけはゆるせない。
　ぼくは頭の片隅から消えてくれない怒りにくさくさしながら、絵画を一枚一枚はずして壁のチェックをはじめた。膨大な量の絵画をすべて取り除いたのに、期待したものは見つけられなかった。むしろほっ

とした。時計が鳴る。午後十時。一時間はこの部屋にいたようだ。

時計？

形容のむずかしい心地の中で、時計をはずす。

壁には、小さなボタンがあった。

迷ってはいられない。

ボタンを押す。

キュルキュルとどこかで滑車(かっしゃ)のようなものが回る音が聞こえた。そして一度だけ床が振動したかと思うと、徐々に天井が離れていくではないか。エレベーターのように。

ぼくの感情が壊れそうになっているのにもかかわらず床は淡々と下が

り……停止した。
天井ははるか高みにあった。
シャンデリアは遠く、手をのばしても椅子を使っても届きそうにない。ぶらさがったロープがむなしく揺れているのが見える。周囲に目をやると、四面すべてが壁だった。
ぼくは理解する。
だからあかずの間があったのか。
もう一度ボタンを押すと、ふたたび床が上昇して最初の状態に戻った。すべてがあるべき姿に戻った。
思考。というのだろうかこれを。

ぼくの頭はものを考えることもなく、いや考えるまでもなく、一つ

の解に到達した。これが正解なのだと本質直感が告げていた。蜜造さんに遺書を書かせ、首にロープをかけさせて自殺を演出できる人間は、この城には一人しかいない。

十神鷹夜。

犯人は鷹夜君だ……。

『超中学生級のアジテーター』という才能を駆使して蜜造さんをだまくらかし、壁のボタンを押したのは鷹夜君だ。きっと探偵の真の依頼人も鷹夜君だろう。蜜造さんこそ生贄羊（スケープゴート）だったのだ。あの黄金が、鷹夜君がすべてを煽（アジ）って、この舞台を演出したのだ。

そして今、鷹夜君は自由気ままに、自分が作り上げた舞台の上を舞（ま）っている。

姉さんが危ない。
ぼくは部屋を飛び出した。
必死に走り、ようやく食堂に到着する。
ビービービービービービービービービー
無機質な機械音が、城を支配した。
なんの音だろうか。
こんどは何が起こったのだ。
「おやめください！」
ペニーワースさんの声。
はじめて聞く、狼狽(ろうばい)した声。
殺人事件が起こっても平静をつらぬいていたペニーワースさんが、
どうしてそんな声を出す？

とてつもなくいやな予感がしたけど、選択肢なんていう贅沢は存在しなかった。

　食堂に入る
　自分の部屋に閉じこもる

このような選択肢はぼくにはない。食堂に入るしかない。ぼくにはリーチがかかっている。この手を壊されるようなことがあってはならない。平穏無事に明日の、十日目の昼をむかえなければならない。異常があってはならない。ぼくのために。姉さんのために。十神の名にかけて。

だけどぼくの決意よりも早く、異常のほうからやってきた。

包丁を手にした二郎さんが、食堂から出てきたのだ。
「鷹夜から聞いたぞぉおー」
その声は、二郎さんの咽喉から出ているとは思えないほど狂ってい
た。
「おやめください二郎様!」ペニーワースさんも飛び出してくる。
「いけません……どうか、どうか落ちついてください」
「やぁだよー」
二郎さんの持つ包丁が、ペニーワースさんの腹部に刺さった。
ビービービービービービー
目の前で起こる殺人を観察しながら、ぼくは変にのんきな心地で思
う。
ああそうか。厨房を荒らしたから警報が鳴ったのか。
ビービービービービービービー

二郎さんが包丁を抜き取ると、ペニーワースさんはその場に倒れた。床にはものすごい速度で血が広がっていく。

二郎さんは、ぴくりとも動かないペニーワースさんから、ぼくへと視線を戻した。

その目に宿るのは殺意。

ただそれだけ。

「次はあぁ、お前だぁあああああああああ！」

血に濡れた包丁が振り上げられる。

衝撃が全身を駆け抜け、気づけばぼくの体は床に転がっていた。

その上には、姉さんが。

「だ、大丈夫？　これは……」

「危ない！」

ぼくは姉さんを蹴り飛ばす。
次の瞬間、姉さんの首があったところを包丁が一閃した。
二郎さんが体勢をくずす。
ぼくは二郎さんの脚を蹴ったけど、『超高校級の空手家』にそんな攻撃は通用しなかった。すぐにバランスを立て直して、包丁がふたたびぼくをとらえようとする。
警報音をかき消すほどの悲鳴が聞こえた。
ぼくも二郎さんも、本能的に動きをとめる。
いつのまにか絵雄美さんが立っていて、この狂乱を前に放心している。いつものポーカーフェイスはどこかに消えて、おびえきった女の子の顔で。
二郎さんは絵雄美さんのもとに駆け寄ると、八つ当たりでもするよ

うに白い咽喉を掻っ切った。
ぴゅっ。
鮮血が噴き出し、二郎さんのたくましい体に返り血が飛び散った。
その姿はもう、鬼にしか見えなかった。
絵雄美さんは何かを云いたいのだろうけど、咽喉をやられて言葉にならない。ひゅーひゅーと空気が漏れるだけ。やがて絵雄美さんの体から命が消えて、死体が床に倒れた。
二郎さんは、鬼は、こんどは姉さんを凝視している。
「姉さん逃げて！」

ぼくの言葉にはじかれたように、姉さんは駆け出そうとするけど、脚がもつれてまともに歩くこともできず、転んでしまう。

「しねよおおおおおおぉぉぉぉぉおおお！」
狂った声と狂った刃が、姉さんに襲いかかる。
が。
二郎さんの包丁は、間一髪というところで停止した。
新たな刃物が、新たな狂気が、二郎さんの攻撃をふせいでくれたのだ。
「まいっちゃうなぁ。オレを蚊帳の外にして殺しなんかやってるわけ？　あとさ、空手家なら空手家らしく拳で戦わにゃ。シロートさんが刃物を持っても、自分を傷つけちゃうだけだぜ。可憐な少女ならともかく、テメーみたいな筋肉ボーイが手首を切っても画になりゃせんよ。ドハハハハハハハハハ！」
あの笑い声を、今日ほどありがたく感じたことはない。
ぼくの兄。

元『超高校級の殺し屋』。
十神涼彦。

5

「兄さん……」
「お、びっくりだな和夜クン。テメーのキャワイイお口から『兄さん』なんて言葉を聞くのは何年ぶりだろ。キャワワーン。母性本能がほとばしるワ。まあオレは兄だけど。男だから母性本能とかないけど」
「い、いったい何が起こってるの？」
「こっちの台詞だぜ。腹が減ったんで食堂にやってきたらコレだも

の。急に事件の速度を上げられちゃかなわん。『毒薬と花束と　美人の死骸（しがい）を積んだ　フルスピードの探偵小説』ってやつですかぁーーーっとおおお！」

涼彦が腕力と気合いで押し返すと、二郎さんは空手家特有のステップで下がり、間合いを取った。

「ようカラテキッズ。なんでまた殺して回ってるんだ。トチ狂ったか？」

「聞いたんだぁああ」

「聞いてんのはオレさ」

「鷹夜がなぁ、教えてくれたんだぁ」血まみれの二郎さんが包丁をかまえた。「お前らみんなが、一郎兄貴を殺したってなあああ」

「一郎ってだれだっけ。序盤（じょばん）で死んだザコの名前なんておぼえてねー

よ。登場人物表を読み返さにゃ」

「一郎兄貴を忘れるなよぉおぉぉおおお！」

挑発に乗り、二郎さんが突撃する。

涼彦はそれをギリギリのところでかわして、両手に持った穴開き包丁で斬撃(ざんげき)をくり出したけど、二郎さんはすさまじい反射神経で回避する。

「やっぱ料理用の刃物じゃ調子出ないぜ……なんて云うと思いましたか！」涼彦はとても楽しそうだった。「こちとら、どんな刃物だろうと手にした瞬間に元気百倍だっつーの。勇気の鈴がリリンリンだっつーの。素敵な冒険ルルンルルン……」

くだらない軽口を聞くつもりはないようで、二郎さんが包丁を突いてくる。

「どわっと！　まだしゃべってる途中でしょーが。ったくこれだから格闘技系は好かんよ。まるで美学ってものがない」
こんな情況で、よくもしゃべっていられるものだ。
姉さんはまだ脚が震えていたけど、それでもなんとか立ち上がり、手すりにつかまりながら階段を上がった。
ぼくもここから逃げ出すことに決める。
本当は姉さんに同行したかったけど、ぼくたちを断ち切るようにして刃物の応酬がくり広げられているので、反対側の廊下を走った。ぼくたちの薄情さに涼彦が文句を垂れているけど相手にしている余裕はない。心の中で二秒間だけ謝罪。
騒ぎを聞きつけたらしく、途中で四郎君と出会った。
「また殺しが……？」
「そうだけどそうじゃない」

「どういうこと」
「逃げながら話す」
廊下を突っ走りながら、ぼくは自分の見てきたことを説明した。蜜造さんの部屋の秘密。偽装自殺。二郎さんの凶行。ペニーワースさんと絵雄美さんが刺されたこと。涼彦の救援。はぐれてしまった姉さん……。
「ボタンのこと、よく気づいたね。自分で見つけたの？」
四郎君はこんなときでも勘が鋭かった。さすが白銀。
「みんな鷹夜君がやったんだ」ぼくは答えないことにする。「最初から全部、鷹夜君の犯行だったんだよ。二郎さんをおかしくさせたのも鷹夜君だと思う。変なことを云って煽ったんだ。四郎くんは何か吹きこまれてない？」

「何も。……とにかく鷹夜君をさがそう」四郎君は云った。「どんな理由で、ぼくたちを皆殺しにしようとしているのかを聞かないと」
「理由？　殺したいから殺すんじゃなくて？」
「『信頼』を見つけるのを、あきらめたのかもしれない」
「それで生き残った自分が跡継ぎになるって？」
「わからない。でも何か理由があるはず」
「あったとしても簡単には答えてくれないと思うよ」
「二郎さんと涼彦さんなら、二郎さんの分が悪い……。二郎さんをうしなえば、鷹夜君の立場は弱くなる」

四郎君の言葉は、ぼくに新たな不安を植えつけた。
二郎さんのほかにも、鷹夜君に洗脳された者がいるとすれば？
ぼく。姉さん。涼彦。四郎君。そして犯人である鷹夜君を除外すれ

ば、ほかに生き残っているのは……三郎君。どうか部屋に引きこもってアイドルソングを熱唱していてほしいと願った。いや、四郎君だって本当はどうだかわかったものじゃない。
結局、ぼくが信頼できるのは姉さんだけ。
最初から変わらず。
ぼくたちは城の中を走り回った。警報音はいつのまにかやんでいた。部屋の一つ一つを開け、くまなくしらべたけど、鷹夜君の姿はない。当たり前だ。二郎さんを暴れさせて、ぼくたちの抹殺（まっさつ）を狙っているのだとすれば、絶対に見つからないところに身をひそめているに決まっている。
「くそ」ぼくは悪態を吐いた。「どうしよう。城の外かも」
「……ねえ、ぼくを疑ってる？」
気づけば四郎君がこちらを見ていた。

「とんでもない！　なんでそんなこと」

「こんなときに云うのもなんだけど、ついさっき、『信頼』がわかったんだ」

「えっ！」

頭が真っ白になる。

「直感だけどね」四郎君は少し恥ずかしそうにほほえむ。「でも、間違いないと思う……。それをきみに教えたら、ぼくを信じてくれるかな？」

「し、四郎君？」

「答えてよ……」

「だけど、せっかく自分で気づいたのに」

「ぼくは十神の跡継ぎなんてまっぴらなんだ」

「は？」
「ぼくはね、音楽家になりたいんだ」
四郎君はわけのわからないことを云った。音楽家？
「十神財閥の御曹司より、音楽家になりたいっていうの……」
「うん」即答。「だからぼくの思いつき、きみにあげる。それをぼくの『信頼』としてほしい」
「四郎君が何を云ってるのか、ぼくにはわからない。十神より大切なものなんて……あるわけがないのに」
「あるんだよ。いつかきみにも、わかるときがくる」
「嘘だ。冗談じゃない。やだよそんなの」ぼくの常識を壊さないでくれ。「十神だけ。十神だけなんだ大切なのは！」
「きみには、それしかないから？」

「ぼくには……それしかないから」
「幻想だよ。きみはたしかに十神の血を継いでないけど、だからって無理に手にすることはない。自分が今しっかり持っているものを大切にするんだ」
「でも、ぼくは、ぼくはからっぽだよ」本当にそう思っていた。「ぼくから十神を取ったら、もう何も残ってない」
「そう」四郎君は一瞬だけ、とても悲しそうな顔になった。「だったらなおさら、『信頼』を教えてあげなくちゃ。きみがいやだと云っても、勝手に話すよ。あのね、父さんの『信頼』というのは……」
暗がりから何かが飛びかかり、四郎君に激突した。
二つの物体は廊下を転がり、はげしく格闘している。
やがて短い悲鳴が聞こえ、直後にべつの悲鳴が聞こえた。

そこにあるのは二つの死体。
一つは四郎君。
そしてもう一つは……。
死んだはずの、
十神夜だった。

6

もはやぼくの頭脳では回収できなくなっていた。すーっと現実が消えて、非現実がその姿を現しつつあるのがわかった。非日常を超えた非現実の国が立ち上がり、ぼくの足場を食い破っていく。ここが非現実でなければ、説明がつかない。これは非現実が見せる幻影なのだ。
どうして夜さんが生きている？

どうして首と胴体がつながっている?
全身が震えはじめる。ぼくはそれでも現実の一粒を見つけるために、震える手を死体にのばす。
夜さんの胸には深々と、包丁が突き刺さっていた。触れてみるとまだ体温がある。死んだばかりなのだから当然といえば当然だけど、非現実に浸食(しんしょく)された只中(ただなか)で、そのぬくもりは不自然にさえ思えた。
どう見ても、十神夜だった。
作り物のような顔も、ドレスのような服も、今にも悪口を云い出しそうな口唇も、何から何まで十神夜だった。何より、これは人形ではない。CGやロボットというくだらないオチでもない。あるいは幽霊という、もっと最悪なオチが待っているのだろうか。非現実の国では

どんなことだってじゅうぶんにあり得る。
いっぽうの四郎君は、首を切られていた。顔に血の気はなく、ついさっきまで会話していたものとは思えないくらいに完璧な死体だ。こんな状態になってまで反撃した四郎君の強さをぼくは思った。四郎君。何もしてあげられなくてごめん。音楽家にしてあげられなくてごめん……。
いろんなことを思ったけど、どちらも死体なので反応しない。生きているぼくが、ちゃんと前に進まなければ事態は変わらない。
だけどこれほどの非現実が、ここまでの虐殺が展開されている中で、何をどうすればいいのか。この壊れた事態は、論理的に解明できるものなのか。正しく収束できるものなのか。なんのとっかかりもないのに。

いや。

予言。

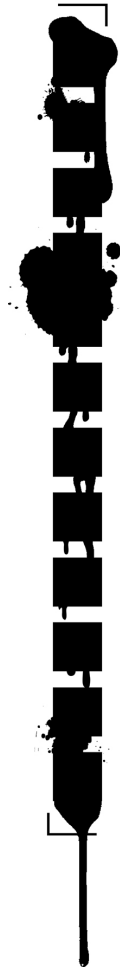
ぼくには最強の非現実があるじゃないか。

今のところ、予言通りの展開が、順番通りに発生している。ならば次は第三の予言について考えるべきだ。非現実を食いとめる、ぼくにやれる唯一の作業。

三ツ　『繰リ返シニ注意セヨ』

まったくわからない。なんのことだろう。くり返しといって思いつくものすらない。ぼくは何か重大なことを見逃しているのではないか。重大なこと？　決まっている。死んだはずの夜さんが、首をくっつけて舞い戻ってきたことだ。復活？　不老不死？　違う……論理を

武器にしなければならないのに、非現実を採用してはいけない。だけど何も思いつかない。時ばかりがすぎていく。二郎さんと涼彦はどうなったのだろう。ものごとを冷静に考えられる状態じゃな……。

「■■■■■■■■■■」

え？

今のは、悲鳴？

姉さん。

唐突な吐き気がはじまり、その場に吐瀉物をまき散らす。

姉さん。

二つの死体に吐瀉物が飛び散って、なんだか不思議な映像。
姉さん。
そしてぼくは我に返った。
姉さん！
うまく力の入らない脚を強引に動かして走った。廊下がひどくやわらかく感じる。走っても走っても前に進まないような気がしてもどかしい。そしてふたたび嘔吐の予感……うるさい！　吐いてる場合じゃないだろ！　一秒でも早く、姉さんのもとに行かなければならないんだ！
ふらふらした足取りで、それでも姉さんの部屋の前までやってきた。
「姉さん？」
ドアを開ける。

十神夜が、姉さんに包丁を突き刺していた。

姉さんの顔面は血だらけで、左腕も真っ赤に染まっている。

夜さんは、姉さんに馬乗りになり、鼻歌交じりでそれはそれは楽しそうに殺戮(さつりく)していた。抵抗する力も残っていないのか、サクサクとくり返し腕を刺されているのに、姉さんは動こうとしない……くり返し？　くり返しがなんだって？

「なァんだ。まだ生きてたのかい。しつこいガキだねェ」夜さんは面倒くさそうに、ぴくりとも動かない姉さんからはなれた。「鷹夜が妙なことを考えてるようだねェ。でも、アタシには関係ないよ。騒ぎに乗じてどいつもこいつも殺してサ、親父の云う『信頼』とやらを、ゆ

っくり考えさせてもらうよ。ハハッ、アタシたちは１００％の確率で勝利するでしょう！」
「だ、だ、だれだ？」
「アタシは『超高校級の気象予報士』、十神昼。天気は朝と夜だけじゃ不自然だろ？　昼も必要サ」
十神昼と名乗る女は、その姿とはあまりにも不釣り合いな口調で答えると、下品な笑い声を上げた。
「いつから、この島に……」
「最初からに決まってるだろ。アタシは正真正銘、十神鬼城の娘だからねェ。どっかのだれかさんとは違うサ。アタシたちは、朝昼夜の三つ子姉妹。ちゃぁんと最初からこの島にいて、アンタらといっしょにチェスもしたし、ご飯も食べたけどねェ。気づかなかったかい？」
「でも、でも――一刻も早くこの奇怪な存在を否定したかった。「で

も、初日に見せられたオッズには、十神昼なんて名前はなかった」

「はァ？　知らないよそんなことは。オッズなんてのは、『次期当主決定戦』をゲームにして楽しんでる連中が勝手に作ったもの。アイツらがアタシの存在を知らなかっただけの話。まァ、無理もないか。巧妙に隠れていたからねェ」

「隠れて……いた」

「手駒は多い方がいいって、あの探偵も云っていただろ。だからって、最初から全部を盤面に出す必要もないのサ」

非現実の霧が晴れていく。

第三の予言の意味が、ようやくわかった。

朝昼夜の三つ子姉妹は、朝と夜の双子だとぼくたちに思いこませよ

うとしていたのだ。
十神昼はうまく入れ替わることで、『バカンス』にも参加していたかもしれない。きっと参加していただろう。『次期当主決定戦』の舞台の下見として。
十神昼のことは、もちろんペニーワースさんは知っている。だけどぼくたちもすでに知っているのだろうと思って、とくに何も云わなかったのだ。あるいは、十神昼の存在を秘匿(ひとく)してほしいと頼まれていたた？　そんな裏工作は可能だったのか。それともぼく以外のみんなは多かれ少なかれ、そのようなことをやっていたのか……。今となっては、真相は藪(やぶ)の中。
「船には、三人と一体で乗りこんだのか」
「少しは脳味噌を使ってるようだねェ。そう、あそこが一番危険だっ

たよ」
初日。ぼくたち十五人の兄弟は、二隻の船に分かれてこの島にやってきた。
ぼくの乗った船には、十神朝（人形）と夜さんがいた。
そしてもう一隻の船には、十神朝（本物）と十神昼が乗っていたのだ。
船から降りればすぐに『次期当主決定戦』がはじまるのだから、船の中のことを思い出す者はいないだろう。しかも連続殺人事件が発生して、それどころではなくなったのだからなおさら。
さらにだめ押し。
八日目。

夜さんのやった『奇想の演出』によって人形が暴かれ、これで完全に、夜さんは一人っ子だと思いこんでしまった。

でも本当は。

十神朝（人形）とぼくをのぞいて、十神朝（本物）と十神昼をくわえれば……。

『次期当主決定戦メンバー』

①一郎

②二郎

③三郎

④四郎

⑤蛮造

⑥鷹夜
⑦雄介
⑧朝顔
⑨和介

⑩絵雄美
⑪朝
⑫昼
⑬夜
⑭涼彦
⑮忍

きっかり十五人。

ぼくはやっぱり、後継者レースのスタートラインにも立っていなかった。

笑えない。泣けてくる。

「泣けてくる」だからそう云った。「絶望だ。こんな絶望ってあるか……」

「なんだか知らないけど、絶望はあるサ。アンタはこれから絶望の底に落ちて、絶望状態になって、最後にはぶざまに死ぬんだからねェ」

「ぶざまに死んだといえば、十神朝がぶざまに死んだよ」

自分の口からそんな言葉が流れたのにおどろく。ああ、ぼくもこんなふうなことが云えるのか。

「……なんだってェ」十神昼の目の色が変わった。「朝姉ちゃんを殺

したのかい！　アンタがあああああッ！」
「あれは本当にぶざまな死に方だったな。フンコロガシみたいにごろごろころがって、なんの意味もなく死んだよ。一切の意味もなく死んだよ」
「やめろおおおおッ！　朝姉ちゃんを馬鹿にするやつは殺すッ！　今すぐ殺すッ！」
十神昼は金切り声を上げながら、刃物をかまえて突っこんできた。
それがぼくに突き刺さるよりも前に、十神昼の胸に穴が開いた。
「びっくり。こんなにも上手にできたのは今回がはじめてだよ」
「な……なんだい。これ……は……」
可一つ理解できないまま、十神昼は絶命した。

[illegible]
ぼくは死体には目もくれず、姉さんのもとに駆け寄った。

姉さんは穴だらけだった。

顔面からはぽこぽこと血が噴き出し、左腕の傷口からも大量の血が流れている。でも息はある。生きている。よかった。よかったね姉さん。ぼくがきたからもう大丈夫だよ。ほら見て。ぼくはもう和夜じゃないんだ。和夜なんていう弱虫じゃないんだ。十神白夜なんだ。ぼくはクダンを手に入れた。予言を手に入れた。そしてこの力がある。ぼくが姉さんを守るから心配しないで。十神から、世界から、涼彦から、姉さんを守ってあげる。ぼくは今や力そのもの。このぼくを倒すことはだれにもできない。

追撃から身を守るため、部屋の鍵をかけた。

ふり返る。

血まみれの姉さんは、美しかった。
動けない姉さんを見て、ぞくぞくした。
姉さん。
いや……義姉さん。
ぼくたちは血がつながっていないんだ。
だから愛し合うことができる。

あの男とは違う、正当な愛の交換ができる。

7

「聞いてくれるかな……。犯人はぼくなんだ」
ぼくは姉さんを愛しながら云った。

8

「最初に殺した和介さんは、あれは本当に仕方なかったんだよ。島にきて三日目の夜、池のほとりに呼び出されたんだ。和介さんは『信頼』の内容を、『ひとを殺すほどの決意を見せつけること』だと思いこんだ。それでだれよりも殺しやすい末っ子のぼくを狙ったんだよ。ぎゅうぎゅう首を絞められているあいだ、姉さんのことばかりが頭をよぎった。そのうちに、こんなところで死にたくないと思ったんだ。だって、ぼくが十神の後継者になって、涼彦から姉さんを救わなくちゃならないし、こんな危険なやつらがいる中で、姉さんを一人にするわけにはいかないもの。そしたら……この力が発現した。原理も何も

わからない。気づいたら和介さんの胸に穴が開いて、死んだ。わけがわからなかったから、ボートに乗せて死体を隠したよ。本当は池の真ん中あたりまでボートを出したかったんだけど、あのときはまだ死体に慣れてなかったからね。死体といっしょにボートに乗るなんて考えられなかった」

「和介さんの死体を隠して部屋に戻ろうとしたとき、ふと顔を上げたら、朝顔さんが見てたんだ。部屋から。ぞっとして……それで、それで、それでそれで、それでもぼく、朝顔さんが大好きだったから、忘れようと思った。ぼくが忘れたら、朝顔さんも忘れるって決めつけてその日は寝たんだ。でも翌日の四日目。やっぱり忘れられなかったよ。でも朝顔さんを殺すなんてできなかった。それに朝顔さんは部屋

にこそり、はかしかし、部屋の前にいておかしいかしれ、そしたら朝顔さんの首無し死体が発見されたじゃないか。そのあとすぐ自殺ってこともわかって……。きっと朝顔さんは、ぼくやみんなが後継者レースでおかしくなるのを、命をかけてとめようとしてくれたんだ」

「朝顔さんの自殺をしらべていくうちに、どうも気になることが出てきた。朝顔さんの自殺を他殺に見せかけようとした工作と、遺書を持ち出した痕跡が見つかった。ぼくにはすぐにわかった。あれは遺書じゃなくて告発書だって。そして遺書……というか告発書を盗んだのが雄介さんらしいことも。きっと雄介さんが何かしてくると思ったし、実際、何かしてきた。強請(ゆす)ってきたんだ。十三歳の子供をだよ？　ぼくは雄介さんの部屋に呼び出されて、脅迫された。金をせびられた。

ぼくは十伸財閥の一員だから、普通の子供よりはお金を持っていたか

いくら一被験者の一員だから、普通の二倍くらいはお金を払っていたからね。もちろん、お金を払ってすむのならそうしたけど、雄介さんが今回だけで話をつけてくれるとは思えなかった。そしたら、なんだか腹が立ってきてね。気づいたら例の力が出ていた。雄介さんはぼくに云われるままワイヤーに首をかけたよ……自殺装置をまたセッティングした理由？　ぼくが屈しなかったら、それを使って脅そうとしたんじゃないかな。告発書はびりびりに破って、そのあと食べたよ」

「六日目に一郎さんに呼び出されたときは、それでも覚悟を決めた。昼間だったし、そもそもあの力は自由にコントロールできなかったから。なんでわかったのかは知らないけど、一郎さんはぼくを和介さん殺しの犯人だと云ってきた。本当こ、なんでわかったのか……。雄介

さんが自殺じゃないと疑ってたのかもしれない。だって自殺する動機がないもの。雄介さんは殺されたって仮定して、そこから推理を進めてぼくに見当をつけたのか、それとも、元『超高校級の外科医』の目が何かを見つけたのか……。なんにしても、ぼくは正直に話すようにって云われた。正直に話す？　できるわけがない。できるわけがないよね姉さん。そしたら、あの力が出てくれた。ほんの一瞬だったし、とても小さなものだったけど、突き刺すだけならじゅうぶんだったよ。一郎さん、びっくりした顔だった。ぼくだってびっくりした。いきなり力が出たし、一郎さんはまだ生きていたから、気が動転してそのまま部屋を飛び出しちゃったんだ。もし一郎さんの血文字が『和夜』のまま残ってたら、きっとそこで終わってた」

「八日目に夜さんを殺したのは、あれだって夜さんが悪いんだ。寝つけなくて食堂に飲み物を取りにいこうとしたら、部屋から出てこようとする夜さんとばったり会って。あのとき夜さんは、『奇想の演出』をしたのに成果がなくて、イライラしてたんだろうね。いつも以上にぼくに悪口を云ってきた。もう慣れてるからがまんできたけど、でもあいつ、とんでもないことを云ったんだ。あいつは、涼彦と姉さんの関係を知ってた。……夜さんは、こんなことを云ったよ。『あんたの兄と姉は獣だ』『昨日もやってたのを聞いた』『兄妹同士で気持ち悪い』って……。姉さん、それって本当？　ここでも涼彦に変なことされてたの？　かわいそうに。ごめんね。ごめんね。でも、もう安心していいよ。ぼくは十神財閥の後継者になったんだ。だれにも好き勝手させない。夜さんは、気づいたら[illegible]。[illegible]

させない。姉さんに、気づいたら首チョンパになってた。おかしなことをぼくにしゃべるから……。でも、これからはだれにもぼくの悪口を云わせない。ぼくはクダンを手に入れた。だれにも負けない。だれにも馬鹿にされない。ぼくは、ぼくは十神財閥の御曹司なんだもの。姉さんを幸せにしてみせるから……」

9

時刻は午後十一時三十二分。
あと少しで九日目が終わる。
明日の昼にはぼくが王子様。
応急処置しかできなかったけど、姉さんの止血はうまくいったようだ。まだ完全に血は止まって

た。まだ完全に血はとまっていないし、赤黒くにじんだ包帯を痛々し

い。それでも包帯でぐるぐる巻きにされた姉さんは、美しかった。

「……首は」姉さんの意識は朦朧としていたけど、なんとか会話はできるようだった。「夜ちゃんの首は、どうして、あなたの部屋に」

「探偵たちがぼくをハメたんだ。蜜造さんはぼくを犯人に仕立て上げて……あ、そうだ忘れてた。大変なんだよ姉さん。鷹夜君が蜜造さんを殺したんだ！　鷹夜君が犯人なんだ！」

「犯人はあなたよ、和夜」

「え。何を云ってるの……。黒幕は鷹夜君なんだよ。それで今、鷹夜君をさがしているんだけど」

「あなたは、ひとごろし」

「やめてくれ。ぼくが殺したのは四人だけだ。そのうち二人は正当防

衛」
「あなたは保身で殺したの。お願い気づいて……」姉さんの口から血が垂れる。「もう、それもわからなくなっているの？　だったら、あなたは、くるってる」
「やめてくれそんなふうに云うのは！　姉さんのために殺したのに」
「私のせいに、しないで」
姉さんが泣き出した。傷が痛むのか。
「泣かないで。ねえ、泣かないで姉さん……。もうじき『次期当主決定戦』は終わりだ。そうすれば、ぼくの勝ち。『信頼』を見つけたってもう遅い。だってぼくにはクダンがいるんだから。予言があるんだから……」
ガチャリ。
鍵の開く音。

ドアが開けられ、二郎さんが現れた
屈強な肉体と包丁を見せつけながら、部屋に、ぼくと姉さんの聖域に、足を踏み入れようとしている。ああそうか。マスターキーはペニーワースさんが持っていたのだった。
ぼくは自在にあやつれるようになった力を使うため、右手に意識を集中させた。高エネルギーが爆発するような灼熱を感じ、次の瞬間、ぼくの右手にはぼんやりと光輝く剣状のものが現出していた。
だけど二郎さんはその犠牲になることもなく、大きな音を立てて倒れた。背中には穴開き包丁が刺さっていた。
「ドハハハハハハハハハハ……ハ?」涼彦は笑いながら部屋に入ってくると、ぼくの右手を見て目を丸くした。「なんだそれ。『スター・ウォーズ』のコスプレかよ和夜クン。だったら殺すのは兄じゃな

[illegible]

くて夕たろうか……って　ネタバレ警報発令！　まさかここが地球だ
とは思わなかった！」
「お前なんか兄じゃない。他人だ」
　ぼくは云い切ってやった。
「義理の兄は兄じゃね？　法律的な意味で」
「それでも血は他人の血だ」
「冷たいやつだ。氷飴(こおりあめ)みたいだな」
「氷飴は冷たくない」

「え……マジでか？」
「お前を殺す。お前を殺して姉さんを守る」
「オレの耳にゃ、『お前を殺して姉さんを奪う』って聞こえるけどな
あ」涼彦は肩をすくめる。「つーか和夜クン、スペシャルパワーを獲
得して元気なのはわかるけど、大事な目的を忘れてませんか。

得して元気なのはわかるけど　大事な目的を忘れてませんか　ランー
はだれをさがしていたんだっけ？」
「ぼくはここですよ」
次にドアの前に立ったのは、鷹夜君だった。
圧倒的なほど余裕に満ちた顔つきを浮かべて、艶のある髪をなでている。
「さあみなさん、そんな物騒なものは捨てましょう。兄弟の中で生き残っているのは、ぼくたち四人だけなのですから仲良くしないと。あ、三郎君もいましたね。ものの見事に失念していました。今から四人で麻雀でもします？　あ、また三郎君を忘れていました」
「んで、ペラペラしゃべるそのお口は、次にどんな言葉を云うんだ？　あいにくオレらは、ガキの妄言で煽られるほどピュアじゃねー

よ。全員かなり歪んでるからな。第四ユガ紀！　ドハハハハハハハ！」
「涼彦さん」鷹夜君は動じない。「ぼくの計画である全員虐殺を実行するには、あなたの存在がネックでした」
「そりゃそうだろな。なんかオレだけキャラ設定が違うもんな」
「手を組みませんか？」
「おやま！　意外すぎる言葉に、涼彦の心は秋風のように揺れるのであった……。テメーと手を組んで何すんのさ」
「二人で十神を支配するのです」鷹夜君は誘うように煽るように両手を広げた。「ぼくは『次期当主決定戦』には、さほど執着していませんでした。というのも、力くらべではなく知恵くらべだったからです」

「まったくよくわかる話だ」
「ぼくは自分の力を、自分の言葉を使って勝負がしたい。そのうえで勝ちたい。ならばもう、こんな茶番じみたゲームは潰して、十神の本陣に切りこもうと考えました。十神に宣戦布告しようと考えました。『次期当主決定戦』の挑戦者たちの首を手みやげにして、直接乗りこもうというわけです。ただそうなるとやはり、力が必要です。最適な人物は涼彦さん、あなたを措（お）いてほかにはいません」
「まったくよくわかる話だ」
「いかがです？　ぼくとともに十神を倒し、新たなる十神を作り上げようではありませんか。おそらくこれは、血で血を洗う煽り合いになるでしょう。戦争となるでしょう。ぼくたちで戦争をはじめ、戦争を終わらせ、次の戦争をするのです。こんなに魅力的なことはないでし

よう？」
「うーん……。ヤダー」涼彦は云った。「自分のためなら家族を殺すようなやつと手を組むのはヤダー」
「自分の妹とやっておいて」
「これは愛だぜ」
「愛？」
「そう愛。……え、何この空気。じゃあ忍本人に聞いてみればいいじゃん」
鷹夜君よりも、ぼくのほうが聞きたいくらいだ。
愛？
実の兄妹で？
何を馬鹿なこと云ってるの？
[illegible]

だけど姉さんは否定しない
半分以上を包帯で巻かれた顔からは、完璧な肯定（こうてい）が観測できた。
「こ、壊れてるよ！」そう叫んだのはぼくだった。「そんなの嘘だ。嘘だろ？　ありえないって。兄と妹なんて現実にありえないって！」
「現実ナメんなよ和夜クン」涼彦がぴしゃりと云った。「この世にはな、オレにはちっともわからねーけど、母親と息子とか、兄と弟とか、祖父と孫娘とか、どうしようもないほど歪んで、でもそれで完結しちまってる愛ってのが、実際にあるんだよ。マイノリティを差別すんのはトレンドじゃないぜ」
　姉さんは涼彦にやられて、いやがっているのかと思っていた。
　小さな体を汚されてもなお、大きな体の陵辱（りょうじょく）に耐えているのだと思ってた。そしてそう思うぼくを、ぼく自身はまるで疑っていなかった。ぼくこそが正義だと信じて疑わなかった。なのに。なのにこれじ

ゃあ、ぼくが悪者じゃないか……。

「壊れてますね、たしかに」鷹夜君がほほえむ。「交渉は決裂です涼彦さん。孤独に勝てない人間には、敗北の道しか存在しません」
「カッコイイこと云ってるつもりだろうが、孤独じゃ戦争やれないぜ。独裁者の大半は既婚者だろ？　あとテメーが孤独なのは、単にモテないからだよ〜ん。才能関係ないよ〜ん」
「さようなら壊れた兄妹。ぼくだけが、黄金の十神鷹夜だけが……世界と戦える！」
鷹夜君が液体をまいた。
ツンと鼻にくる刺激臭から灯油（とうゆ）であることに気づいたときにはすべてが遅かった。

火がつけられる。
ボウ！　という音とともに、あっというまに室内は火の海と化した。
「やれやれ。モテない男はすぐ炎上だもんね」
涼彦は姉さんを片腕でかつぐと、もう片方の腕を振り下ろす。ほんの一瞬だけ、炎が左右に分かれる。涼彦は隙を見計らって部屋から飛び出した。ぼくもあとにつづく。
廊下にも炎が暴れていた。どうやら鷹夜君は部屋にやってくる前から、城内に火を放っていたらしい。交渉がうまくいかない可能性も考えていたのだろう。ぼくは現状も忘れて苦笑したくなる。あいつはだれも信じていないのだ。姉さんをうしなった今のぼくのように。

涼彦はあたりを見回して、まだかろうじて火が回っていない空間を見つけると、そちらに向かって駆け出した。
「逃げるが勝ち。炎は殺せねーからな」

10

炎の中をぼくたちは走る。そのいきおいはすさまじく、秒刻みで逃げ場がうしなわれていく。灼熱が肌を焼き、咽喉を焼く。髪の毛が焦げて、煙が目を痛めつけた。
ああ、まだ終わっていないんだと思った。

ぼくの『仁無村焼失事件』は、今もまだつづいているのだ。
涼彦はなんとかルートを見つけて進んでいるけど、あまりうまくはいっていないようだ。
「さっきのやつはできないの？　炎を消したやつは」
「テメーも見ただろ。ほんの一瞬だよあんなの。それよか、和夜クンはどうだね。イヤボンパワーでなんとかしてみなさいよ」
云われたので右手に力をこめ、光輝くそれを一気に放出してみたが、ごうごうと燃える炎を前にして、期待したほどの効果を発揮しなかった。たしかに炎は殺せない。
涼彦にかつがれた姉さんは気をうしなっているらしく、死んだように目をつむったまま反応しなかった。
姉さん。ぼくなんてお呼びじゃなかった姉さん。ぐったりした後悔が体中に広がっていく。だけど具体的に何を後悔しているのか、ぼく

にはもうよくわからなくなっていた。
まだ炎が床を這(は)っていない廊下を走っていると、
「ぶひぃいいい」
　ドアの向こうから豚の声がした。

　それは現実逃避の鳴き声だった。
「ぶ、ぶひっ。こ……こんどは二百九十七曲目。S-nery(サナリー)の『Radio Kiss』をうた……いま、す……。ぶひひひっ。ゆ、ゆるいーおーかーをこえててく……であいとおなじきせつーーー。ふ……ふりはーじーめーたばかりのーーーあめはしんじゅのかけら……」
　ぼくたちは三郎君を笑えない。ぼくたちの状況は三郎君とさほど変わらない。袋のネズミ。今はまだなんとか進めているけど、やがては炎に囲まれてしまうだろう。それは死を、敗北を意味する。

五ツ　『依テ白夜ノ勝利』

ぼくには予言があった。
それはただの言葉ではなかった。
未来を約束する天からの神託（しんたく）だった。
そうだ、ぼくはこんなところでは死なない。このていどの炎に焼かれはしない。なぜなら十神白夜の勝利は決定されているのだから。

がらがらと重たいものが崩れる音と同時に、天井の一部が剝がれた。
大量の火の粉と煙を上げながら、それは涼彦たちとぼくのあいだに

落ちてくる。
　分断されてしまう。
「うおーい、無事かね弟クン！」瓦礫の向こうから声がする。「とにかく逃げろ。オレたちのことは気にすんな。テメーはテメーのことだけ考えときゃいい。今まで通りに」
「兄さん！」
「あーん？」
「姉さんを、頼む」
「まかされよ。ほんじゃな和夜クン。いい夢見ろよ！」
　足音が響き、やがて聞こえなくなった。
　ぼくは歩く。
　熱い……。
　足もとがねばついた感じがして、うまく歩けない。見ると靴底のゴ

ムが溶けはじめていた。熱さを感じたので視線を向けると、服に火が燃え移っている。あわてて叩いてそれを消す。眼鏡も溶けてきた。たまらない気持ちになった。
　記憶にないけど、口無村のときも、こんなふうだったのだろうか。熱と炎と煙にやられながら、ひとりぼっちを味わいながら、こんなふうに歩いていたのだろうか。ぼくにもかわいそうな子供時代があったのかと思うと、少し、幸福だった。
「逃げてもむだですよ。効率よく燃えるように火をつけましたからね」
　鷹夜君の声がする。それはくぐもっているように聞こえた。録音テープか。どこまでも準備のいい……。
「勝つのは黄金であるぼく、十神（どくろ）鷹夜です。みなさんの死は決してむ

だではありません。すべての髑髏を見つけて、綺麗に洗い、十神財閥に献上して差し上げましょう。『次期当主決定戦』だの『信頼』だの、子供っぽい遊びに興じたみなさんは、どうぞ子供のまま、童謡でも歌いながら死んでください」

違う。

第五の予言はぼくの勝ちを歌っている。

ぼくはもう童謡を歌ってにこにこしているような子供じゃない。

ぼくは十神白夜。

十神財閥の後継者。

世界の地図を更新する覇王(はおう)。

「ぼくはみなさんを踏み台にして、これから十神に、そして世界に挑みます。ぼくの活躍を見ることができないみなさんは、じつにきの

ど……すが……結果はあきらかです。そう…………火を見るよりも明らか………で……のような…ですかぁらぁ……のおおお………はぁ………らぁ…あ……」

テープが溶けたのか、忌々(いまいま)しい声は聞こえなくなった。聞こえないと思ったら、急にさびしくなった。涼彦も姉さんもいない。敵すらぼくを見てくれない。

だれもぼくを見てくれない。

ひとりぼっち。

スタートに戻る。

どこかでまた瓦礫の落ちる音がした。

炎のいきおいが増してくる。

前方にも後方にもあるのは火だけ。

どこを見ても火。目を閉じても火。
赤々としたそれは、ぼくを包むようにして迫ってくる。
逃げ場はない。
熱い。
死にたくない。

五ツ　『依テ白夜ノ勝利』

ぼくは勇気を獲得するために、クダンの予言を頭の中でくり返す。
勝利。勝利。勝利。
十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜の勝利。十神白夜

の勝利。十神白夜の、十神白夜の、十神白夜の、十神白夜？

でもぼくは、ぼくの名前は、十神和夜なんだよ。

熱い。

熱いなあ……。

11

目を覚ますと、砂浜に倒れていました。

体を起こそうとした瞬間、激痛が全身に走ります。声も上げられないほどの痛み。なので倒れたまま、視界に映るものを見ることに専念します。

波の音。

砂粒の感触。
抜けるような青空に昇る太陽は輝いていて、目にまぶしいほどです。こんなにも健康的な風景を見るのはいつぶりでしょう。最近はずっと城に閉じこもっていたから……城？
なんとか首を回して、城のある方角に視線を向けます。

十鴉城は燃え尽きていました。

混乱と絶望が起爆剤になったのでしょう、頭が急に活性化して、惨劇の風景が猛スピードで流れはじめます。
死。死。死。いくつもの死。私を何度も刺す刃物のきらめき。おかしくなってしまったあの子。いつもと変わらなかったあのひと。そし

て炎。あっというまに脳が許容の限界をむかえ、頭痛となって襲いかかりました。

バファリン飲みたい。

カラカラと遠くから音が聞こえ、徐々に近づいてきます。だけど私は体を動かせないし、動かせたとしてもそのような気力はありません。気づくと涙が流れていました。どうしたのでしょう。目の潤(うる)みを感じるのは左目だけ。腕を強引に動かして、右目がある部分に触れてみます。顔のほとんどを包帯で巻かれていましたが、そこに本来あるべきものが損(そこ)なわれていることが、なぜか理解できました。

カラカラカラカラ。

小さな車輪が見えて、それが車椅子であることがわかりました。車椅子の横には、女性用の靴。

視界の端に映るのは、探偵さんの助手……ポラリスさん。

そういえば、ポラリスさんがヘリに乗りこんだ姿が記憶にありません。

ポラリスさんは思いのほか力持ちらしく、私を車椅子に乗せてくれました。それから腕時計を見せてきます。

十一時五十分。

この時間は。

そして今まさに空のてっぺんに昇ろうとする太陽は。

十日目。

今日は『次期当主決定戦』の最終日。

そして残り時間は、あと十分。

「あ。あ。あとじゅっぷんで……えほっ！」

しゃべろうとすると違和感が咽喉に走り、せきこんでしまいます。

ポラリスさんは私の様子にかまうことなく、車椅子を押しはじめました。

炎に襲われた十鴉城は、そのほとんどが焼け落ちていて、一部だけが爆撃（ばくげき）を受けてなお立っている健気な樹木のように存在しています。

途中、死体を見つけました。性別もわからないほど黒焦げになっていて、なぜか勝利宣言でもするように万歳（ばんざい）しています。全身には親の仇（かたき）のように、穴開き包丁が突き刺さっていました。死体を見ても、感情が動きませんでした。早くおうちに帰りたい。学校に行きたい。中間テストとか受けたい。

食堂に到着しました。

炎の被害をまぬがれたそこは、昨日みんなで夕食を食べたときと変

化がありません。白いレースのかかった長テーブルも、昔みんなでかくれんぼをしてペニーワースさんに叱られた暖炉も、すべて残ったまま。ふたたび涙が頬を伝います。私はこうして生きている。でもみんなは、みんなはもう……。

ポラリスさんは私を置くと、食堂の奥へと歩いていきました。テープレコーダーを操作しているようですが、ここからでは遠くてよく見えません。

カチリ。

ボタンが押される音。

ポラリスさんはテープレコーダーに顔を寄せて、何かをしゃべっています。

録音、しているの？
ピーピーピーピーピーピーピーピー
電子音が響き、惨劇の風景がフラッシュバックして、ふたたび頭痛がはじまりました。あまりにも簡単に血が流れ、あまりにも簡単に死が積み上がった記憶が、私の頭を壊しにかかっているのです。ですがよく聞いてみると、あのとき耳にした厨房の警報音とは、おもむきが違います。もっと事務的な、たとえば電子レンジが鳴らすような音でした。
電子音が停止すると、やはり事務的な響きを感じさせる音声が流れました。
「音声。言語。ともに認識完了。正解と判断します。あなたは十神財閥の次期当主となることが許可されました。おめでとうございます。

『次期当主決定戦』は終了です。残りの者は、今この瞬間から、十神姓と十神財閥の権力を剝奪します。以上です。なお、このテープは自動的に爆発します」

今までの災禍からくらべれば、あまりにもささやかな破裂音と煙が発生して、テープレコーダーは壊れました。ポン。

ポラリスさんはテープレコーダーに関心をうしなったらしく、きびすを返すとそのまま食堂を出ていこうとしました。金色に輝く長い髪が、夢のように揺れています。

「……あの」私は声帯をふりしぼって声を出しました。「あのテープは、どういう……」

「じきに迎えの船がくる」
ポラリスさんは私の知るかぎり、はじめて言葉を発しました。
「今のテープは、なんですか？」
「『次期当主決定戦』は終わった」
「で、でもポラリスさん……」
「北極星(ポラリス)は偽名だ」
「あなたは何者なの？」
「そんなのは最初から決まっている。十神財閥の御曹司……」ポラリスさんはハサミを取り出すと、金色の髪をざっくりと切りました。
「十神白夜だ」

ポラリスさん……いえ、白夜と名乗った少年は、何やら悪態をつきながらコンタクトレンズをはずしています。

「フン。眼球にプラスチックを直接張りつけるなど信じられん。人類の愚かさを証明する何よりの証拠だ」

「そんなにいやなら、眼鏡をかけていればよかったのに」

「女装に眼鏡はアンバランスだ」

よくわからない自説を展開させつつ、男性の服に着替えて眼鏡をかけました。そこにいるのは寡黙(かもく)な少女ではなく、どこかひとを寄せつけない印象をあたえる傲慢そうな少年でした。

「あなたは十神の者……なのですか」

「十神家百八人兄弟のうちの一人。序列は最下位の青銅。お前たち十五人は、どのようなシステムで自分たちが『次期当主決定戦』に選ばれたのかを知らないだろう？」
「え、ええ」
「家柄」少年はこともなげに云いはなちました。「母親の血筋がよかった。母親が金持ちだった。母親が政治をやった。それだけのこと。個人の能力によって選ばれたわけではない」
「私たちは勝負に勝ったとお父様が……」
「甘い言葉を真に受けるのは、愚民のすることだ。お前たちは今回の事件で必死の努力をしたとでも思っているのだろうが、ただの無意味な被害者にすぎん。勝負に勝ったと本気で信じているのなら聞くが、なぜお前たち十五人は、兄弟単位で選ばれている？　なぜ青銅が後継者レースに参加できる？　厳正な勝負がおこなわれたとすれば、青銅

がここにいるはずもないし、血筋もバラバラになったはずだが」
「それは、そうですけど」
「個人の能力より、血筋や資産を重要視するというのは、分類・選考する側としては効率的で、かつ安心だ。悪いことではない。だがそこに、『十神の後継者を、馬の骨に継がせるわけにはいかない』というなかったと」
「つまりあなたは……気を悪くしないでくださいね……いい家柄では思考が見え隠れしているのはゆるせん」
「俺はやり方を変えた。どんなに十神白夜を輝かせても見てくれないのなら、べつの存在となって『次期当主決定戦』に絡めばいいと思ったのだ。俺は数々の偽名を使った。あるときはデイトレーダーに、またあるときは探偵助手に……」

「七村さんの助手についた理由は？」
「やつの近くにいれば、十神と接点が持てると推測した。やつの受ける仕事は、いつでも大金が関係しているからな」
「それで探偵助手として、本当にこの島にやってきたわけですか。すごい……」
「当然だ」
「当然ですか」
「俺がすごいのは当然で、勝利するのもまた当然だ。次も勝つ。次の次も勝つ。つねに勝ちつづける。俺の軌跡（きせき）が、俺の功績が、能力はあるのにみとめられなかった者たちへの、手向けの花となるだろう」
少年は眼鏡を押し上げました。
朝に咲く花のように澄（す）んだ瞳が、私をとらえます。

「……みんなはどうなったの？」
「執事は生きている。傷は見た目より浅かった。黄金は玄関前で黒こげ。豚は丸焼き。お前の兄弟二人は見つからん」
それなら私には、もう何もない。
「お前には何もない」少年もまた宣告しました。「十神の名前と権力をうしない、兄と弟をうしない、片目と片腕もうしなった。どうだ、つらいか？　絶望しているか？」
「わからない」
「わからない？」
「私には……希望も絶望もなかったから。そんな贅沢、一度も考えたことがない。すべてを受け入れて、生きてきた。十神であることも、兄さんに愛されることも。弟に愛されることも」
「なかなか希有な性格だな。お前は『欠陥当主決定戦』に消極的だっ

たが、十神の後継者になりたくなかったのか？」
「さあ。ほしいとか、いらないとか、それも考えたことがなくて」
「壊れているな」
そう……なのでしょうか。私にはわかりません。私はずっと、こうやって生きてきたから。兄さんに何をされても、あの子に何を思われても、心を動かさないようにしようと決めたあの日から、希望も絶望も存在しない場所で生きてきたから。
「フン。合格だ」少年は鼻を鳴らしました。「お前のような視点がほしかった」
「視点？」
「お前は俺の伝記を書け」

「伝記って、あの伝記ですか」

「それがお前の仕事だ。俺の生き様と死に様を、情感たっぷりに、大仰(おおぎょう)に、だがしつこくなく、いやらしくなく、センチメンタルに浸ることもなく、クールな文章で記録しろ。勝利の記録で、俺にまつわるすべての敗者、すべての死者を鎮(しず)めてやるのだ」少年は云いました。

「今日からは、俺の姉として生きるがいい。後継者レースから落ちた者を十神として残すのは異例かもしれんが、だれにも文句は云わせない」

ああ、神様がいた。

そう思いました。

エピローグ

「迎えの船がきた」
少年の視線を追うと、水平線の向こうから、大型船がやってくるのが見えました。
非日常に満ちた島から、非現実じみた十日間から、日常へと連れ戻してくれる船は、じらすように迫ってきて、もどかしい気持ちになります。それと同時に、この島にはもう永遠にくることがないのだと思うと、身が引き裂かれるような痛みを感じました。ここは墓標(ぼひょう)でもあるからです。
私は気になってたずねました。
「あの、お父様の『信頼』って、結局なんだったのですか？」

「言葉にするようなことではない」

「テープに何かを吹きこんでいたじゃないですか」

「そういう意味ではないのだが……。まあいい。お前もいずれ気づく。気づかなければ、永遠にそのままでいろ。希望も絶望もない場所に一人でいろ」

やだ。

私もあなたと同じものが見たい。希望も絶望もすべて体験してみたい。心を動かしてみたい。たとえそれが味わったことのない苦しみに満ちていたとしても。

空を仰ぎました。

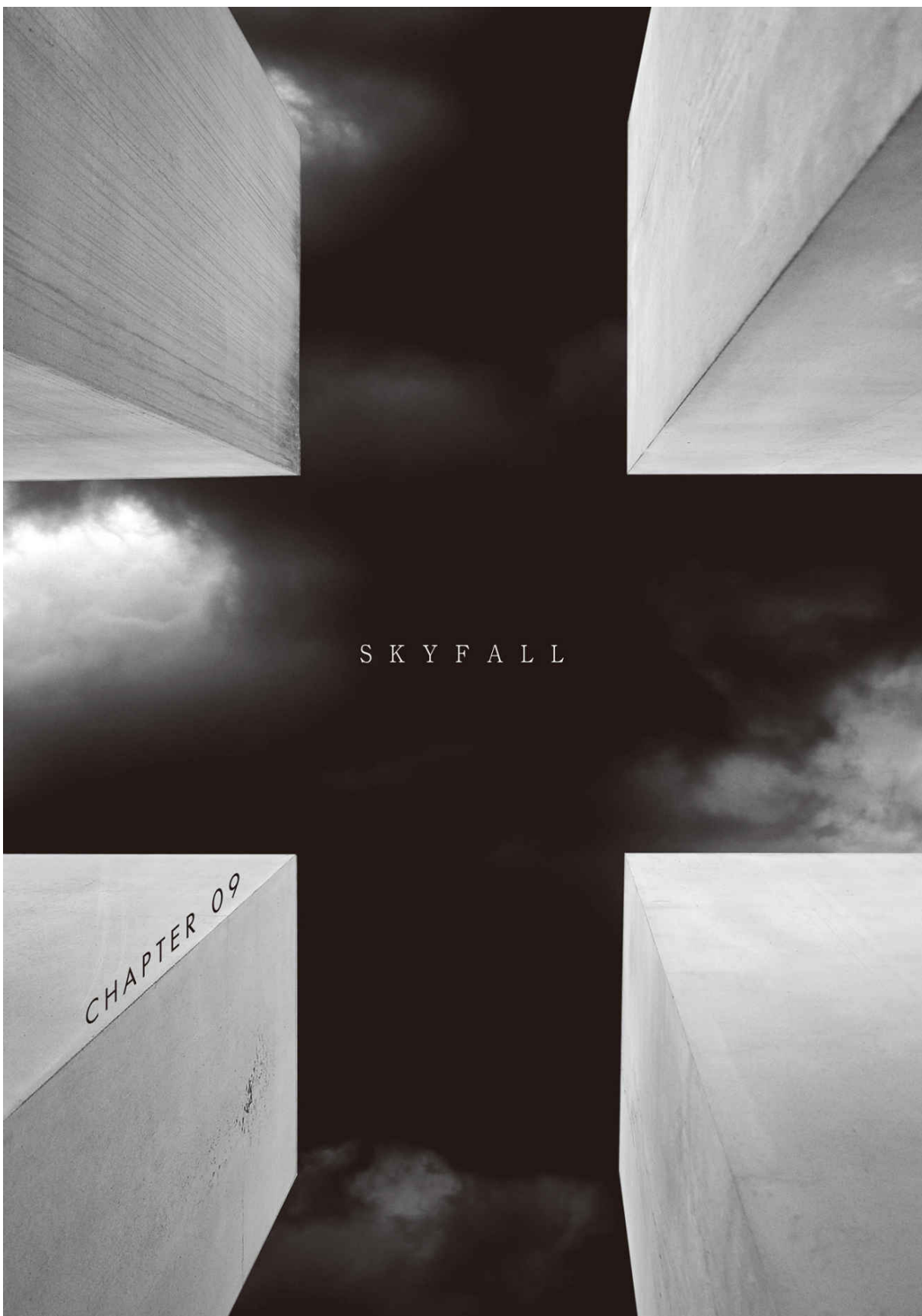
太陽光線の威力は本日のピークをむかえて、まぶしい。痛いほどに。だけど私はそこから目をそらさない。そらしたくない。

義眼（ぎがん）を入れよう。

義眼を入れ。
ふと、思いつきました。
キラキラ光る義眼を入れよう。綺麗な義眼を入れよう。春の朝。夏の光。秋の空。冬の夜。そうした美しいものを右目で見られないとしても、映すことはできるから。広めることはできるから。
映す。
広める。
それは私の新しい仕事である、伝記を書くのと同じ効能を持つから。
「予言については口外法度だ」少年は私に顔を向けます。「あれは、決して外に漏らしてはならない。世界のバランスを崩しかねん。そして俺は、あんなものは封印して、自分だけの力で十神をさらなる高みに置いてやろう。俺からは以上だ」

「……私からも一つ云わせて」
「許可する。なんだ」
「私がお姉さんになるのなら、そんな口の利き方をしちゃだめなんだよ」
面食らった表情は、どこにでもいるような少年でした。
（『十神一族最大最悪の事件』了）

SKYFALL
CHAPTER 09

1

現れたのは肉のかたまりでした。
よく肥えた豚に金髪のカツラをかぶせて、眼鏡とジャケットを装着させれば、こんな感じになるでしょう。
白夜様と同じ髪型に、白夜様が好んで着る白いジャケットを身にまとった肉物体を、ボルヘスで測定してみますと、

身長・１８５センチメートル。
体重・１３０キログラム。
胸囲・１２８センチメートル。
体脂肪率・66パーセント。

という非常識な数字のオンパレードが表示されました。肥満というレベルではありません。超肥満です。超肥満生命体です。薄暗い校長室には、そんな前代未聞の存在がありました。

ええと、みなさんおひさしぶり。

現場からは以上です。

2

「ククク。『絶望高校級の詐欺師』である俺の完璧な変装に、声も出ないようだな」

豚野郎の顔つきで、なのに白夜様の声でそんなことを云うものですから、頭痛に襲われてしまいます。バファリン飲みたい。しかし、私

以上の頭痛にさいなまれているのは、ほかならぬ十神白夜そのひとでしょう。
白夜様は端的に云いますと、ブチキレていました。歯を食いしばり、目を血走らせ、全身を震わせ、触れてもいないのにカタカタと眼鏡が鳴っています。
「ふ……ふざけているのか。愚弄しているのか。俺を。十神を。俺を。十神を。俺を。十神を。俺を。十神を。俺を。十神を……」
「どうした本物サン。何を乱れている。十神白夜らしくもない」

「お前、さすがにちょっと待て。その姿はなんだ。ちっとも俺に寄せていないだろうが。本当の意味で詐欺師だろうが。この汗ダルマめ」
「ずいぶんな物云いじゃないか。この肉体を獲得するまでに、どれほ

どの時間と努力を費やしたのかを知っているのか」
「知らん。そして永遠に知りたくもな……ぐぐっ。くそ、吐き気がこみ上げてきた」
「かなり屈折したナルシシストだな。ふむ、これが十神白夜か。本物になるのはむずかしい」ニセモノはでっぷり太った腹をさすりました。「貴様の云いたいことはわかっている。体形だろ？　これは俺のプライドさ」
「わけがわからん」
「その通り。他人にはわけのわからないものがプライドだ。貴様にもあるだろ？　たとえば、その性格設定をやめさえすれば、もっと楽に愚民どもを支配できるのに、いつまでも手放さないのはなぜだ？　貴様も馬鹿じゃないのであれば、傲岸不遜（ごうがんふそん）な性格が損するだけなのは理解しているだろ？　どうしてそんなに他人をこばむ」

「俺の話はいい」
「ククク。俺は貴様だよ」ニセモノは頬肉を震わせて笑いました。
「体形をスリムにすれば、俺の詐欺行為はきわめて容易なものとなるだろう。だが、ここでプライドがじゃまをするのだ。この肉体のまま他人を騙してみたいのだ」
「できるものか」
「できるさ。現に今、世界中が騙されているではないか。世界は、この俺こそが十神白夜であると認識しているではないか」
「だまれ。ニセモノが十神白夜を名乗るな」
「だまるのは貴様だ。すべての権力を奪われた貴様は、十神白夜ではないのだから」
「俺は十神白夜だ！—

あの高貴な口が叫び声を発するなんて、いつぶりでしょう。
「無意味だよ本物サン。それはただの言葉にすぎない。言葉というやつは、自分を肯定することも、他人を否定することもできるが、それ以上のことは何もしてくれない。言葉だけで、信頼を獲得することはできない」

ニセモノはぴしゃりと指摘すると、魚肉ソーセージのような指で眼鏡に触れました。
信頼。
その言葉によって、思考がふたたび過去に落ちかけます。
変装なのかべつの理由があるのかは知りませんが、四年前とは体形がまるで違いますが、ニセモノの正体はやはり……あの子ではないで

しょうか。

十神和夜ではないでしょうか。

「フン……。ニセモノに説教されるとはな。だが、たしかにそうだ。今のはただの言葉にすぎない」

白夜様は深い息を吐くと、まるで十神白夜を丁寧に演じるかのように、眼鏡を押し上げました。そしていかにも十神白夜がやりそうな角度に口角を上げて、「俺の正当性は俺自身が保証せねばなるまい」と云いました。

「ククク。できるのかね。十神白夜の権力（ちから）は、こちらがすべてにぎっ

ている。おたずね者は何もできない。小腹が空いたからハンバーガーを食べるなんて贅沢もゆるされない」
「俺はそんなもの最初(ハナ)から食わん」
「本物サンもいつか、ファストフードに敬意を払う日がくるだろう」
「俺が敬意を払うのは俺だけだ。俺は俺を肯定し、十神白夜を世界に示す。今まで通りに」
「くどいぞ。今やだれも貴様を十神白夜とは……」
「よかろう。ならば強制排除だ。今すぐお前を、価値ゼロの豚に戻してやる」
「価値ゼロは貴様だよ。存在価値も貨幣価値も希少価値も市場価値もゼロだよ」
「豚が経済を語るのはよせ。豚は豚小屋へ帰るといい。さっさと俺に真朱を返せよ」

真理を返せ。」

「あぁ？　負け犬眼鏡が」

「あぁ？　ポーク眼鏡が」

二人の十神白夜は、たがいの眼鏡がぶつかるほどの距離まで接近すると、憎悪のこもった瞳でにらみ合います。一触即発の空気が広がりました。

コロン。

ドアの隙間から何かが投げこまれた瞬間、室内に閃光が走り、私は視力をうしないました。爆音によって聴力も。あまりの衝撃にボルヘスが誤作動を起こしたらしく、勝手に検索がはじまります。

ボルヘス＝検索結果

＃6109０714
項目　武器・兵器
タイトル『閃光音響手榴弾（スタングレネード）』
強烈な閃光と爆発音で、対象を無効化させる非致死性手榴弾（ひちしせいしゅりゅうだん）の一種。
百七十デジベルの音と二百万カンデラの輝きで、相手の聴覚・視覚・平衡（へいこう）感覚を奪うため、おもに特殊部隊や警察の突入作戦で使用されている。
インドアアタックというわけです。
しかし、こちらは目も耳もやられているので、校長室の中で何が起こ

っているのかまるでわかりません。いくつもの足音。いくつもの気配。確認できるのはそれくらい。

私を拘束していた縄が切られ、そっと抱き上げられました。

「おひさしゅうございます、忍様」

回復しつつある視界に映るのは……懐かしい顔。

ペニーワースさん。

「遅かったな執事」どこかで白夜様の声。「職務怠慢だ。馘首してやってもいいんだぞ」

「残念ですがおぼっちゃま、それは不可能でございます。わたしは今や一介の執事バー経営者。十神とはなんの関係もございません」

「ニセモノ[illegible]

「[illegible]」

「逃げたようですな」

「見つけて焼き払え」

「御意」

ペニーワースさんは私をかかえたまま一礼し、爆圧で割れた窓に視線を向けます。ヘリコプターから垂れたロープが見えました。

ヘリは私たちを回収して上昇開始。

重力が下腹を引っぱり、忘れかけていた嘔吐の予感がよみがえります。

眼下には、急速に小さくなっていく絶望ハイスクール。

白と黒に塗（ぬ）り分けられた建物は、すぐあとにやってくる己の運命を知らないのか、目を模（も）した巨大ライトを能天気に点滅させています。

「おぼっちゃまは豚の丸焼きを所望しておられる。バーベキューを作

ってさしあげろ」
　ペニーワースさんが無線で命じると、ほどなくしてやってきた二機のヘリがミサイルを発射し、絶望ハイスクールは教会と校門を巻きこみながら崩れ落ちます。瓦礫が炎上し、夜空を染め上げる炎は、バーベキューというよりキャンプファイヤーに似ていました。みんなで輪になって、楽しく歌い踊るような。

もえろよ　もえろよ
炎よ　もえろ
火のこを　巻き上げ
天まで　こがせ

（作詞　串田孫一）

こうして絶望ハイスクールは崩壊しましたとさ。めでたしめでたし。でも、もうちょっとだけつづきます。

3

私たちを乗せたヘリは、仲間の二機とともに、東へと移動しているようでした。プラハの夜景は徐々に遠ざかり、前方には森林地帯が広がりつつあります。時刻は午前〇時四十分。

「説明しろペニーワース。なぜ元執事がここにいる」

「『世界征服宣言』の直後、十神から呼び出されましてな一ペニーワ

ースさんはいかにも執事という口調でした。「職を辞したとはいえ、十神には大恩ある身でありますし、おぼっちゃまの安否も気になりましたから……。十神は半信半疑といったところでございましたよ。日ごろのおこないが祟りましたな」
「皮肉はあとにしろ」
「十神としては無実を信じるいっぽうで、『もし本当に十神白夜が世界征服をしようとしていたら』ということも考えねばなりませんから、表立った救出ができません。そこでわたしに白羽の矢が立ったわけでございます。おぼっちゃまがクロだったとしても、『心配性の元執事が暴走して、十神白夜の私設部隊を煽り、チェコまで飛んできた』ということにしておけば、老人の愚行ですみますからな」
「フン。老人の愚行で、『針の隊』を勝手に動かされてはかなわん」

ボルヘス＝検索結果
＃３１０００７２９

項目　軍隊
タイトル『針の隊』

十神白夜を守護するために作られた私設部隊。構成員は百四十四人。銃器や航空機なども超法規的に所持している。
名称は、三島由紀夫の私設組織『盾(たて)の会』が、防人歌(さきもりのうた)（万葉集(まんようしゅう)）からとったものを模して作られた。

草まくら旅の転寝(まるね)の紐絶えば、我(あ)が手とつけろ。此の針(はる)持(も)し

旅のごろ寝に、下袴の紐がきれたら、わたしの手だと思うて、おつけなさいよ。この針でもって。

(折口信夫/口訳万葉集)

「レーダーに反応」

パイロットが報告した次の瞬間、すぐ横を飛ぶ仲間のヘリが撃たれました。制御を失ったヘリは、「コントロール喪失(ロスト)。これより墜落(ついらく)する!」と律儀に通信を終えた直後、本当に墜落してしまいます。

「ふたたびごきげんよう。ご無事なようで弱肉強食っ!」

おそろしい速度で出現したヘリが、私たちにならびました。

デッキに立つのは、赤い髪が特徴的な、ギターをかまえた女の子。

妙子(たえこ)ちゃん。

「[illegible]川研究所かい」

初瀬川研究所だい」
白夜様はうんざりといった顔つきでした。
「見つけましたよ十神白夜さん。だめじゃないですか逃げるなんて」
「お前の仲間が勝手に滅んだだけだ」
「牛殺しの金井(かない)妙子から逃げられるわけがないのです」聞いちゃいません。「というわけで十神白夜さんは、ここで捕まっちゃう運命ですよ。レッツ牛舎！　ドナドナ気分でドナらせてっ！」
「俺を生け捕りにするつもりか？　だがどうやって。今のヘリのように撃ち落としたあとで、俺がピンピンしていると思っているのなら、さすがに過大評価だと忠告しておくが」
「こちらは天下の初瀬川研究所。無茶も道理も科学で通してみせましょう」

妙子ちゃんはローター音をかき消すほどの爆音で演奏をはじめました。ここで安易に『ワルキューレの騎行（きこう）』を弾いていれば、ワーグナーとヨーロッパの関係を思い出してげんなりしていたでしょうが、曲は『エスパーニャ・カーニ』。

しかも演奏に乗って、唯香（ゆいか）さんが現れたではありませんか。

初瀬川研究所に連れ去られた唯香さんは、赤と黒のドレスに身を包んでいて、頭にはタコが載っていました。

機嫌悪そうな顔のタコが。

シュールには慣れたつもりでしたが、あまりの脈絡（みゃくらく）のなさに、どう反応していいのかわかりません。

「オ・レ！」妙子ちゃんだけが楽しそうです。「みなさん、売れない芸人を見るような目をやめてあげてくださいっ。これは洗脳です。頭

についたタコがなせるわざ。今の唯香さんは、オクトパシー唯香というわけですよ……うひゅひゅひゅ洗脳ですって。夢のような展開に妙子ちゃんドバ濡れっ！」

そう云って、唯香さんの頭に載ったタコをギターで押しました。

ぷににっ。

唯香さんの眠そうな目が、ほんの一瞬だけ見開かれて、ゆっくりと口が動きます。

「イカにもでござる」

沈黙。

チェコ上空に、冷たい風が吹き荒れました。

「おぼっちゃまは、このような輩（やから）と戦っていたのでござるか」

「おぼっちゃまは、このような輩と戦っていたのですか？」
「その通りだペニーワース」
「お察しいたします。脳に悪影響をもたらしていなければよろしいのですが」
「イカにもタコにも」唯香さんはマリオネットのように両腕を上げました。「捕食いたすでござるるるるるるるる」
ぢゅるるるるるる！
ドレスの袖から、触手にしか見えない数本の物体が飛び出ます。
それは仲間のヘリに迫ると、扇風機に指を入れるアホな子供のように回転翼をつかみ、ローターの動きを停止させました。ヘリは重力にしたがい落下し、残るは私たちが乗る一機のみ。
「なるほど。触手で俺を捕獲するつもりか。じつに不快だ」
旦那様は上を含ところに、ヘリの航跡についた家具に、「殺れ」と命

白夜様は吐き捨てると、ヘリの銃座についた隊員に「殺れ」と命じました。
しかしガトリングガンが火を噴く前に、
「無意味でござるる」
すばやく触手がのびてきて、隊員に銃座ごと巻きついたかと思うと、地上へと放り投げました。
「唯香さんの触手は世界一ですっ！　うひゅひゅひゅひゅひゅひゅひゅひゅ巻かれたい！　妙子ちゃんのOCTOPUSSYがズボ濡れっ！」
最低な下ネタが炸裂する中、唯香さんは自分自身を触手で覆います。すると姿が消えたではありませんか。
「擬態ですな」
ペニーワースさんが一言。

ボルヘス＝検索結果
♯９４１６７４２４
項目　習性
タイトル『擬態』

イカやタコが持つ色素胞という器官は、ゴム膜のように縮めれば濃度が増し、広げれば薄くなり濃淡を作り出せるため、周囲と同等の色に擬態することができる。

なるほどそれは致命的。しかもここはヘリの上で、暗闇の中なのですから、姿を消されてはひとたまりもありません。しかし私にはボルヘスがありました。暗視モードをオン。

ように。

なのに

「見えない……」

「そんなオモチャは通じません！　オクトパシー唯香さんの擬態は完璧です。材質、質感、さらには温度までも偽装できます。可視光を増やしても、赤外線を可視化しても、姿をとらえることはできませんよっ！」

スタッ。

着地音。

それは唯香さんがヘリに乗りこんでくる音。

肉眼とボルヘスの両方で機内を見回しても、異常を見つけられません。白夜様。ペニーワースさん。そして操縦席の隊員がいるだけ。どうすれば。どうすれば。このままでは白夜様が……。

その発想が至るよりも早く、私は懐から手錠を取り出すと、

その発想が宿るよりも早く、私は慣れた万年筆を取り出すと、めちゃくちゃに振り回していました。
ブルーブラックのインクが飛び散り、ある一点だけが不自然に浮かび上がります。
ペニーワースさんは迅速(じんそく)でした。
「おみごと(ヴンダーバール)。さすがの『青インク』でございます」
今までどうやって収納していたのか、背中から切りつめショットガン(ソードオフ)を抜き出すと、散弾をぶっ放しました。
目の前で、ばちばちと放電が発生。
擬態機能をうしなったらしく、唯香さんの姿が現れました。さらには制御もうしなったのか、何本もの触手が困惑したように蠢(うごめ)いています。
「『上申一矢最大最悪の事件』による負傷から回復。ノヘとノがたら

――『神の旅最大最悪の事件』による負傷から四年、リハビリを経て
に学んだ射撃の代物でございます」
頭のタコを払い落とされた唯香さんは、その場に倒れました。
「緊急回避！」
操縦席からの絶叫と同時に、ヘリが大きくかたむき、いくつもの熱源が脇腹ギリギリを通過します。
背後には、新たな機影。
「はっはっは」
まだくるの？

4

「当てちゃだめですよっ！　私たちの目的は、あくまで捕獲なんです

からね」
「殴りたいな。殺したいな」
「だからだめですって！」
「はっはっは」

笑い声とともにやってきたのは、骸骨教会で私たちを襲った地雷除去車、ウラガン（#41908870）でした。そこに巨大なプロペラをつけて、無理やり飛んでいるのです。初瀬川研究所のウラガン好きにも、そしてしつこさにも、こまったものだと思いました。
距離を詰めてきたウラガンには、四人の兵士がいました。全員、ロープのようなものでぶらさがっています。触手？
ウラガンから、ふたたび笑い声が聞こえました。
「はっはっは。おまっとさんでした。僕は初瀬川研究所の開発部門に

届する……ハカセとでも呼んでください。オモシロ兵器を作るアレです。水爆とか数式とかを愛するアレです」
「ハカセが遅いから、みなさんタコに引いてますよ。ギャグでやってるんじゃないかと思われてますよ」
「おやおや、僕は説明役失格ですね。ハカセなのに説明しないなんて、まるで演歌歌手なのにロックのリズムで……」
「早く説明して！」
「タコの擬態効果を軍事利用するという動きは、以前からあります。みなさんも報道やネットで見たことありませんか？　ステルス光学をもちいた『姿を消す兵士』を。僕はさらにタコ側に寄りまして、擬態効果だけではなく触手も軍事利用することを思いつきました。それで、最初はタコによく似た丸くて黄色くてぷにぷにした兵器を作った

のですかセクハラ三昧だったので破棄しまして、ヘリに今ぶらさがっている兵器を新たに作りました。『触手部隊（テンタクルズ）』とでも呼んでください」

ハカセと名乗った人物は一方的にまくし立てると、妙子ちゃんの乗ったヘリにウラガンを横づけしました。

いっぽう私たちは……。

「ペニーワースよ、率直に聞く。俺たちの残存戦力は？」

「汎用（はんよう）ヘリ一機。パイロット一名。単発式ショットガンを装備した元執事一名。以上でございます」

「ふたたび率直に聞く。十神はもうおしまいか？」

「否（ノン）。ありえません。四年前の『十神一族最大最悪の事件』とくらべれば、このていどピンチのうちにも入りませんな」

「命令だ。やつらを細胞の一欠片に至るまで殲滅（せんめつ）しろ」

「御意」
ペニーワースさんは恭しく一礼すると、唯香さんをデッキの外へと突き落としました。
「唯香さんっ！」
妙子ちゃんのヘリが急降下するのと同時に、ハカセのヘリから四人の触手部隊（テンタクルズ）がいっせいに飛びかかり、空中で姿を消しました。
「ソードオフは短所たっぷり……」元執事は得物をかまえます。「威力が低い。飛距離が短い。貫通力がない。おまけに一発撃つごとに装（そう）塡（てん）が必要。ですが」
発射。
さきほどのように放電が発生し、今まさにデッキから侵入しようとしていた二人の隊員が姿を現しました。

「銃身を切りつめたことで、発射された散弾は即座に拡散します。侵入経路が限定されていれば、目をつむっていても当てられます」
近くで足音が聞こえましたが、ペニーワースさんはそれを見越していたように反対側のデッキに向けて発射。こんどは一人の隊員が出現します。

「ま、そうでございましょうな。四人全員で同じデッキに押しかけるのは愚の骨頂ですからな」
「何を満足しているペニーワース。まだ一人取りこぼしているし、だれにも致命傷をあたえていないぞ。『細胞の一欠片に至るまで殲滅しろ』という俺の命令に反している。これが粗相（そそう）というやつか？」
「おぼっちゃま、せっかちになられましたな。それは今、装填しなが

ら考えているところで……」
プスプスプスプス。
触手部隊(テンタクルズ)の頭が、腕が、腹が、触手が、赤い花でも咲くようにべろんと開かれ、そのまま地上へと落下しました。コックピットを見ると、パイロットの頭にも赤い花が咲き、いちめんに血と脳漿(のうしょう)が飛び散っています。
「オッシャーー！　見つけたぜ。待てコラ！」
まだくるの？

5

パイロットを喪失したヘリの中で、御曹司と元執事はごく普通に会[illegible]。

記をしています。
「答えろペニーワース。何が起こった」
「新たな敵襲でしょうな。ただ、どのような攻撃なのかは不明です。ヘリを貫通したあとで、人体にこのような傷をあたえる弾丸など存じ上げません」
「ならば直接聞くとするか」

夜空には、大量の石像が飛来していました。
聖アウグスティヌス像。聖フランシスコ・ザビエル像。聖ヤン・ネポムツキー像。聖ヨハネ像。聖イブ像など……モルダウ川にかかるカレル橋に建てられた三十体の聖人が、胸や台座に武器を生やして飛び回っているのです。

空飛ぶ石像。
安っぽい黙示録を思わせる光景。
「だから待てやコラーーー！　お前ら全員逃がさねーぞ！」
聖アウグスティヌス像からは、予想した通り左右田さんの声が流れました。
「フン。生きていたか」
「生きていた？　それは違うぜ十神。オレは左右田和一が構築した追尾システムさ」
「追尾システムだと？　どういうことか説明しろ」
「って、説明してる最中だろうが！　ちゃんと話を聞けよ！　絶望ハイスクールに危機が迫ったら、ＡＩのオレが起動するようにプログラムされてたんだよ。わかったらオレの登場にビビって失禁しやがれこ

のヤロー！」
「それがこの石像群というわけか。石コロをびゅんびゅん飛ばすのが趣味とは、ＡＩといっても原始的な知能の持ち主らしい」
「『絶望高校級のメカニック』である左右田和一の夢は、ロケットを飛ばすことだったからな。石像の百や二百、朝飯前だっつーの……って、オレを馬鹿にすんじゃねーー！　本人は知らねーが、オレは高スペックなんだよ！　予測変換で変な文章を候補にしたりしねーんだよ！」
「絶望ハイスクールは俺が壊滅させたぞ」白夜様は淡々と事実を述べました。「主をうしなったのなら、ＡＩらしく自爆でもしてみせたらどうだ」
「オレにはオレの仕事ってものがあってだな……」

こちらに向かってくる聖アウグスティヌス像を、
パァン。
ペニーワースさんが粉微塵（こなみじん）に破壊しました。
「何しやがるジジイ！」こんどは聖ヨハネ像からＡＩの声がしました。「オレの出番ここしかないんだからさ、もっとしゃべらせろっての。優しさはねーのかよ優しさは」
ふたたびソードオフが炸裂して、聖ヨハネ像も粉微塵。
妙子ちゃんの乗ったヘリが急浮上してきました。
デッキには、気をうしなった唯香さん。
「じゃまするなっ！」
妙子ちゃんは石像に飛び移り、八艘飛び（はっそうとび）よろしくジャンプして次々と叩き割っていきます。
そして私たちのヘリは、徐々に高度を落としつつありました。

「……白夜様、つかぬことをおたずねしますが、ヘリの操縦はできますか？」
「当然だ。一時期はブルーサンダーで通学していたくらいだからな」
「ではどうして、悠々と腕を組んでいるのです？」
「コックピットを破壊されていてはどうにもならんからな」
はっとして見ると、計器類がズタズタになっているではありませんか。私の動揺と同調するように、ヘリが回転をはじめました。勝手気ままに動くローターが機体を回しているのです。
「おいコラ、楽しそうに回ってんじゃねーよ。メリーゴーランドか」
聖ヤン・ネポムツキー像が迫ってきました。
回転するヘリの中、それでもタイミングを合わせてペニーワースさんが一撃をくわえましたが、今回は粉砕できません。

「散弾ではなぁ！」
「青銅でしたか……。これは縁起がいい」
「へへっ。カレル橋でもっとも最初に作られた、この聖ヤン・ネポムツキー像は、唯一のブロンズ像なのさ。ジジイなら歴史にくわしくねーとな。戦争賛成とか戦争反対とか戦争とか騒いでねーとな」
「戦争にはいつだって賛成ですよ。ジジイですからな」
「ジジイ怖い！」
「ほめ言葉と受け取っておきましょう」
ペニーワースさんは弾を装填して、ふたたびソードオフをかまえます。
「ジジイってのは往生際が悪いなあ。何度やっても同じ……って、わわわわ！」

地上から、無数の炎が飛んできました。
炎が石像にぶつかるたび、夜空に地味な花火がいくつも上がります。動きの鈍いウラガンは格好の餌食となり、直撃を食らってあっさり墜落しました。
「地対空ミサイル？　ちょ、ちょっと待てよ。スティンガーっておい……。もう少しだったのに！」
ＡＩが騒ぎ立て、そして私は思い出します。
十神白夜が今、世界中から命を狙われていることを。
この攻撃はおそらく、暗殺者や賞金稼ぎによるものでしょう。もしかしたら正規の国軍だっているかもしれません。
スティンガーは無差別で、逃げる逃げないといったレベルではありませんでした。私たちのヘリも当然のように被害を受けます。衝撃。

お尻の部分が砕かれました。航空力学のことはよくわかりませんが、落下速度が急加速。地上が近づいてきます。死が近づいてきます。
「逆に好機ですな」ペニーワースさんは冷静でした。「お二人は、この隙に地上へ。チェコ国内に『針の隊』を潜伏させております。合流してください」
「そうさせてもらうか」
「は、はい」
私と白夜様は、脱出用のパラシュートを装着しました。
ですが。
「コンチキショー！　戦争賛成のジジイには、カミカゼアタックをおみまいしてやるぜ！」
ふたたび聖ヤン・ネポムツキー像が突撃をかけてきました。
そうはさせじとソードオフが火を噴くと、ブロンズに亀裂が走り、

「聖ヤン・ネポムツキー像がぁあああ！」という言葉とともに砕け散りました。

「『散弾ではなぁ！』とのご指摘をいただきましたが、たしかにそうでございますな。散弾でブロンズは砕けません」ペニーワースさんは弾をこめます。「ショットガンにも長所がありまして、弾丸の種類を容易に変えられるのでございます。今あなた様の脳天にぶちこませていただきましたのは、散弾ではなくスラグ弾。巨大な一粒弾でございます。大変おいしゅうございましたか？」

「うしろ！」

私の絶叫が功を奏したと判断するなら、間一髪のところで攻撃を回避できたこと。間に合わなかったと判断するなら、ソードオフがすべり落ち、ペニーワースさんが触手につかまったこと。

生き残っていた触手部隊(テンタクルズ)の最後の一人は、ペニーワースさんの体をヘリの外に押し出そうとしています。

「お早く」

ペニーワースさんは逃げるどころか、触手にしがみついて動きを封じました。

「行くぞ」

「見捨てるつもりですか」

そんなことを云いながらも、私にはわかっていました。地上からの攻撃はつづき、私たちを乗せたヘリは落下中。ここから逃げるほかに、やれることはない。それはわかっていました。

白夜様はこれといった余韻もなく、デッキから空に飛び立ちます。でも。

私はそこまで割り切れないから。
私はそこまで完璧じゃないから。
自分のためにこう云います。
「ペニーワースさん。死なないで」
「忍様、どうかお早く」
ペニーワースさんは、顔中のしわを紳士的に歪めると、これ以上ないといった笑顔を作りました。
笑顔に見送られつつ、空から落ちます。

機銃とミサイルの攻撃をくぐり抜けて降り立ったのは、プラハから東にある町、プルゼニでした。プルゼニ。シュコダの工場がある町。祁答院財閥のアジトがある町。ヨーロッパ最大の地下道が広がる町。ピルスナー・ウルケルの名産地。ふたたび舞い戻ってきたわけです。

プルゼニは今、深い霧につつまれていました。

私はボルヘスを呼び出して、夜と霧とで閉ざされた視界を調整します。少しずつ戦いに慣れてきた自分がいやでした。時刻は午前二時。どうも非常事態宣言下に置かれているらしく、ひと気がありません。そうでなくとも、世界中の殺し屋が集まってパーティをしているところに出てくる命知らずはいないでしょう。

そのような町に人影が現れたら、警戒(けいかい)するに決まっています。

ボルヘスを使う必要もないくらいに、その人影は近づいてくると、すぐ前で立ちどまりました。

反射的に白夜様の盾となった私を見て、ふっと笑ったように感じました。
美しい髪色の青年。
青年は前髪をなでると、そのまま敬礼のポーズをとりました。
「お待ちしておりました。真夜中のスカイダイビングはいかがでしたか？」
「ミサイルのせいでまるで風情がなかった。お前は何者だ」
「先日、『針の隊』に入隊しました。暗号名Ａ54です」
「知らん。ほかの連中はどうした」
「バックアップに回っています。お二人を保護するという隠密仕事に、ぞろぞろと集団で動くのはナンセンスですから」
「新米（ルーキー）にやらせるとは、『針の隊』の人材不足も深刻だな」

「かくれんぼは得意です。ご心配なく」
「たいした自信じゃないか。ではA54よ……」
「その暗号名では目立ちますので、お好きに呼んでくださってても結構ですが、そういう作業って照れるでしょうから、僕のほうでピックアップしておきました。安藤直樹。フォルテッシモ。セーラーV。12(トウエルブ)。芋餡(いもあん)。OSS117号……」
「じゃあ芋餡で」
「かんべんしてください」
「自分で提案したのだろうが」
「そういうことってよくありません？　ファミレスでハンバーグを注文した直後にパスタを食べたくなったりしません？」
「俺に庶民感覚を押しつけるな。じゃあA54のままでいい。ペニーワ

ースから連絡はあったか？」
「残念ですが。ただ、元執事さんのことを僕はあまり知りませんけれど、簡単にくたばるような御仁(ごじん)には思えません」
「そういうことだ」
白夜様は地上に降りてからずっと無言の私を一瞥しました。
「……この一件で、ぐじぐじ考えるのはやめます」そう答えるしかありません。「もうしわけありませんでした、白夜様」
「話を進めてもかまわんな」
「はい」
「A54よ、それでどうするんだ。俺たちにはお前のような隠密技術はないぞ」
「ご心配なく。幸いにも、ここはプルゼニ。モグラよろしく地下を進みましょう。白夜隊長のプライドがゆるしてくれればの話ですが」

「くだらん気遣いはよせ。天を舞うも、地を這うも、それが十神であれば同じことだ」

7

暗号名A54に誘導されて、私たちは霧が支配する地上から、闇が支配する地下道へと移動しました。地上についてから一時間以上も歩いているのに、疲労も眠気もやってきません。アドレナリンが過剰分泌されて、私は興奮状態にありました。脳裏にはさきほどの空中戦が、いやというほど展開されています。本当はこれからのことを考えなければならないのに、インパクトの強いできごとが消えてくれません。

現在を思考したい。
未来を志向したい。
私は生きているのだから。
私の仕事は『白夜行』を書くことだから。
「あの……」私の呼吸は荒くなっていました。「ここなら会話しても大丈夫ですよね。今のうちに何があったか報告してください。私たち、ほとんど逃げ回っていたから」
「逃げではない。移動だ」
白夜様は毛沢東みたいな云いわけをしました。
「なるほど。それも僕の仕事なのですね。大変だなぁ」前を行くA54は、飄々（ひょうひょう）とした口調です。「ニセモノによる『世界征服宣言』の直後、世界のあちこちで、謎の大量密室殺人事件が確認されました。日

本でもいくつかの都市で発生しています。『世界征服宣言』との関連性は不明ですが、関係ないというほうがむずかしいでしょうね。ここチェコでも、各地で発生していますから」

密室殺人。

私はその単語を耳にして、なんだかセンチメンタルな気分になります。目の前の状況がいそがしいので、大量密室殺人事件なんて失念していました。四年前は、密室一つで右往左往していたのに。

「チェコは事件の中心地に選ばれたらしく、人工衛星落下で大量の死傷者が出た直後から、国家非常事態宣言が下されまして、事実上封鎖されています。一部の無法者をのぞけば、だれも入ってくることができません。また同時に、だれも出ることができません。自分の国でドンパチやられてるチェコ政府は、白夜隊長にうらみたっぷりですし、

さらにチェコには、『世界征服宣言』を真に受けた暗殺者たちが、やはりたっぷりと犇いています。霧は夜明けには晴れるようですが、観光はオススメしませんね。しかし不思議なものです。連中は十神の権力もなしで、どうやって衛星を落としているのか」

「え？」

「そりゃそうですよ忍様。『世界征服宣言』が下された直後に、人工衛星はもちろん、十神が所有する軍隊も、僕たち『針の隊』も、所有資産も、丸ごとロックしたに決まっているじゃありませんか。ニセモノにはビタ一文、使わせていません」

よく考えれば、それはそうです。ニセモノはたしかに白夜様に成り代わり、すべての権力を奪いました。だからといって、それを自由に使えるかどうかはべつの話。

白夜様は……こんなふうに云ったら怒られるのでしょうが……金持

ちの高校生にすぎません。十神財閥という『親』がいる以上、自分のお小遣いでやりくりするしかなく、オイタがすぎればそれも取り上げられてしまうでしょう。

　ソニア王女。

　スポンサーは私の同級生、ソニア・ネヴァーマインド。ノヴォセリック王国の王女様が、人工衛星や各種兵器を、ニセモノに提供している。

　私が憶測(おくそく)を披露すると、Ａ54は合点がいったのかうなずき、「ちなみに絶望ハイスクールの存在と壊滅は、まだ報告してませんから」とついでのように云いました。

「どうして？　少しでも早く世界に公開すれば、それだけ白夜様の生存難易度も下がるんじゃ……」

「だって白夜隊長は、世界征服をするおつもりなのでしょう？」
どうして知っているの？
「報告するにせよしないにせよ、これは白夜隊長が選択すべきことです」Ａ54はふり返り、澄んだ瞳を私に向けました。「全部を『親』にチクるのは、『針の隊』としても抵抗ありますし」
「あなたは、私の考えていることがわかるみたいですね」
「報告を再開してもよろしいですか、忍様」
「どうぞ」

「怒った顔のほうがかわいらしいですね」
「いいからつづけて」
「『世界の選択を選択する会』は完全に壊滅しました。これも今のところ、白夜隊長のしわざということになっています。現状、白夜隊長

のもっとも重い罪ですね。各国の裏のトップ連中が皆殺しにされたんですから、チェコに人工衛星が落ちるより、世界にとって重大な損失ですよ。……とまあこんな感じで、チェコ政府やほかの国は、白夜隊長を殺すか裁判にかけたがっていますが、十神と学園は当初から、ニセモノのしわざであると判断して、チームを組んでいます」
「絶望ハイスクールは、希望ヶ峰学園の内ゲバだと聞いてますが」
「そのようですね。『超高校級の詐欺師』とやらが蜂起したそうです。さらには予備学科も関係していると」
「予備学科って、あの才能ないひとたち？」
「ひどい。忍様」
A54は大げさに反応していましたが、意味がわかりません。
「だって本当のことじゃないですか。才能ないから希望ヶ峰学園になんとかもぐりこもうとして予備学科に入ったわけだし、才能ないから

『パレード』なんていうデモを起こしているわけだし」
「ナチュラルにひどい。白夜隊長の悪いところが感染しちゃったのでは？」
「あなたこそひどいですよ。白夜様のひどさは後天的なものです」
「お前ら両方とも地獄に落ちろ」
白夜様が命じました。
「了解（ラジャ）」Ａ54が前を歩いたまま敬礼します。「まあでも、今回の大騒動はすべて、学園が起こしたものと云えるでしょう。しょうもない内部ゲバルトが、『世界征服宣言』にまで発展したわけです。おかげで十神は大損害」
「私たちの学校が迷惑をかけております……」
「学園は自分たちだけで処理したいようですが、しょせんは高等学

校。首狩(くびか)りの人数が足りていません」
「首狩りですか」
「そこで十神の出番。学園は首狩り部隊をこちらに委託(いたく)した形になりますね。軍事代執行者ってわけです」

「べつに十神財閥がでしゃばらなくてもいいのでは？　ニセモノは学内の者なんですし、これは希望ヶ峰学園だけの問題ですよ」
「ふふふ。それですめば御の字です。でも、すまされないかもしれません」Ａ54はなぜかうれしそうな声を上げました。「ニセモノだろうと、『世界を混乱に陥れた十神財閥の御曹司である十神白夜』というレアアイテムを手に入れたら、どのように利用されるかわかったものじゃない。あとで本物だとこっちが主張して、のちに誤解がとけたと

しても、しばらくは価値がある」
「そんなものですか……」
「十神白夜は神様なのでしょう？」
「私の心に侵入しないでください」
「十神としては、たとえニセモノだろうと、神様を取られるわけにはいきません。白夜隊長のニセモノが、テロリストの宣伝材料になったり、米国特殊なんちゃら部隊につかまるのを阻止する必要があります。学園の思惑に乗るしかないんですよ。みんな十神に処理させて、最後に話し合いで解決しましょうって腹なんですよあの学園は。そして十神は実際に白夜隊長の危機なので拒否できない。僕たちは体よく利用されちゃったわけです」

利用されたのは希望ヶ峰学園ではないでしょうか。
だってニセモノの正体は。
ぶくぶく肥えた肉の中には、あの子が……。
十神財閥だって、それには気づいているはずです。あの子は公式には死者であり、また『次期当主決定戦』に脱落した以上、こちらとはなんの関係もありません。しかし世間はそれで納得しないでしょうし、何より今のあの子は危険すぎます。
十神財閥はあの子を抹殺したい。
件の存在を知っているあの子を、生かしてはおけない。
こうした真意を隠しつつ、希望ヶ峰学園に恩を売ったかたちで、自分たちが好き勝手やれるような展開を作った。こう考えることだってできるのです。
「報告はこれくらいですね。学園から首狩りを委託された十神は、ぺ

ニーワースさんをかつぎ出して、『針の隊』の一部をひそかに出動させました。任務に成功すれば財閥の手柄。失敗すれば元執事の暴走。完璧ってやつですよ」

「A54よ、『絶望小説』はどうなっている？」

そういえば兄さん……じゃありませんね。他人なので大槻と呼ぶのです……大槻は、『絶望小説』を作ったのは希望ヶ峰学園だと云っていたような気がしましたが、あの言葉はなんだったのでしょう。

「報告は入ってきてません」

「ニセモノが云っていた『かわいそうな牛』については？」

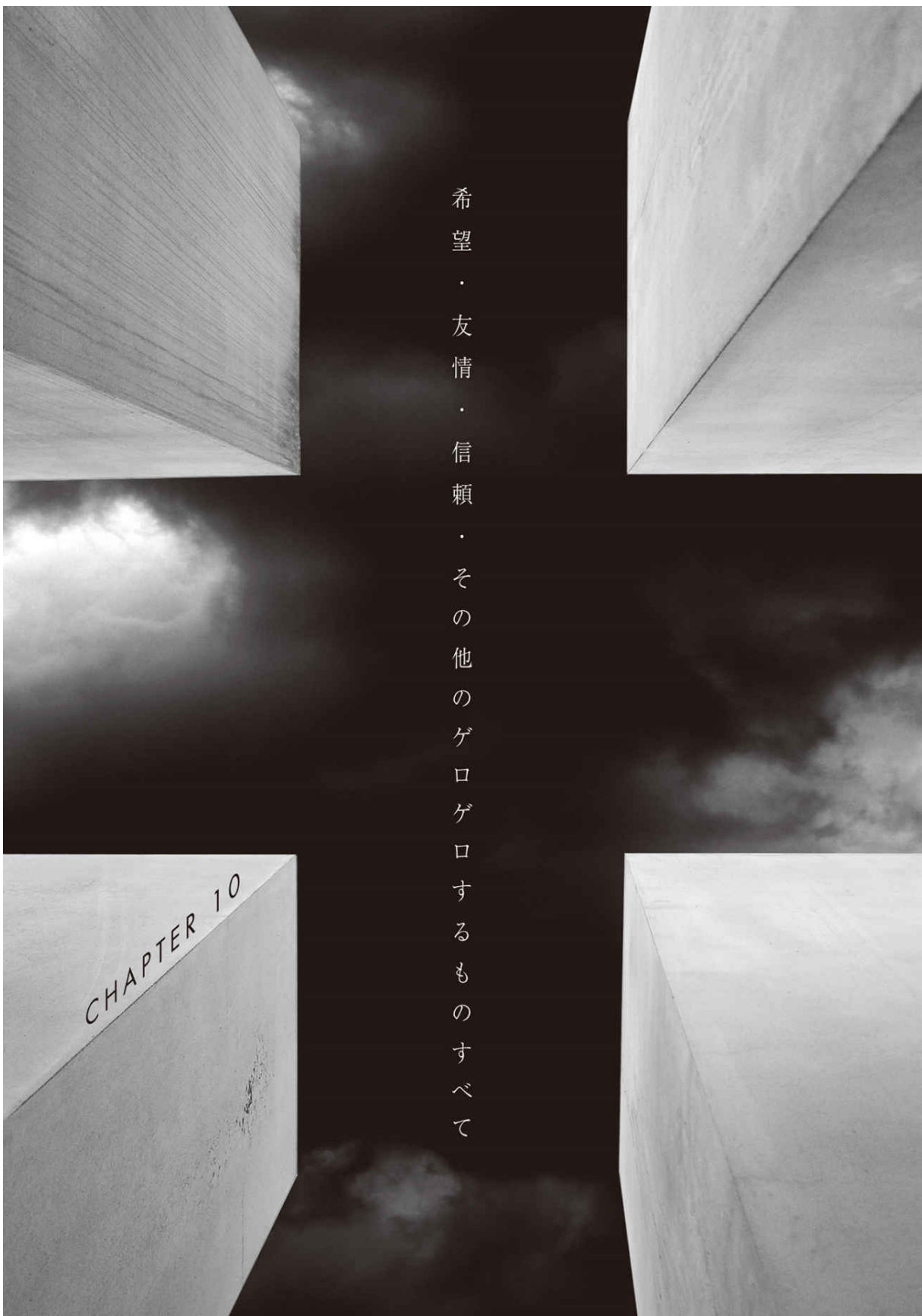
「一応、しらべてはいますが、今となっては意味があったのかどうか」

「わかった。もういい」
「それが何か？」
「瑣事だ。気にするな」
「瑣事といえば、もう一つ報告がありました。江ノ島盾子が……」
「そんな存在もいたな。江ノ島がどうした」
「白夜隊長に連絡をとりたがっています」

希望ヶ峰学園の体育倉庫でがんばってくれている江ノ島さんが連絡したがっている？　日本で新展開があったのでしょうか。それから、空港に向かうと云って姿を消した腐川さんはどこにいるのでしょうか。私としてはチェコにきてほしくないのですが……。

「地下道をピクニックとは余裕ですわね、十神財閥」
通路の奥から声。
そこには、ゴシック人形のように着飾った少女が、透き通るほど白い顔に、にこやかな笑みを浮かべて立っていました。
隣には……。
「デュフフフフフフフフwww　拙者(せっしゃ)www　爆誕でござるwwwwwww」

希望・友情・信頼・その他のゲロゲロするものすべて
CHAPTER 10

1

ボルヘス＝検索結果

＃７７１５９１３５

項目　施設

タイトル『修道院』

カトリックが一定の戒律において修道生活をするための施設。

男子修道院と女子修道院の二種類があり、修道士（モンク）、修道女（シスター）、いずれにせよ、世俗（せぞく）と縁を断ち、三誓願（さんせいがん）を中心とした人生をすごすため、信者のみの共同体で暮らしている。

なお三誓願とは、清貧（せいひん）（私有財産を放棄すること）、従順（神につき従うこと）、貞潔（ていけつ）（生涯独身ですごすこと）となり、

のみ従うこと）　貞潔（生涯独身ですごすこと）としており　坂口安吾は『ヨーロッパ的性格　ニッポン的性格』において、『貧乏、童貞、服従という三つの徳目をモットーといたしまして、人間個人の一切の私利とか私慾（しよく）とかいうものを捨離（しゃり）して、神に仕えるという宗教であります』と評している。

プルゼニ北部にある小さな村。その修道院の一室で、私たちは簡素な木製のテーブルをかこんでいました。テーブルのほかにはさらに簡素なベッドと、石壁にかけられた十字架があるだけ。あとは何もありません。窓すらも。

三誓願を具現化したような野暮（やぼ）ったい修道服に身を包んでいると、キリスト教徒でもないのに敬虔（けいけん）な心地になりました。なるほど制服というものには、思考を均一化させる効能があるようです。

もちろん白夜様も修道服を着ています。
「女装には慣れているので恥ずかしくはない」
どうしてこんなことになったのかと云いますと……。

2

「ごきげんよう十神君。依然として小癪なほどの無敵ヅラを浮かべているようで、わたくしとしてもうれしいかぎりですわ」
紅玉色の瞳がこちらに向けられました。
暗い地下道には似合わないその人物は、白夜様のクラスメイト。
セレスティア・ルーデンベルク。
『超高校級のギャンブラー』。

栃木県宇都宮市出身。
「ゴスロリ博打女がなぜここにいる。どういうことか説明しろ」
「危険をおかしてまでクラスメイトを助けに駆けつけたというのに、すげない応対ですわね。わたくし十神君のことが心配で、大好物の餃子も咽喉を通らな……」
「お前は他人を、カードの手札くらいにしか思っていないだろうが」
「あなたといっしょですわね」
「俺と同一線上で語るな」
「うふふ。本当にお元気そうで」
セレスさんは口もとだけで微笑を浮かべると、「面倒な説明は、腐れラードのお仕事ですわ」と云って、隣に立つ巨漢に手のひらを向けました。
「デュフフwww　セレス殿から罵倒と任務をダブルでいただきまし

た。我々の業界ではご褒美ですぞ！」

脂汗を垂らしながら歓喜に打ち震える腐れラードもまた、白夜様のクラスメイト。

山田一二三（やまだひふみ）。

『超高校級の同人作家』。

長年にわたる炭水化物過剰摂取の結果、肥えに肥えたお腹を揺らしながら、山田さんは早口で説明をはじめました。

「セレス殿のご褒美に、僕の胸はドキドキ夢冒険。ウブな我輩（わがはい）ったら、興奮のあまりもう少しで複乳（ふくにゅう）になるところでした。デュフフ。複乳を搾乳（さくにゅう）でボクちゃん断乳（だんにゅう）www　ラップ乙wwwwww　ところでまじめな話、ホモ牛乳という言葉を聞いて、みなさん何を想像しますか？」

説明を早く……。

「えい」

「くぎゅううう☆」

セレスさんが笑顔のまま山田さんの足を踏みつけると、今度こそ説明がはじまります。

「じつはですな、僕たちが十神白夜殿を助けに馳せ参じたというのは、あながち嘘でもございません。絶対だれにも見つからない場所をセレス殿が用意しまして、そこを使ってはどうかという提案なのであります」

「というわけですの」

セレスさんが優雅にうなずくと、頭の両脇にある巨大な縦ロールが

揺れました。
「お前たちのほどこしを受けるほど、俺は落ちぶれてはいない。帰れ」
「ええとその、白夜隊長」Ａ54が小さく挙手しました。「僕としても提案を呑んでほしいのですが。というのも、じつはこの生徒さんたちと協力関係を結びまして」
「協力関係だと？」
「絶対安全圏の確保に失敗しました」
「使えんやつだ。『針の隊』を創設したのはだれだ」
「白夜隊長です」
「お前はチェコまで遊びにきたのか」
「そりゃ十神が所有するすべての軍隊を持ってこられたら、こんなこ

とにはなりませんよ。動けるのは『針の隊』の一部だけですし、白夜隊長の救出に人員の大半を割いているため、カツカツなんです」
「フン。弁解は罪悪と知るがいい」
「ぬはっ。ゼロ卿（きょう）に萌えキュン！」
なぜか山田さんが悶絶（もんぜつ）しました。
「そんなときに、学園の生徒さんたちと会いましてね。僕としては同行してほしいのですが」
「そうですぞ十神白夜殿！　このビッグウェーブ、乗るしかないっしょ！」
「質問に答えろ」白夜様は山田さんを無視して、セレスさんを一瞥しました。「お前たちは希望ヶ峰学園の意思として、ここにいるのか」
「わたくし、そこまでお人好しではありませんわ。というより、あの学園こそそれほどの[illegible]力があると思いまして？　自復ですって

学園にはそれほどの財源があると思いまして、　自腹ですね」
「僕とセレス殿は、飛行機を個人チャーターして、チェコくんだりまで飛んできたのですぞ。あまりに高額だったので、目玉と下っ腹が飛び出ましたなあ」
「ええまったく。飛行機を借りたせいで、わたくしたち、とんでもない額の出費がありましたの。ギャンブルで荒稼ぎしたお金の多くを、チャーター代に使ってしまいましたわ。ですから十神君にノーと云われたところで、ノコノコと帰国できません」
「愚民どもめ……」
「この件が解決したら報酬を支払う。それを約束してくださるのなら、わたくしは十神君のお手伝いをいたしますわ」
「『すべての始まりにして終わりなる者』、不肖、山田一二三も、末席を汚させていただきますぞ。ＣＯＯＬにやろうぜ生意気ハイティー

ンｗｗｗ」

しばしの沈黙のあと、白夜様は静かに口を開きます。

「さっさと俺を案内しろ」

3

で、現在に至るというわけです。

シスターの小部屋にいるのは、私と白夜様とセレスさんの三人。どうしてセレスさんがこのような施設を持っているかを聞いてみると、

「修道院を管理運営するのも、わたくしの夢のためですわ」と一言。

どのような夢を抱いているのか知りませんが、確実に悪趣味なもので

しょう。
「男子禁制の修道院に十神君が隠れているとは、だれも思わないはずでしょう。我ながら名案ですわ」
セレスさんも修道服を着ていましたが、貞淑(ていしゅく)なベールに縦ロールの髪型がおさまるわけもなく、暴力的にズビョンと飛び出ています。
「フン。世界征服を執(と)り行う執務室としては背徳(はいとく)的だが、悪くはないな」
シスター姿の白夜様が上機嫌なので、もう少しはっきり云えばノリノリなので、私は不安になりました。もしかしてポラリスも変装ではなく、ただの趣味だったのでは。他人の嗜好に口をはさむ気はありませんが、それでも一言ゆるされるのならば、十神財閥の未来は暗い……。
「う何、なぜこのような目で俺を見る」

「お前　なぜそのような目で俺を見る」
「もうしわけありません。でも、あの」
「俺の許可なく云いよどむな」
「ご機嫌だなと思いまして」
「当たり前だ」
「え。やっぱり女装が……」
「なんの話だ？　これから俺の世界征服がはじまるんだぞ」
「よかった。そっちでしたか」
「世界征服とおっしゃって？」セレスさんが不思議そうな顔つきになります。「十神君はいつから、そのような夢を持つようになったのですか」
「誤解するな。俺にとって世界征服など、チキンスープを作るよりも容易（たやす）いことだ。夢などという大仰なものではない」

ザザザ。
ザザザザー。
ベールの下に隠したインカムが、通信を告げました。
「こ…ち………A54。こちらA54。聞こえますかどーぞ」
「聞こえています」私は答えました。「どうぞ」

「シスターの花園はいかがです？」
「白夜様はお気に召したようです」
「剣呑剣呑。僕にその趣味は……」
「十神白夜殿の女装姿キターーー！」
山田さんの絶叫が、インカムを通して聞こえました。
この距離でも鬱陶しいですね。
「デュフフwwwwww　キャラがブレましたなあ。二次創作あるあ

るですなぁ。僕は原作準拠（じゅんきょ）をポリシーとした同人描きなので関心しませんがね。関心しませんが、どうしてもと云うのでしたら、写メを送ってくださってもかまいませんぞ」
「ゴスロリ賭博女、なぜあいつを同行させた。仲良しか？」
「山田君が勝手についてきただけですわ」
「セレス殿あるところに拙者あり。愛する者よ、死に候（そうら）え」
「話を進めますね」Ａ54が割りこみました。「僕たちでバックアップします。ただ、人員は期待なさらぬよう」
「お前の仕事は、その肉団子をだまらせることだ。以上」

　通信を終える寸前、「アデューーーーーーーwwww」という山田さんの絶好調な声が響きました。この短い通信だけで、五百キロカ

ロリーくらい消費したような気分です。
白夜様は小さく息を吐くと、何ごともなかったように顔を上げました。
「さてと」
「ではこれから世界征服をはじめる」
「どのように？」セレスさんは当然の質問。「人類の歴史がはじまってから、まだだれもそれを成した者はおりません。それに聞けば十神君の所有兵力は、ごく少数の私設部隊だけではありませんか。これで世界征服なんて、夢のまた夢ですわ」
「云ってくれる」
「そもそも十神君には大義があるのですか？　理由もなく世界こちょ

っかいをかければ、侵略と見なされますわ。まさか今どき、『悪の皇帝』にでもなるおつもりで？」

大義なき革命はテロにすぎない。
白夜様自身も云っていました。
でもそれは、それだけは、心配ありません。
なぜなら。
「俺は十神白夜。それが大義であり正義だ」白夜様は堂々と宣言しました。「俺を雇えるのは唯一、俺だけ。俺を動かせるのも唯一、俺だけ。真理はシンプルなほどいい」
「自分のランクを自分で管理するのは楽そうですわね」セレスさんは皮肉ではなく、本心といった感じの口調でした。「では、かんじんの手法を教えていただけますか。武力も財力もない高校生が、どうやっ

て世界をその手につかむのかを」
「ようは定義の問題だ。『十神白夜はたしかに世界征服したな。それはだれにも否定できないな』と、世界中の人間が思えば、それは世界征服と同じ意味を持つ」
「言葉遊びのようにも聞こえますが……。権力を取って世界を変えることが世界征服ではなくて？」
「それは二〇世紀の革命だ。古びた梨（なし）のような発想だ」
「でも権力を取らずに世界を変えるなんて、やはり言葉遊びですわ」
「日本で革命を成功させた唯一の人物はだれだ？」
「もちろん徳川家康ですわ。日光見ずして結構と云うなかれ」

「やつは太平の世を終わらせただけだ。革命を成したとは云えん」
白夜様はつづいて私に視線を向けてきたので、「え、ええと坂本龍馬?」と答えるしかありませんでした。
「フン。生きていれば三菱財閥の初代総帥になっただけの男だろうが」
「白夜様はほかの財閥に厳しすぎます」
「俺に意見するな。さっさと答えろ」
「大久保利通?」
「違う。ただのヒゲだ」
「幸徳秋水?」
「違う。無意味な死だ」
「足利尊氏?」

「違う。やや惜しいが」
「わかったゲバラですね！」
「なんでそうなった」
「顔は似てますよ」
「その前にゲバラは日本人ではない」白夜様は目尻を震わせます。
「北条泰時だ」
しかし私とセレスさんの反応は、おたがいの顔を見合わせるだけ。
聞いたことがあるような。でも義時とか時宗とか似たような名前が多くて確信は持てません。
「北条政子なら知っていますけど……」
「それは泰時の伯母（おば）だ。知らんのか北条泰時。北条氏三代目執権（しっけん）。十神と縁の深い『吾妻鏡（あずまかがみ）』にも登場している」

「白夜様、ではどうして私たちはそのことに聞き覚えがないのでしょうか。家康以上の革命をやったのであれば、歴史の授業でもっとたくさん習うはずです」

「それは泰時の革命が華麗(かれい)だったからだ。華麗すぎて革命がおこなわれたことに、だれも気づかなかった」

そんなことってあるでしょうか。

私の知っている革命は、いつだって血がつきものでしたが。

「承久(じょうきゅう)の乱。日本ではじめて朝廷を軍事的に制圧した事件」白夜様は眼鏡を押し上げます。「京都を攻撃し、後鳥羽上皇を島流しにして、幕府(ばくふ)の統治(とうち)範囲を拡大させ、『御成敗式目(ごせいばいしきもく)』という自分勝手な法律を公布して立法権を奪った。これ以上のテロリストが、これ以上の反逆者がいるだろうか。今なら……いや当時でも、『日本史上最大最悪の事件』と呼ばれてしかるべきものだ。しかし『御成敗式目』は、

悪の事件』と呼ばれてしかるべきものだ。しかも『御成敗式目』は
その後も武士の基本理念として残るばかりか、大日本帝国憲法が公布されるまで、民法として生きていた。天皇の裁下もなしに作られた法律が、明治維新以降も効力を持っていたわけだ。これを革命と云わずになんと表現する？」

「白夜君はそれをやるおつもりで？」

しばらく聞き役に回っていたセレスさんが口を開きました。

「言葉遊びの実例を挙げたまでだ。泰時のモットーは、『欲心を失え給わば天下自ら令せずして治めるべし』というもので、そういう意味では革命からはほど遠い。だが、説得力はあっただろう？」白夜様は不敵に笑いました。「俺がこれからやるのは、お前の好きなギャンブルだよ」

「ギャンブル？」

「『超高校級のギャンブラー』に云うまでもないことだが、ギャンブルで勝つには、いい手を作ることだけが道筋ではない。ギャンブルは騙しの世界だ。つまり……」
「『相手に負けたと思わせたら、自然と勝利がやってくる』ということですわね」
「たとえ自分の手札がブタだとしても、すばらしい手であると錯覚させることができれば、相手は勝負を降りてくれる。勝利とは、革命とは、征服とは、そういうことでいい。今ここにある景色をガラリと変えてやるだけでいい」
「ご高説(こうせつ)はけっこうですわ。では十神君はどのようにして、世界の見方を変えるのです？」

「『絶望小説』だ」
白夜様は『絶望小説』にお熱です。
たしかにそれはあらゆる言葉に訳されて世界中に拡大し、原因不明の暴動を引き起こす『絶望病』を蔓延させつつあります。脅威なのは事実です。しかし私にはどうしても、本筋と関係ないようにしか思えません。自分の乗った飛行機が墜落しそうなときに、エボラウイルスの心配をするようなものではないでしょうか。
「『絶望小説』を作ったのは希望ヶ峰学園だと、大槻涼彦が云っていた。情報としても信憑性としても不確定だが、もし真実なら、これは俺にとってプラスとなる」
白夜様は用意されたノート型の衛星電話を開くと、すばやい動作で操作しだした。

操作しました

「はいは～い。今日も今日とてキラララ～ン☆★☆★」

画面にギャルが映ります。

『超高校級のギャル』。

希望ヶ峰学園内で捜査をつづけてくれている、江ノ島さんです。

チェコの時刻は午前四時ちょうど。日本時間は午前十一時ちょうど。江ノ島さんはメイクばっちりで、髪もふわふわ。そして妙に元気です。

「オールしたせいでテンション高くなっちゃったんだけど！　あとお腹すいてるんだけど！　だれかポッキー買ってきてくんない？　アタシの第二次性徴は天井知らずなんだからさ！」

「江ノ島、お前に任務をあたえる。『絶望小説』についてしらべろ」

「なんかスケールでかくなってない？」

「なんかスクールでなくなってない？」

「希望ヶ峰学園が、『絶望小説』を作った可能性がある」

「何それ。ウチのガッコ、悪の権化じゃん。事件の黒幕じゃん。意外な犯人じゃん」

「その通りだ」

「でもアタシ、ただの人類最強のギャルだから、そういうハードなのはチョット……」

「学園に探偵がいるだろ」

「ひゅー。さすが十神」江ノ島さんの口笛が響きました。「そのことで、アンタに連絡しようと思ってたのよ。あやしくね？　日曜の昼間だってのにデートもしないで学校きて」

「あいつが絶望に直[illegible]と言っているのなら、それは考えにくい。ご

おいて絶望に堕ちたと云っているのだろう。それは考えにくいたがこちらの思い通りに動くとも思えん。それとなく『絶望小説』の情報を流して利用しろ」
「ラジャなのじゃー。ほかには？」
「以上だ」
白夜様は返事も聞かずに通話を切ると、今度はＡ54に通信を入れました。
「はいこちらＡ54」
「『針の隊』に名誉挽回のチャンスをあたえる。『絶望小説』の被害状況をしらべて報告しろ。さらに傾向を把握し、今後の展開も予測しろ。簡単なものでいい」
「了解（ラジャ）」
通信終了。

「ではこれから、俺が直々に世界征服をしよう」
白夜様は衛星電話を世界につなぎました。

4

ボルヘス＝履歴参照
＃１１９７７０９２
タイトル『真・世界征服宣言』
おはよう（ドブレーラーノ）。
『世界征服宣言』から十二時間が経過した。愚図（ぐず）で無能なお前たちのために説明するが、このままではあと十二時間でリミットがき

て、俺の世界征服は完了となる。にもかかわらず、お前たちの成果はゼロときた。これまでに多くの暗殺者が俺を殺しにきたが、すべて返り討ちにしている。『超高校級の御曹司』を打倒できないことは、無根拠な希望を持つお前たちにもわかったはずだ。

さて、残り十二時間を切ったところで、俺がどのような世界を構築するのかを教えてやろう。

『絶望小説』があるだろ？

あれは俺が作ったものだ。

この世でもっともおそろしいもの。それは言葉。

ひとは言葉で生きることもあれば、言葉で死ぬこともある。

『絶望小説』は[illegible]

『絶望小説』はまさにそれを具現したものだ

今から十二時間後、『絶望小説』を地球全土にばらまく。

読まなければ死ぬことはないとタカをくくっているやつもいるだろうが、それは違うぞ。お前が読まなくとも、だれかが読む。

現実に不満を抱く人間は必ず読む。

現状をみとめない人間は必ず読む。

読書とは、そういうものだろう？

人生がつらいとき、くるしいとき、うまくいかないとき、そんなときにひとは本を読む。現実逃避の手段として、元気をもらうサプリメントとして、決断を後押しする一手として本を読む。

むろんこの世には、本など読まなくても生きていける人間はごまんといるが、そうでない人間もまたごまんといるのだ。飯を食うように水を飲むように本を読む人間がごまんといるのだ。

希望。絶望。恐怖。崇高。好奇。

ひとの内部からそれが消えないかぎり、本が消えることはない。

俺は『絶望小説』に、それをこめた。希望と絶望と恐怖と崇高と好奇をこめた。だから読めよ。興奮するぞ。満足するぞ。

ひまと欲求不満と鬱屈と解放をぼんやり夢見るお前たちは、十二時間後にばらまかれる『絶望小説』をどうせ読むだろう。読んでしまうだろう。恥ずかしがることはない。それが世界の選択だ。お前たちに自由意志など存在しない。

以上だ。お前たちは最後の理性をフル活用して、俺を倒すという不安と恍惚の中で充実するがいい。

だがな、俺に支配されるのも幸福だぞ？

約束しよう。

十神の名にかけて。

5

「もしもし俺だ……何？　デモが勃発（ぼっぱつ）している？　それがなんだ。俺たちは今、世界征服をしているんだぞ。当たり前のことをいちいち報告してくるな」
「……あ？　出版社だと？　ふざけているのか……。お前が世界中の出版社に弁明して回りたいのならそうしろ」
「腐川？　いそがしいときに……いや待て。本当に見つけたのか。時差があったところでチェコには入国していないはずだが……よし、スタンガンを用意しておけ。そうだスタンガンだ。なければハンマーで

もがまわん」
「どういうことだ説明しろ……あ？　お前は学園で捜査をしていればいい……それでかまわん。探偵から連絡があれば対応しろ」
「俺だ……なんだと、だまれ……いいからだまれ。だまれと云っているんだ。……俺の女装？　下着の色？　豚は死ね」
「おいA54、連絡が遅いぞ。どうなって……フン。これだから愚民は。俺はがまんの限界にきているんだ」
「もしもし……ああそうだ。豚は殺してもかまわん……処理？　モルダウ川にでも流しておけ。プラハの景観を損ねぬよう、コンクリ詰めにして浮上させるな」
「どうした江ノ島、何かわかったのか……ポッキーだと？　ふざけて

いるのか。あとで江崎クリコこと買い取ってやる。そうだ、キャッチコピーは『おいしさと健康』だ」
「防衛ミサイル？　おせっかいな正義の大国め。だが連中とて、宇宙戦争(スターウォーズ)をやるつもりはないだろう。それにどうせ、遅かれ早かれ起こる話だ」
「もしもし……十神財閥がそう云っているというのか。まるでゴミのようではないか……。聞く耳を持つな。やつらにはこれまで通り、絶望ハイスクールがやっているように見せておけばいい」
「では、『絶望小説』はそのように広がっているというのだな。しかしなぜ……翻訳の問題もあるだろうに……まあいい。次の宣言はそうしよう」
「もしもし俺だ……あ？　予備学科だと。才能のない連中というのは、世界のじゃまばかりする。消せ。そうだ消せ。この世から消滅さ

せろ。天然痘ウイルスのように」

6

電光石火。とでもいうのでしょうか。

白夜様は次々に連絡して、あちこちに命令しています。まるで有能な官僚のように。

それにしても。

「なんたるクソ度胸」セレスさんが私の思っていたことを云いました。「『絶望小説』を自分が作ったものにするだなんて、ブラフもいいところですわ。仕組みもシステムも知らないくせに」

「フン。今から知ればいいことだ」

「ですが『絶望小説』は、ほとんど解明されていないのですよ」
「俺たちは、あれが希望ヶ峰学園から出てきたということを知っている。出所がわかっているなら、解明もまた容易だ」
たしかに出所が判明しているのですから、ピンポイントに突けば何かは出てくるでしょう。生徒に聞いてみたり、教師を問いつめてみたり、新聞部などに当たることで、解決の糸口を見つけられるかもしれないというのは、希望的観測ではありません。しかも学園内には協力者がいます。江ノ島さんはともかく、その『探偵』という生徒が、『絶望小説』にかんする情報を持ってくる可能性は高そうでした。
本当に『絶望小説』のシステムを把握できたら？
本当に世界を征服できてしまう。

地球が誕生して四十六億年。
だれも成しえなかった世界征服が、ついに実現できてしまうのです。
それを成すのは白夜様で、『白夜行』に記録するのは……私。
ひそかに盛り上がる私をよそに、セレスさんはてきぱきと仕事をこなす白夜様を冷静に観察していました。
「十神君は、仲間を信じていらっしゃるのですね」
「仲間だと？」
「わたくしはてっきり、十神君が一人で世界征服をするものだと思っていましたわ。なのに、みなさんに手伝ってもらって。みなさんに手助けしてもらって。それはつまりみなさんを、仲間を信じているということですわ」

「……どうも誤解しているようだな。俺はただ、自分の手を、自分の足を、自分のために動かしているだけだ。お前は自分の手足を動かすときに、いちいち信じてやる必要があるのか？」
「うふふ」
「話は終わりだ。世界征服のじゃまをしないでもらおう」
白夜様は仕事に戻ります。
セレスさんはベールから飛び出た縦ロールをしばらくいじっていましたが、やがて私に向き直りました。
「少し歩きません？」
不意の展開。
困惑しつつ白夜様をちらりと見ましたが……ええ、わかっています。もちろんですよね。無視なのはわかっていましたよ。

私たちは部屋を出ました。
不思議と長く感じる修道院の廊下は薄暗く、デザインも古風というか、アンモナイトのように進化がないので、歩いていると時間はおろか時代すらわからなくなります。しかも修道服を着ていることも相まって、私自身が何者なのかもあいまいになります。突発的なアイデンティティの不在に、脳がぐらつきました。
「『青インク』さん。あなた、十神君のお姉さんなのですよね？」
前を歩くセレスさんが確認してきますが、私の脳はまだ不安定で、巨大な縦ロールを催眠術の小道具みたいに感じながら、「一応は」とだけ答えました。
「幼少の砌（みぎり）から、ああなのですか？」

「どういうことです」
「十神君の性格に決まっているではありませんか。自分勝手。独善思考。傲岸不遜(ごうがんふそん)。唯我独尊(ゆいがどくそん)」
　セレスさんも似たようなものでしょうに。という本音を隠して、私は十神財閥の過酷なサバイバルの上っ面を説明しました。
「まさか同情しろというのではありませんよね」
「同情ですまされる性格破綻ではないことは承知しています」私は素直に云いました。「私もいろいろがんばってはみたのですが、修正は不可能でした」
「そこには同情しますわ」
「ただ身内としては、できるだけかばってやりたいし、かまってやりたいいんです。……いい子なんですよ」

白夜様は私を救ってくれました。
希望も絶望もない私に、光と闇をあたえてくれました。
死と死と死が咲き乱れる十鴉城の中で、白夜様は才能をフル回転させて謎にいどみ、私は血ヘドを吐きながら『白夜行』を書き……あれ？　そうでしたっけ？　白夜様が正体をあきらかにしたのは、事件が終わったあとですから、私がこのときに『白夜行』を書いているはずがないのですが。なんでしょう。頭痛がします。バファリン飲みたい。
「……根は悪い子じゃありません」私は現実にしがみつくように、セレスさんとの会話をつづけます。「きっと、大変な過去をお持ちなのでしょう。そのせいで歪んでしまったのでしょう。ただ、私と出会う以前の白夜様が、どのような暮らしをしていたのかはほとんど聞かされていませんけど」

「ガードが固いですわね」

「まったくです。いつか『白夜行』に書かなければならないのに」

「『白夜行』ですって？　タイトルをパクったら講談社に訴えられますわよ」

「パクってないですから！　あと『白夜行』は集英社ですから！」

「やはりパクっているではありませんか」セレスさんは小さく笑いました。「なんにしても、身内も十神君を持て余しているようで」

「まあ、正直」

「じゃあやめちゃえば？」

「はい？」

「家族に文句を云っちゃだめだめー」

「あ、あの」

「慣れないしゃべり方のせいで、顎（あご）がアゴアゴするよう」
「あの、いったい……」
「どうやら賭けは、わたくしの勝ちのようですわね。なのだよ！」
セレスさんは頭に手をのばして、すべてを剝ぎ取りました。
修道服も縦ロールもさらには皮膚も剝ぎ取られ、セレスさんだったものが、セレスさんを形作っていたものが、次々と床に捨てられます。セレス・ルーデンベルクを構成するあらゆる要素が捨てられます。
現れたのは、一人の少女。
絶望ハイスクールの制服を身にまとった少女。
嘘。

足がすくんで、動けません。
いっぽうの少女は華麗にターンを決めこみ、こちらに向き直りました。
まだ幼さの残るあどけない笑顔が、私に向けられます。
「にゃにゃにゃにゃ〜〜ん！　お待たせしました。『絶望高校級のブラコン』こと、鏡佐奈ちゃんの登場だよ！」

7

ボルヘス＝検索結果
項目　人物
タイトル『鏡佐奈』

UNKNOWN
UNKNOWN
UNKNOWN

出てこない。何も。何も。情報が出てこない何も。どこをひっくり返しても何も出てこない。ひっくり返したのに出てこない何も情報が。砂粒ほどのヒントだけで答えを見つけるボルヘスが何も。
「まーまーお姉ちゃん、落ちついてください。心と国語が乱れておりますぞ。深呼吸しましょか。ひっひっふー。ひっひっふー」
　鏡佐奈と名乗った少女のラマーズ法を聞くともなく聞きながら、私の混乱はピークに達しました。判断。反応。その種の行動ができません。急にトラックが突っこんできたときみたいに、今すぐ対処しなけ

ればならないのは頭ではわかっているのですが、でも動けないのです。
「お姉ちゃんはあれかな。びっくりしちゃったかな。そりゃそうだよね。だって私、びっくりさせるつもりだったし。そういうわけで大成功！　奥様ここでもう一品！　ここで道民大爆笑！」
ザザザ。
ザザザー。
唐突に通信が入ります。
「呼ばれて飛び出てザンジバー！　って、コラーッ！　今すぐ本のページを閉じるのですぞスネークｗｗｗ」
山田さんの声が三半規管をかき乱しても、私は動けません。
「デュフフ。ノーリアクションということは、僕という存在を受け入

れたと判断してよろしいのですかな。もしそうなら逆に引きますが、うれしいことに変わりはありませんぞ。モルダウ川から奇跡のイリュージョンを果たした甲斐（かい）がありましたぞ。もう少しで、北海だか黒海だかに流れつくところでしたから」

「…………」

「ちょｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ　受け入れたあとで無視とかありえないｗｗｗｗｗｗｗ」

「…………」

「あの、本当にどうされたのですかな。ドクターですかな。スランプですかな」

「……Ａ54は、い、いますか」

「お呼びで」
すぐ近くで声。
佐奈ちゃんの背後には、たしかにA54が立っていました。
「僕もおりますぞ」
巨体を揺らしてやってきたのは山田さん。
あ。
私の中で何かが潰えました。
そうか。
そういうこと。
最初から全部。
「気づいたようですな」山田さんには似合わないタイプの笑みが、贅肉まみれの顔面を支配しました。「そうですワタシが変なオジサンです！　あ……もうこれやらなくてもいいのか。ちょっと楽しかった

な」

そう云った次の瞬間には、山田さんではなくニセモノの白夜様の姿になっていました。

私はおどろいたりしませんでした。

反応するには疲れすぎていました。

そういうこと。

最初から全部。

なんだかちょっと、眠たくなってきたようにも感じます。ここでいきなり寝てしまったら、このひとたちはどんな反応をするだろうかと、三秒間だけ考えました。

「おい貴様、いつまでその姿でいるつもりだ」
ニセモノが白夜様の声で云うと、Ａ54の体がぶるるると震えました。
やがて震えは全身に広まり、水の分量を間違えたゼリーのように自重に負けて潰れます。どろどろに溶けたＡ54の残骸から這い出てきたのは、とても小さな少女でした。

少女はゆっくりと立ち上がると、膝のほこりを払い、ようやくといった感じで顔を上げ、やらされているようなポーズをとりました。
「……じゃーん。『絶望高校級の二重人格』こと、鏡那緒美です」

ボルヘス=検索結果
項目　人物

タイトル『鏡那緒美』
UNKNOWN
UNKNOWN
UNKNOWN

わかっていたからおどろきません。
念のためです。ただそれだけ。
いろいろあきらめた私を、絶望ハイスクールの三人は無言で見てい
ました。死にかけの猫が道に落ちていたら、ちょうどこんな顔つきで
見下ろしていることでしょう。

「おいどうした『青インク』。何か云ったらどうなんだ」

「あなたは十神和夜ね」

「ハキハキと答えてやるほど、俺は優しくない」

「そうね。和夜は優しくなかった……」

「怖かったか？　男の嫉妬と純情は、ときに女のそれよりおそろしいものだ」

「自己肯定のつもりなら吐き気がする」

「見ててやるから、ここで吐くといい」

「あなたどうして、絶望ハイスクールなんてものを作ったの？」

「それには答えてやることができんのだ……いや、すでに答えていると云ったほうが正確かもしれんが。なあ？」

ニセモノが丸っこい顔を佐奈ちゃんに向けると、「真相は最初から

読者の前に提示されているのです」と、まるで推理小説の序文みたいなことを云いました。

「あのねお姉ちゃん、私たち絶望ハイスクールは、ひとを騙すし殺しもするけど、嘘は吐かないよ」佐奈ちゃんは言葉をつづけます。「フェアにやってるのれすー」

「騙しと殺しをみとめている時点で、フェアじゃない」

「うーんまぁ、方向性の違いじゃないかな。叙述（じょじゅつ）トリックなんて私からしてみれば官僚作文と同レベルだけど、それをありがたがって読むひともいるわけだし」

「意味がわからない」

「そ。これが方向性の違いというやつですにゃ」

「件がほしいんでしょう？」私は本質に切りこみます。「『絶望小説』もそのために作ったの？」
「やれやれ。本物サンのために情報収集かい。健気なものだな。涙がこぼれそうだよ。『絶望小説』を作ったのは希望ヶ峰学園だ。貴様らはその情報をすでにつかんでいるはずだが」
「悪用したのはあなたたちでしょう」
「その論法が通るなら、『絶望小説』を読むほうが悪いのではないか。煙草屋を糾弾するより、まずはきっちり禁煙してみせろ」ニセモノは顔に埋れた眼鏡を押し上げました。「読書も煙草も、病みつき(アディクト)するものだ。欲求不満が消えぬかぎり、ひとは中毒から逃れることはできない」
「でわでわ、お部屋に戻りましょーか」

佐奈ちゃんは隙のない足移動でこちらに迫り、私の肩に手を置きます。
「お……お部屋って」
「もちろん、変態女装シスターがいるお部屋ですにゃん。おっと逃げてもむだですよ。この修道院は、絶望ハイスクールが用意したことをお忘れなく」
こうして私は連行され、道を戻ることになりました。
長く感じた修道院の廊下が、こんどはやけに短く感じます。私はせいいっぱいの抵抗として歩く速度を落としているのですが、絶望ハイスクールの三人からは注意がありません。好きにやらせておけとでも思っているのでしょう。
ささやかな牛歩戦術もむなしく、とうとう部屋の前に到着しました。

白夜様。
白夜様逃げて。
私の苦痛を見てサディスティックに喜ぶニセモノは、口の端から隠しきれない笑みをこぼしつつ、部屋のドアを開けました。
からっぽ。
「おろ?」佐奈ちゃんが高い声を発します。「中にだれもいませんよ」
そこは私が出る直前と変化がありませんでした。同じ場所にベッドとテーブルがあり、壁にかかった十字架も同じ角度で、テーブルに置かれた衛星電話は、ついさっきまで使っていた生々しい形跡があります。なのに白夜様の姿だけがないのです。
「おいどういうことだ。説明しろ」

「おっかしーにゃあ」
「貴様、鍵をかけ忘れたのではあるまいな」
「かけ忘れたも何も、ここって電子ロックで制御してますからね。ロックは自動的にかかりますからね」
「……外から壊されている」
鏡那緒美と名乗った少女は、小さな体をさらに丸めてドアノブを検分していました。
「どうやら賭けは、わたくしの勝ちのようですわね」
意外すぎる声が飛んできて、私たちは顔を上げました。
廊下の奥には、セレスさんと山田さんにはさまれるようにして、白

夜様が立っているではありませんか。しかもいつのまにか、黒タキシードに着替えています。
「フン。絶望ハイスクールよ、つかの間の優越感はたっぷり味わったか？　ここからは希望の時間だ。お前たちは絶望に打ちひしがれながら消えろ」
白夜様はいつもするように、眼鏡に指を置きました。

8

セレスさんと山田さん？
え？
どうして？

「十神君、あなたのお姉さん、かなり混乱しているようですわ」セレスさんは気のどくなものでも見るような目になりました。「説明しなかったのですか」
「していない。敵をあざむくにはまず味方からだ」
「鳩（はと）が豆鉄砲（まめでっぽう）を食ったような顔をしていますわよ」
「いつもそんな顔なので指摘してやるな」
「おどろかせてしまったようですわね」セレスさんが云いました。
「ご安心を。わたくしは本物です」
「デュフフ。当然などという前置きをするまでもなく、僕も本物でありますぞ。二次元でも二次創作でもありませんぞｗｗｗｗ」
　山田さんはキメ顔でした。
「十神君のニセモノ君」セレスさんは赤い瞳をニセモノに向けます。
「なぜあなたは、わたくしと山田君を変装の対象に選んだのです

か？　十神君のクラスメイトはほかにもたくさんいますのに」
「……動機。行動力。金銭力から推理し、この状況下でチェコに現れても不自然さのない人物として、貴様らを選んだ。山田は俺の体形を隠すのにも必要だった」
「うふふ。ニセモノ君、あなたの読みは正しすぎましたわ。わたくしたちが、本当の本当にきてしまったのですからね。わたくしは、今回の事件で自分が利用されると賭けて、チェコまで飛んできたのです。もちろん十神君を助けたあとで報酬はもらいますが」
立場が逆転するのを感じます。
絶望が希望に反転するのを感じます。
「お前たちの悪運もここまでということだ」白夜様は残忍な笑みを浮

かべました。「滅してやる」
「わたくし、活劇はあまり好みませんが、ダーツとカードならお手の物ですわ」
「ゴゴゴゴ……。僕の贅肉バスターを喰らって生きている者はいない。油芋せずに行こう。あ、間違えましたな。油断せずに行こう」
両脇に立つセレスさんと山田さんも臨戦態勢。
「……おろおろ」

那緒美ちゃんはあたりを見回し、反対側の通路がガラ空きなのに気づくと、逃走というには悠長すぎる速度でそちらに向かいました。
「娘よ、どこへ行くつもりだ」
そこにいきなり出現した壁。
筋肉の壁。

『超高校級の格闘家』。
大神さくら。
「大神さん！」私は思わず声を上げました。「い、生きてたのですか。あの地雷原の中を、よくぶじに」
「考えてみれば、我は地雷を踏んでも無傷でいるための鍛錬をつんでいるのであった」
「ああそうですか……」
学園の内外で鬼と畏れられている大神さんは、覇気だけで那緒美ちゃんを後退させると、瞬間移動としか形容できない速度で動き、白夜様の背後に立ちました。
「ちょ…と。ちょ……てば！　ねえちょっと聞いてんの！　アタシも活躍させなさいよ！」

部屋の中で、衛星電話が騒いでいます。
電子関係は自分の任務であるというように、山田さんは自発的に取りに行くと、衛星電話の画面をこちらに向けて戻ってきました。
「おっしゃー。江ノ島盾子ちゃん再登場で読者☆悶絶！　てへぺろ」
画面の中の江ノ島さんは、ペコちゃん人形のようにかわいらしく舌を出しました。
白夜様を中心として存在するのは、輝かしいまでの希望。
ああ。
これが。
希望ヶ峰学園第78期生。
対する絶望ハイスクールは。

「……本物サン、一つ教えてくれ。いつから気づいていた」
「最初からだ。Ａ54と顔を合わせたそのときから」
「なぜ」
「答えてやってもいいが、お前は満足しないだろうな」
「なぜ」
「気づいた理由は、俺にもよくわからん」
「あ？」
「『針の隊』の隊員にしてはノロマだったとか、ゴスロリ賭博女にしては勘が鈍かったとか、今となってはいくらでも理由を挙げられるが、そのときはそこまではっきりとしたものではなかった。論理もなければ証拠もなかった。にもかかわらず俺は、こいつらが本物ではないと確信できてしまったのだ―

「…………」
「そんな顔はよせ。だから云っただろ。お前は納得しないと」
「当然だ。納得できるものか。貴様、ちゃんと答えろ」ニセモノは鼻息を荒くします。「これは俺のミスが招いたものか？　俺の未熟による失策か？　それとも貴様が俺より優れているのか？」
「仲間だからじゃね？」
そう云ったのは、江ノ島さんでした。
「ブーちゃんさ、聞かせてもらったけど、アンタちょっとセコいよ。疑り深いってゆーか、豚汁くさいってゆーか、歩く炭水化物ってゆーか、とにかくさ、十神は仲間のことを信じてると思うのよねわりと」

「仲間……」
「アンタは自分をリーダー的存在と思ってるみたいだし、みんなを引っぱろうと努力もしてるみたいだけど、それって仲間を信じてないってことじゃん。でも十神は仲間を信じてるように見えるんだけど。仲間ってのは、つまりクラスメイトのことだけど」
「仲間を、信じる……」
「十神は信じた。アンタは信じてない。それだけの問題じゃね？」
「うむ」大神さんがうなずきます。「十神とは、そういう漢（おとこ）」
「ふっはーーーーｗｗ　美しき信頼関係を前に、僕の創作意欲も当社比20パーセントアップですぞ！」
「わたくしは、ノーコメントとさせていただきますわ。ここで信頼の話に乗ろうが否定しようが、どなたも信じてくださらないでしょう

し　わたくしを嘘したもう、しませんだら」

仲間を信じる

仲間を信じない

それはどこにでもころがっている退屈な選択肢。学校でも会社でも観察されるありきたりな選択肢。私は今日ほど、そのベタを心強く感じたことはないかもしれません。

ボルヘス=検索結果

♯66590012

項目　感情

タイトル『中間』

[illegible]

ものごとをいっしょにおこなう者。

信頼と連帯を持った同志。

同類。

「戯れは終わったか？」白夜様はいやそうに目を細めました。「くだらん話はべつとして、俺の勝因を挙げるとすれば、十神は同じ手を二度喰らうアホではないということだ。そしてプライドにこだわる愚図は敗北するということだ。こう短時間のうちに何度も肥満体を見せられては、警戒するのも当然だろ」

「おのれ……十神白夜―

「やっとみとめたか。その通り。俺が、俺だけが十神白夜だ。そしてお前は最初から最後までニセモノだ。『絶望小説』の謎も、俺はすぐに解くだろう。世界が俺に降伏の尻を振るのは、世界が俺を王と呼ぶのは、時間の問題というわけだ。そしてお前たちが消えるのもまた、時間の問題というわけだ」
「何を偉そうに……。チェコにきてから貴様は何もしていないではないか。仲間がお膳立てを整えて、のんびりしているだけではないか。独自の活躍をしていないではないか」
「フン。俺のニセモノをやっているくせに、そんな次元の低い話をするとは、お前は今まで俺の何を見てきたんだ。いいか、活躍というのは愚民の仕事だ」
白夜様は努力を否定しませんし、努力しない人間は死ぬべきだと思

っているでしょう。とはいえそれをつづけることが、十神白夜の役割でもありません。白夜様はただそこにいるだけでいいのです。推理だの格闘だの活躍だのといった作業は、子供が喜びそうなハチャメチャ展開は、私たち愚民が手足と成り代わってやればいいのです。なぜって白夜様は探偵じゃないから。戦士じゃないから。軍師じゃないから。
　白夜様は神様です。
「お前の必死さはよくわかる」白夜様はつづけます。「そこはみとめるし、一定の評価もしてやろう。だがそんなものは、十神白夜として存在することに、なんの役にも立たない。つまりお前は十神白夜じゃない。お前は単なる、がんばりデブだよ」
「おのれえええええ」
行動原理を侮辱されたことに、ヒモノは露骨に怒り狂いました。肉まみれ

行動原理を侵害されたことで、人体骸骨は怒り狂いました。肉まみれの顔がぞっとするほど発熱し、豚骨スープのような脂汗が浮かんでいます。このまま怒りの中に埋没して死滅するのではと思いましたが、

「……まだだ、まだ終わっていない」なんとか理性で憤怒を抑えると、佐奈ちゃんと那緒美ちゃんに視線をやりました。「こいつらに、うれしい悲鳴を上げさせてやれ」

最初に動いたのは佐奈ちゃんでした。

さきほどと同じように頭に手をのばして、すべてを剝ぎ取ったのです。髪も皮膚も剝ぎ取られ、佐奈ちゃんだったものが、佐奈ちゃんを形作っていたものが、次々と床に捨てられます。鏡佐奈を構成するあらゆる要素が捨てられます。

現れたのは、新たな少女。

現れたのは、新たな少女

派手な髪色の少女は絶望ハイスクールの制服に身を包んでいて、黒タイツはパンキッシュに破れていました。

「ちょりーっす！　唯吹は『絶望高校級の軽音楽部』こと、澪田唯吹っす！」

つづいて那緒美ちゃんの体がぶるると震えました。やがて震えは全身に広まり、水の分量を間違えたゼリーのように自重に負けて潰れました。

現れたのは、なんか空気がアレな人物。

やはり絶望ハイスクールの制服に身を包んではいますが、長いマフラーや腕に巻かれた包帯、そして某バンドを髣髴とさせるメイクがとても気になりました。

「フハハハハハッ！　恐れ戦くがいい。俺様は人類の敵にして最凶最

悪の存在、『絶望高校級の飼育委員』こと、田中眼蛇夢（たなかがんだむ）！」
残念なことに、どちらにも見覚えがあります。それは希望ヶ峰学園の生徒であり、私の同級生でした。
まただ。
またクラスメイトが暴れている。
ソニア王女や左右田さんと同じく、絶望に染まってしまった？　ニセモノの一味となって世界に、白夜様に敵対している？　どうして。どうしてそんなことを。どうして私には教えてくれなかったの。ねえ、ねえどうして……。
「えーっと、では唯吹がばっちり説明するっすね」澪田さんは意味もなくその場でジャンプしました。「鏡佐奈と鏡那緒美は仮の姿。本当はそんな子は、この世に存在していないのでした。フィクションっ

す！　スクリアルファクションです！」
「フハハハハハハ。『青インク』よ、貴様にさらなる絶望を提供してやろう」田中さんが言葉を継ぎます。「初瀬川研究所なる概念もまた、異次元から召喚され し虚構にすぎん。貴様らが戦っていたのは初瀬川研究所ではなく、傘森製薬工業という通り名を持つ薬剤会社だ」
「祁答院財閥を名乗る二人組も嘘っぱちっす。唯吹たちはまだ正体をつかんでないけど」
真相のオンパレードを脳が受けつけるはずもなく、私は今にも倒れそうでした。嘘だった。嘘だった。チェコにきてからそればっかり。じつは○○だった。じつは△△だった。ずっとそればっかり。
「なんでそんな手のこんだ嘘を……」
私は正当な疑問を口にしました。
「唯吹はまやかしのバンドの可能性には興味深いっす。だから、唯吹に

「叫吹はただのハンドサインの方向性には興味ねーっす。でも、叫吹たちと同じじゃないっすかね。これはみんなニセモノの、嘘の物語。それを嘘じゃなくしようとしたっつーか……平たく云えば、本物には平等に価値がないってことっすかね！」
「そういうことだ十神よ」田中さんが白夜様をにらみつけました。
「時は流れた。もはやここに、本物など存在しない。本物という言葉に縋るだけの、虚しい作業をつづけるつもりはない。そして貴様がいかに本質を語り、本物であることを証明したところで、俺様が登場した以上、敗北する運命なのだ！」
「それで終わりか？」
神様が云いました。
白夜様は……まるで動じていません。
「お前との本物論など聞いていない。一週間後の鳥取県の天気について

―お前たちの本物語など関心がない　一週間後の鳥取県の天気よりも関心がない。なぜなら、十神白夜が終わることは永遠にないからだ。俺がこうして存在するかぎり、好きにはさせん。うんざりするほど、お前たちの目の前を飛び回ってやる。それが気に食わなければ、今ここで決着をつけようじゃないか」

そして宣言しました。

「希望ヶ峰学園VS.絶望ハイスクール。こんどこそ開幕だ」

9

閉幕は突然やってきました。

今まで感じたことのないタイプの地鳴りが響き、天井から埃（ほこり）が落ちてきます。

最初は、人工衛星が落下したのだと思いました。ニセモノが落としたのだと思いました。

しかし。

「俺は何も指示していないぞ」

ニセモノは状況が飲みこめていない顔つき。

なので次に、初瀬川研究所を名乗った傘森製薬工業のことが頭をよぎり、その次には白夜様を狩るためにチェコに集まった暗殺者たちのことを考えました。

予想はすべて外れでした。

地鳴りの正体は、大量の足音だったのです。

「一時休戦だ」白夜様が全員に命令しました。「戦闘再開は、事態を把握してからでも遅くないだろう」

「了解」ニセモノがうなずきます。「俺もちょうど貴様と同じことを云おうとしていたところだ」

希望ヶ峰学園と絶望ハイスクールの総勢九人（ただし江ノ島さんは衛星電話の向こう側）は、ひとかたまりになって修道院を出ました。

村には、大混乱が発生していました。

おそらく村中のすべての人間が出てきて、足の踏み場もありません。

プラハで見たデモが拡大したのではと思いましたが、村人たちが騒ぎ合い、殴り合い、殺し合い、殺され合っているのを見て、考えを改めます。それはどこから観測しても『絶望病』の症状でした。

しかしそれはおかしいのです。

そんなはずはないのです。『絶望病』にかかる前提として、まず『絶望小説』を読まなければなりませんが、チェコ語訳の『絶望小説』が出回っているという話は聞いていません。もちろんボルヘスの情報が遅れているだけかもしれませんが、とはいえわずか数日でここまで拡大するのは考えにくいのです。ですが目の前に広がる光景は、論理的思考など現実の前ではなんの意味もなさないのだと主張していました。

大きな爆発が発生して、村人の一部が紙切れのように吹っ飛びました。どうやら私たちの潜伏を嗅ぎつけた暗殺者たちも騒動に巻きこまれているらしく、あちこちで銃声が響いていますが、質より量といったところでしょうか。流れをとめることはできないようです。

[illegible]

肉の波に迫り、修道院に呑みこまれる寸前でした

「奇妙だな」白夜様はつぶやきます。「こいつらはいつ感染した。少なくとも二十四時間前には『絶望小説』を読んでいなければならないはずだ」

そう云って、すぐ横に立つニセモノを一瞥します。

「ククク。コントロールなどできないのだよ。『絶望小説』という言葉が生まれた瞬間から、だれにもとめられん。それはある意味で、希望ヶ峰学園が考えていた以上の効果を生み出したわけだが……」

「近づいてきましたぞ！」山田さんが叫びました。「コミケ三日目の光景と思えば怖くはありませんが、そう思うには紙袋の所有率が低すぎます！」

村人たちは押し寄せてきて、とうとう修道院の前までやってくると、まずは山田さんに飛びかかりました。

「ひぎゃあーーーーー！　なんとなくそんな気はしてましたがお助けくださいー！　うおふぅ！　いた。いたたた。あｗｗ　でもなんか揉みくちゃにされるの快感ｗｗｗｗｗ　踏まれて快感。快感フレーズｗｗｗｗｗ」

衛星電話が地面に落下しました。

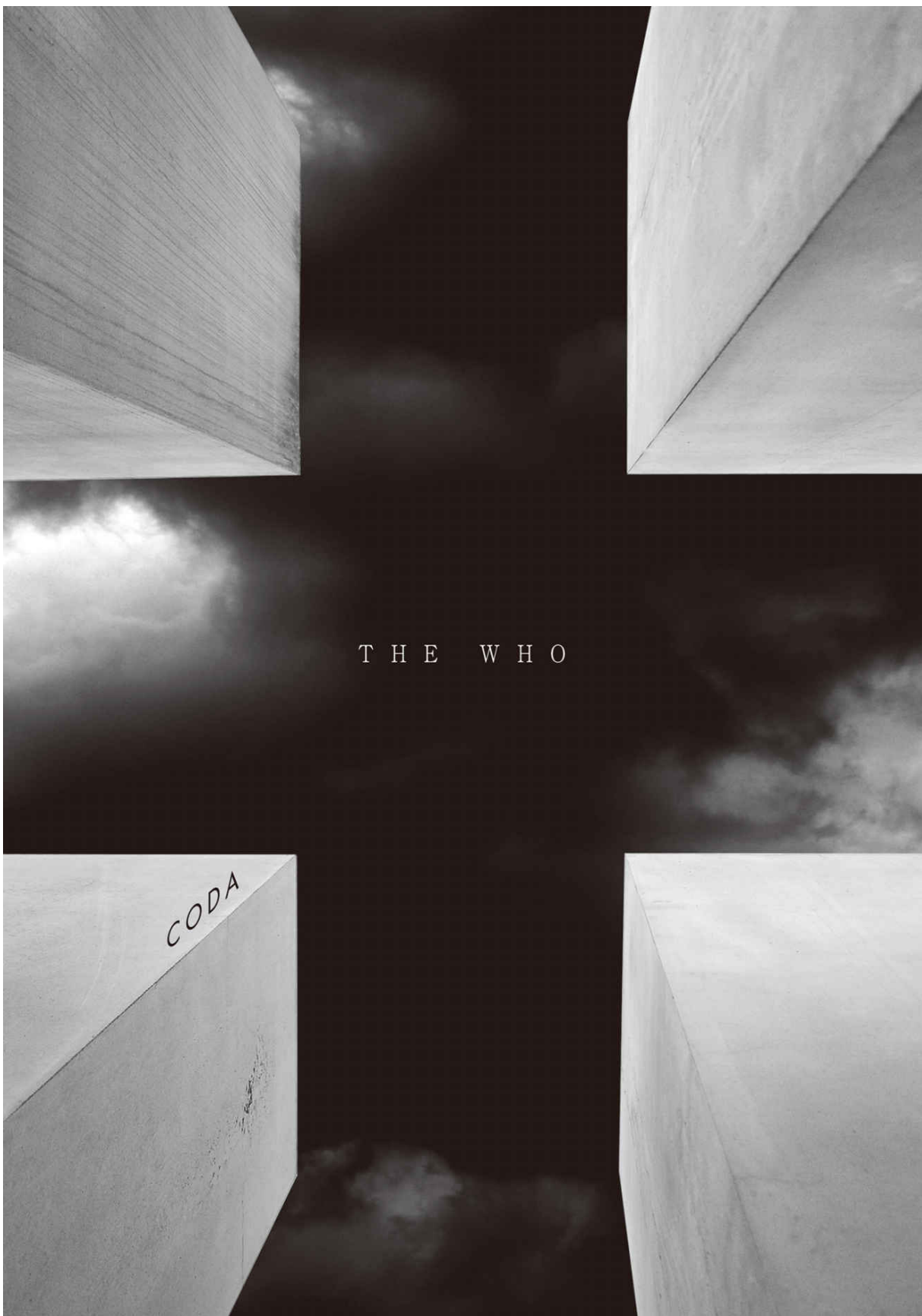
画面が割れ、江ノ島さんの映像が消えます。

「あ、ねえ、コラちょっと……ねえ……なさ……よ！　なんかそっち……よく見えな……わ……って…………なのよアタシは！　………って……のにアタシのこと……どうしろ………………………………え……る？だ……きこえる？」

「私の声が聞こえる？」

混線したのでしょうか。
声がべつの少女のものに変わりました。
「こちら……。私は『超高校級の……』…………よ。この声が届いているると信じて一方的に話すわ。十神君、よく聞いて。『絶望小説』に実体は存在しない。希望ヶ峰学園はおそろしいものを……」
バキッ！
衛星電話が踏まれて、スクラップと化しました。
村人たちは前進。
私たちは後退。
追い詰められる。
え？

これで終わり？
せめて白夜様の姿を最後に見ておこうと思いました。ですが村人たちが隙間を埋めるように割りこんで、私の頭や腕や脚をものすごい力でつかみます。こうして私の人生は終わるのでした。絶望だけを残して。

THE WHO
CODA

薄暗い空から、スポットライトが降ってきました。
天にまします我らが神が降臨したように、強烈な白い光が何本も降りてくるのです。
光のシャワーに気づいた村人たちは、その傲慢な輝きに怒りを抱いたのか、低いうなり声を上げました。まるで村そのものが咆(ほ)えているように。

神罰はシンプル。
慈悲も容赦もない機銃掃射。
弾丸を撃ちこまれた村人たちは死んでいきます。あまりにも簡単に

死が積み上がり、命の値段が暴落し、反論の機会もあたえられず、ただひたすらに死んでいきます。神への不平はゆるされないとでもいうように。

上空には大量のヘリが飛んでいました。

そこから放たれる機銃。

それは雨でした。

弾丸の雨でした。

私たちは修道院の陰にすべりこみ、狂った雨から逃れます。自分の脚が外に出ていることに気づいて、あわてて引っこめた刹那、脚を投げ出していた場所に機銃が撃ちこまれました。

死の雨がようやくやんだところで、そっと顔を出してみます。

村人たちは全滅していました。

『蜂の巣にしてやる』という言葉がありますが、それを体現したような死体が、村全体にころがっていました。頭や胸……いえ、全身をあますところなく撃ち抜かれた死体が、スポットライトに照らされているのです。前を見ても死体。うしろを見ても死体。どこもかしこも死体。子供の死体。若者の死体。老人の死体。年齢も性別もよくわからない死体。死屍累々（ししるいるい）。死屍累々なのです。
『絶望病』にかかっていたとはいえ、対処法が見つかっていないとはいえ、これは虐殺ではありませんか。

　これほどまでにむちゃくちゃな死を前にして、しかし私には怒りも悲しみもありませんでした。感情が麻痺を起こしたわけではありませんし、実際にいろんな気持ちがあふれそうになっていますが、このよ

うな死を作り出した存在に対して、自分の気持ちを表出する気が起こらないのです。

私の怒りも悲しみも、どうせ通じないから。

通じるような相手なら、そもそもこのような死を作ったりしないから。

私は死体畑から顔をそむけると、そのまま視線を空に向けます。

旋回するヘリの群れは、よくもここまで集めたものだとあきれそうになるほどの数でした。さきほど経験した空中戦など、彼らから見ればオママゴトにすぎなかったでしょう。デッキにはスナイパーが待機して、赤いレーザーサイトが加虐的（かぎゃくてき）に地面を舐めています。複数のプロペラが風を切り、そのせいで気流が乱れたのか、妙にぬるい風が舞っていました。

死体の山を照らすスポットライトが私を見つけると、ほかの光も集

まってきて、激烈に明るい一本の線となりました。

やがて一機のヘリが降りてきました。

それはあまりにも巨大なヘリでした。

ボルヘス＝検索結果

♯６１１２３４９０

項目　武器・兵器

タイトル『Mi-26』

旧ソ連時代に開発された大型輸送ヘリコプター。最大定員百五十名。旅客機を吊り下げて飛行することも可能。現在生産されているヘリコプターにおいて世界最重をほこり、軍事・民間とわず運用さ

れている。
チェルノブイリ原発事故では、上空からの消火活動にも従事した。

馬鹿馬鹿しい質量のヘリが、村に降り立ちました。
横っ腹に描かれたシンボルには、見覚えがあります。

これは……。
「タイムパトロール参上！」
ヘリに搭載された拡声器から、ハウリング混じりに冗談が流れました。
ほら通じないと思いました。
「あれ……おかしいなあ。絶対にウケると思ったのに」

杖をつきながら、一人の青年が降り立ちました。

その顔を目撃した私は、すべてを間違えていたことにようやく気づきました。

そう、最初から間違えていたのです。

これは私の問題だったのです。

そんな。

そんな。

吐き気がこみ上げてきました。

青年は私を満足そうに見つめながら、このような問題を出しまし

た。

「ではここでクエスチョン。わたし（Who）はだ（am）れでしょ（I）う？（?）」

いやだ。

答えたくない。

全身が回答を拒絶しています。胸が締めつけられ、うまく呼吸ができません。思考が、認識が、そして理解が、あるべき統一されたかたちを作ることにノーと騒ぎ立てています。めまいがはげしくなり、過呼吸でも起こしたように意識が薄れてきました。このまま眠ってしまいたい。このまま。このまま。

私は歯を食いしばり、呪縛（じゅばく）から逃げようとする気持ちを打ち払いました。

した

だめ。

逃げるわけにはいかない。

だってこれは……私の問題だから。

へりから降りた青年は、死体をまたぐでもなく当たり前のように踏みつけながら、こちらに近づいてきます。

「十神白夜。きみを逮捕(たいほ)する」

白夜様は無言です。

「きみを逮捕する権利がぼくにはあるし、きみは逮捕されるだけのことをやっている。『世界征服宣言』ねえ。なるほど、十神白夜らしい一撃だ。きみは世界というものを信じちゃいないからね。ぼく同様に」

白夜様は無言です。

「それで……これがお仲間か。がっかりしちゃうなあ。十神白夜に仲間は似合わないよ」
白夜様は無言です。
「さっさと孤独に戻るべきだ。あるべき場所に帰るべきだ。なあほら、帰ってくれないか。孤独の穴ぐらに帰ってくれないか」
白夜様は無言です。
「いやだと云ったところで、拒否権はないがね。きみはこれから牢屋の中で、くさい飯を食うんだ。永遠にね。よかったじゃないか。きみの大好きな穴ぐらだぞ。一人ぼっちの穴ぐらだぞ」
白夜様は無言です。
「『絶望小説』については、きみはもう考えなくていい。それはぼくの仕事だ。手はじめに、絶望にまみれた村を壊滅させてみたけど、ど

うかな」
「フン。これが貴様の就職先か」
白夜様はようやくそれだけ云うと、ヘリにペイントされたヘビと杖のシンボルをにらみつけました。
「ＷＨＯ。潔癖なぼくにうってつけの職場だろ？」

ボルヘス＝検索結果
＃３８１１７５０９
項目　機関
タイトル『世界保健機関（WHO）』

『すべての人々が可能な最高の健康水準に到達すること』を目的として設立された国際協力組織。国際連盟保健機関と公衆衛生国際事

して設立された国際協力組織。国際連盟保健機関と公衆衛生国際事務局の事業を継ぎ、一九四八年に設立された国際連合の専門機関。通称ＷＨＯ。

医学情報の統合調整。健康強化のための世界各国への技術的協力。感染症および疾病の撲滅事業の研究。健康的ライフスタイルの促進。災害や戦乱で食糧危機に見舞われた国への援助などを主要事業としている。

ボルヘスからいろんなことを教わっている私ですが、今回の検索結果には不備があると感じました。最後に一つ、この文句をつけくわえるべきです。『健康のためなら軍事介入も辞さない』と。

国連が、世界が、正義が、過去が、白夜様を奪いにきた。

私から奪いにきた。

青年は杖をつきながら歩みを進め、白夜様の正面に立つと、手錠をかけました。
だれも反抗しません。私たちは全員、スナイパーに捕捉されていました。おかしな動きでもしようものなら、額を撃ち抜かれてしまうでしょう。
「はい逮捕……っと。ようやくすべてが丸くおさまった。そうだよ十神白夜。きみのような『世界の敵』は、正義の味方によって倒される運命なのさ。めでたしめでたしめでたし」
青年は希望に満ちた声でした。
その名前は、
十神和夜。
「姉さん、ぼくといっしょに帰ろう。こんどこそ守るからね。そ

う……十神の名にかけて」

（中巻了）

星海社FICTIONS
サ2-03
ダンガンロンパ 十神 中 希望ヶ峰学園vs.絶望ハイスクール
佐藤友哉
星海社
「愚民に朗報を聞かせてやる。
お前がぶち立てた世界征服を、
俺が実現してやろう」
超高校級の御曹司・十神白夜は
絶望の闇に沈むプラハを舞台に
"世界の敵"として世界征服を宣言し、
絶望高校級の才能が炸裂する
刺客たちを迎え撃つ。
そのさなか、ニセモノの禁忌の幕は剥ぎ取られ、
全てのはじまりである「十神一族最大最悪の事件」の
真相がついに明かされる……!
『ダンガンロンパ』×三島由紀夫賞作家!
佐藤友哉による最高傑作、いざ開幕!
佐藤友哉 yuya sato
1980年生まれ。
2001年『フリッカー式　鏡公彦にうってつけの殺人』(講談社ノベルス)で第21回メフィスト賞を受賞しデビューする。
2007年『1000の小説とバックベアード』(新潮社)で三島由紀夫賞を最年少で受賞。近年では純文学をメインフィールドとして活躍している。『星の海にむけての夜想曲』(星海社)、『ベッドサイド・マーダーケース』(新潮社)など著作多数。
高河ゆん yun kouga
1965年生まれ。漫画家・イラストレーター。
代表作に『LOVELESS』(一迅社)、『アーシアン』(集英社クリエイティブ)などがある。漫画家としての活動のみならず、『悪魔のリドル』(KADOKAWA)の原作(作画:南方純)や、『機動戦士ガンダム00』、『UN-GO』のキャラクターデザイン、『うーさーのその日暮らし　夢幻編』の脚本を手掛けるなど、様々な方面で活躍。2015年に画業30周年を迎えた。

星海社FICTIONS
サ2-03
ダンガンロンパ十神
中
希望ヶ峰学園vs.絶望ハイスクール
佐藤友哉
星海社
「愚民に朗報を聞かせてやる。
お前がぶち立てた世界征服を、
俺が実現してやろう」
超高校級の御曹司・十神白夜は
絶望の闇に沈むプラハを舞台に
"世界の敵"として世界征服を宣言し、
絶望高校級の才能が炸裂する
刺客たちを迎え撃つ。
そのさなか、ニセモノの禁忌の幕は剥ぎ取られ、
全てのはじまりである「十神一族最大最悪の事件」の
真相がついに明かされる……!
『ダンガンロンパ』×三島由紀夫賞作家!
佐藤友哉による最高傑作、いざ開幕!
佐藤友哉 yuya sato
1980年生まれ。
2001年『フリッカー式 鏡公彦にうってつけの殺人』（講談社ノベルス）で第21回メフィスト賞を受賞しデビューする。
2007年『1000の小説とバックベアード』（新潮社）で三島由紀夫賞を最年少で受賞。近年では純文学をメインフィールドとして活躍している。『星の海にむけての夜想曲』（星海社）、『ベッドサイド・マーダーケース』（新潮社）など著作多数。
高河ゆん yun kouga
1965年生まれ。漫画家・イラストレーター。
代表作に『LOVELESS』（一迅社）、『アーシアン』（集英社クリエイティブ）などがある。漫画家としての活動のみならず、『悪魔のリドル』（KADOKAWA）の原作（作画：南方純）や、『機動戦士ガンダム00』、『UN-GO』のキャラクターデザイン、『うーさーのその日暮らし 夢幻編』の脚本を手掛けるなど、様々な方面で活躍。2015年に画業30周年を迎えた。
ファン必読の"星海社FICTIONS×『ダンガンロンパ』"シリーズ!
ダンガンロンパ／ゼロ（上）（下） 小高和剛
ダンガンロンパ霧切 北山猛邦
ダンガンロンパ十神（上） 佐藤友哉
サ2-03

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・出来事などとは一切関係ありません。

収録されている内容は、作品の執筆年代・執筆された状況を考慮し、初版発売当時のまま掲載しています。

Illustration　高河ゆん

ブックデザイン　Veia

編集担当　太田克史
編集副担当　岡村邦寛・大里耕平

フォントディレクター　紺野慎一
電子書籍ディレクター　松島 智
オペレーションチーム　阿万 愛＋三本絵理

校閲　鷗来堂

フォント制作協力　字游工房＋リアルタイプ＋凸版印刷

制作協力　新藤慶昌堂

本作品は、2016年4月、小社より星海社FICTIONSとして刊行されたものをe-FICTIONSとして電子書籍化したものです。
e-FICTIONSでは、訂正部分や図版点数などが異なる場合があります。

ご利用の端末によっては、リンク機能が制限され正しく動作しない場合があります。また、リンク先のWebサイト、メールアドレス、電話番号は、事前のご連絡なく削除あるいは変更されることもございます。ご了承ください。

JASRAC 出 9018729001Y43128

ダンガンロンパ十神（中）希望ヶ峰学園vs.絶望ハイスクール

2020年10月1日発行（01）

著　者　佐藤友哉

発行者　太田克史

発行所　株式会社星海社
〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル4F
https://www.seikaisha.co.jp

発売元　株式会社講談社
〒112-8001
東京都文京区音羽2-12-21
https://www.kodansha.co.jp